
突発的に戦極姫（上杉ルート）

布都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突発的に戦極姫（上杉ルート）

【Nコード】

N2826P

【作者名】

布都

【あらすじ】

どこぞで傭兵をしていた“北辰”が気付いたら群雄割拠の時代に來ていた 的な感じです。

タイトルに上杉ルート入ってますが若干、もがみん 入ります

文法がめちゃくちゃです

ゆるーく

更新して行きますので

暖かい感想が励みになります
感想とか、要望とかありましたらよろしくお願いします。
駄文嫌いな方はお戻り下さい

いらっしやいませ群雄割拠（前書き）

お久しぶりです。

また、帰ってきました

いらっしやいませ群雄割拠

「おおっ？」

俺はビツクリしていた。

何故かって？起きたら訳のわからない所にいたからさ！
山だ。

一言で俺は言い表した、流石だ。

自分の分析力に恐怖を覚えながら深呼吸。

「空気が美味しい。」

ふおおおお。

かのような美味き空気、久方ぶりよのお
とか、高笑い（？）をしながらとりあえず山を下っていく。
……変だな。

俺がさっきまで居た場所は地下だった筈だ。
因みに言つと名前は北辰だ。

さらにもう一つ言えば俺は傭兵を生業としていた。
かなり色の濃い変人達と組んでいたのだが

「こんな意味の分からない事になっても動揺しないのは
奴等と組んでて正解だったんだな。」

俺は腕を組ながらウンウンと頷く。
そして俺は目に見える木々を眺めて首を傾げた。

「広葉樹？」

山桜だ。

特に目についたのが淡い薄朱色の花を咲かせた木、
確か日本に生えている　絶滅した木材だ。

正確には世界中の広葉樹は全部伐られてしまったから
日本も例外に漏れずに広葉樹が伐られ、針葉樹に変わった筈だが。

「　ここは日本なのか？」

その時点でおかしい、だってさっきまでドイツに居たのに。
それに、空気が美味すぎる、淀みの無い新鮮な空気だ。

「まあ、そんなことより腹が減った。」

俺は先程から聞こえる水の流れる音の方へ歩いていった。
川なら魚が居るし、腹ごしらえは出来るという考えだ。

サバイバルは得意分野なんだぜ？

答えは返ってこないけど言っておいた。

そうして川に出る。

俺は、着ていたロングコートを脱いで河に入る。　まだ寒いけど仕方がない

俺は動かないようにして魚が戻るのを待ち　　川の中に手を差し込む。

パシャ！と音がして魚が陸に揚がる

こんなふうに暫く魚をとっているとクマが現れた。

「お　　おお。」

野生の熊なんて久々に見た。

クマは魚を採るのに夢中になっている。
どうする？

戦う

逃げる

共に魚を採る

挨拶

俺は共に魚を採るため行動を再開した。
熊さんも同じなのか魚を採りに戻る。

「大漁、大漁。たまらんのう。」

俺は思わず頷き呟く。

クマは気付いたら帰っていった。

因みに魚をお裾分けしたら木の実と山菜と蜂の巣をくれた。

蜂の巣　　本当にハチミツ好きなんだな。

置き土産なんて粋な奴め！

食べきれなかった魚は元から持っていた紐で結んだ。

いつ、食糧がなくなるかわからないんだかね

荷物をまとめて俺は立ち上がると川沿いに歩き始る。

川沿いなら人が住みやすいと考えながら。

山道なんて久しぶりだ、少し和む。

正直に言って、空気が綺麗すぎる。

これなら夜の星空が楽しみだ。

少しくらい息抜きしても構わんだろ、そう思いながら歩く。

「まいった

」

俺は暫く川の辺りを木々を眺めながら歩いていった。

丁度、木々の重なりが無くなり、辺りが見えた場所があった。
見えるは平野。

ありえない。

こんな場所はもう無くなってると思っていた。

いや、無くなっている筈だ。

無闇に開発を重ねた世界からはこんな自然は消えた。

今日は新しい発見ばかりだなあ。

そして

目の前には明らかに大昔の家。

俺は木で造られた扉を叩く、反応は無い。

俺は扉を開けて すみません、外れました。

扉がバターンと壊れてしまいました。

俺はどうしようかと考えた結果、扉を地面に退けて中に入った。

囲炉裏が見える、大分埃が溜まっていると思いつながら奥へ進む。

家の作りから日本だと断定する。

やはり、ここは日本なのか。

「お邪魔します。」

俺は奥の部屋に白骨を見つけた、恐らくこの家の家主なのだろう
やはり、昔の服装だ。

家主がいらないなら朽ちる前に使えるものは貰っておくか。
先ず、最優先で服が欲しい、服装が変だと疑われるから。
そう思い俺は部屋の籠を開けた。
中には丁寧に畳まれた着替えが入っていた。
貰っていいかな。

【服を手に入れた。】

とりあえず、俺は役に立つ物を強奪した。
そうして扉を律儀に戻すと一気に山を降りた。

「う、うわあああん!!」

助けてください。

俺は空を見上げて呟いた。

もちろん泣いたのは俺じゃないよ？

森から飛ぶようにして降りた時、目の前に小さな女の子がいて。
結論から言うと 怖かったのか泣かれました。

幼女を前に何も出来んとは 老いたものよ。

昔は片っ端から愛でたのに。

いや、今からでも遅くは・・・

「や、山姥だああ!!」

「黙れ小僧! (もの○け風)」

俺が用あって日本に言ったときに見た映画の台詞だ。

まったく 野郎はいらん、女の子だけで充分だ。

「って、ヤバイ！何か沢山来た！」

昔っぽい服を来た、なんか農具を持った人が騒ぎながら来た。
凄い・・・なんて対応の速さだ！

逆に凄く感心する対応の速さ

俺は咄嗟に隠れる。

俺は隠れながら話を聞く。領土？

なんたら様？

なにそれ？

俺は先程の家に逃げた。

ソコで先程、後で読もうと強奪した文献を読む。

室町幕府にも秋が

とりあえず、見開きページの四文字

室町幕府

「なん だと？」

傭兵を生業とする無法者だけど勉強とかは教えられてる。

なんか、最年少だからと無理矢理教えられたけど

こんな所で役に立つとは思わなかった。

いやいやだけど習ってて良かった。

軍事とか生活の知恵とかは真面目に学んだけど

次あるときはしっかりと学ぶよ。

でも知ってるのは時代の流れぐらいだけだね！

しかし俺は確かに納得する。

俺が居た現代に、その時代の日本に木造の家は有り得ないしこんなに澄んだ空気は無い。

どうやら俺は群雄割拠の時代に来てしまったらしい。

とりあえず、近付いて来ている先程の農民に追われるように山から追い出された。

話とか場所帰る合図

俺は戦慄を覚えていた。

時間を遡ること少し前。

前回の事から人に会うのが山を怖くて歩いていた

実は単に目的無く歩いていたら山に迷い込んでいたのだが

その事がありながらも

山に果敢に挑んでいると（遊び的な意味で）川を見つけたので魚を採る。

そして、奴は現れた。

最初は仔猫が寄ってきたと思っていた。

俺はこの時、焼いていた魚を千切って仔猫にやった

前足で魚の切り身を動かして熱を逃がす

この時はやけに頭がいい仔猫だと思っていた。

俺は和みながら、魚を細かく砕いて譲っていた。

「はっはっはっ水が欲しいってか」

俺は竹の水筒から水を葉っぱで作った皿にいれて置いた。
ぴちゃっぴちゃっとな水を飲む
俺は横目で見ながら魚を食べた。

「んー。ありがとう。」

びたり。

俺は回りを見て、視線を下げて仔猫を見る
仔猫は顔を手でかきながらもう一度

“ありがとう”
と言った。

いやぁ童のような声よなぁ

「ふ、ふおおおう!!」

俺は変な叫び声をあげた。

手にした(熱々の)魚が落ちて俺の息子に

熱!!

ぎゃあああ!!

そして、仔猫を見る

「コレが東方の怪異か!!」

「怪異!? 知猫だにや!!」

あ、語尾が猫になった!

俺は戦慄を覚えながら手を差し出す

「お手。」

「それ犬!!」

間違いない　喋ってる。

そして猫にしては良い突っ込み。
喋る猫なんていたのか。

「知猫って　なに？」

とりあえず疑問を口にした。

結果

知猫

猫型フェニックス

代々の記録（記憶？）は受け継がれるらしい。
つまり、喋れる図書館型猫？

怪異と何が違うんだろう？

「うん、意味わからん。」

俺は北辰だ、名前は？」

「キクゴロー。」

「鬼駒護　？ヤケに強そうな名前だな。」

特に（ロー）が。
ギリシア文字の一つで、

小文字「」は、
物理学では密度、電気抵抗率を表す。

「なんか勘違いしてない？」

俺は薪に砂をかけて火を消すと支度をした。
支度といっても荷袋を持っただけだが

トン

肩に軽い衝撃。

ま・さ・か？

「そのまさかだよ」

尻尾でぺしぺしと背中を叩きながら言ってきた。
ついてくる気だ。

「はああ、コレが女の子なら嬉しいのに。」

「僕みたいな可愛い猫がきてくれて嬉しいくせに」

「はっはっはっ、嬉しすぎて涙が出るよ。」

「にやははは」。

それで北辰は何処に行く気なの？」

「いや。此処が何処かもわからん。

だから北に進んでる。筈。」

「ふうん。まっ、ついたら起こして」

「おお、たっぷり肥れ非常食。」

「!？」

「冗談だ。しかし参ったな。」

「崖　だね

にやわ!？」

俺はキクゴローの首根っこを掴んだ。

「前か下か？」

「そ、それはどういう」

キクゴローが目を白黒させて聞いてきた。

俺はじゃあ前だと言って、遠投した。

向こう側の距離は二百m位。

キクゴローが叫ぶ。

俺は空中で、鎖付きの短刀（強奪品）を投げ、目標地点の木に縛り付けた。

俺は重力に縛られて落ちる前に

鎖を引っ張る、当然、木は動かずに

俺が引き寄せられるようにして元居た崖から

向こうの崖、つまりは今居る崖に辿り着いた。

ちゃんと空中でキクゴローを回収する。

そして俺はキクゴローを掴んでいた手を離した。

どしゃ

どしゃ？

猫が横たわっていた。

もっと軽やかに着地すると思っていたのに。

「キクゴロー？」

「
」

マジでか？

死んでしまった？

俺は足でつついたが反応がない。

俺は墓穴を掘る。

「来世では幸せに暮らせ。」

「にゃあああああ！！」

砂をかけた瞬間、起き上がった。

いや、甦った！？

「ええい。この猫は化け物か！」

「気絶してたよ
」

猫さんがいいました。

僕は死んだと勘違いしてました。

「良しわかった。」

次からは気を付ける（持ち方を）。」

「本当、気を付けてよね（渡り方を）。」

若干、勘違いが発生した気もするが気のせいだろう。

俺は山を二つほど登り降りして、昼食を摂ろうと

干物にしておいた魚を火で炙る。

「北辰って人間？」

キクゴローが伸びをしながら聞いてくる。

俺はその問いに苦笑して答える。

「どちらかと言うと化け物じゃないかな？」

「そう言われると困るんだけど。」

アレだけ歩いたのにまるで疲れてないし速さだって凄い速さだよ？

匂いだって何て言うか、こう「

「臭い？」

俺は袖の臭いを嗅いだ。

そんなに臭いのかなあ？

「臭く無いんだけど、匂いじゃなくて気配が人間離れしてるみたい
な。」

「化け物じゃないか。」

まあ、細胞の突然変異のなんかだっって言われてるよ。」

なんか、身体のリミッターが外れてるって言われた事がある。

俺は魚を地面に置いて渡した。

キクゴローが其をいただきます

と言って食べ始める

うん、喋ってるねえ。

耳とか捻ると身体が割れて実は中に小型宇宙人が入っていたんだ！！
なんてことは

「ないよな。」

うん。ない

ないよね

ない

「《モキユ》にゃ！？」

「ないよな。うん。よかった。」

気にせず食べてくれ。」

ああ、良かった。

彼は立派な非常食だ。

俺は安堵の息をつきながら水を飲む。

「まっ、俺は不老だからね。」

俺が居た傭兵部隊はみんな同じ突然変異体だから
例外無く変態で不老だった。

「何言ってるの??皆そうでしょ。」

不老になる成長具合は人各々だけだね。」

なん だと?

つまりは 成長の止まりは人各々なわけで。

ええい!!

また合法ロリが現れるのか!!

因みに俺等は肉体が最高潮の時に老化が止まった。
俺はまだ、成長するらしいが正直あまり知らない。

「そーだったな。」

つまりは少女は至高と言うことだな?」

「!?!」

「おおっと、変なことを口走ってしまった。」

しまった、ちよつと地が出てきた。

「
咎人？」

「何を馬鹿な、俺は少女は愛でも手は消して出さない
最高に礼儀を弁えた変態（男）だ。」

「
所で何を作ってるの？」

「ん？木の投げナイフ」

「ないふ？」

「投げ刀？」

「何で疑問系？」

「さあ？」

俺は、元々持っていた（野伏りから奪った）刀で
木を削って投げナイフを作っていた。

「木で作った小刀は斬れないよ？」

満腹になって眠くなってきたのか前足で目をかきはじめる。
ヒュン

ぶぎいいいいいい！！

森の中で叫び声がこだました。

ぴょこん！！ではなくシュバツ！っと
キクゴローの尻尾が立った。

「寝るなら木の上で寝るよ。」

俺は、猪を回収しながら言う。

投げた木製の刃は猪の眼球から隙間を縫うように侵入し、猪の命を奪っていた。

「もしかして 忍者？」

「いや。そーゆー訓練は受けたが違うな。」

正確には、どっかの変態だ。」

「ふーん。深くは聞かないけどありがと。」

俺が猪を捌いている間にキクゴローは寝てしまった。木の上で寝れって言ったのに。

つーか、変態発言はツツコミ待ちだったんだけどな。とりあえず、今日は此処で休むことにした。

温泉か幼女？ やはり幼女がメインだろ。
(前書き)

本編はまだ先になりそうです

温泉か幼女？ やはり幼女がメインだろ。

「知っているかキクゴロー。」

温泉はな、必ず女の子と遭遇するんだぞ？」

あの後、暫く歩き回り、北に行こうとしたけど南にキクゴローの知り合いがいると聞いたので俺は進路を変更して南に向かっていった。

熊さんと食料を交換したり

熊さんと戦ったりと

まあ比較的平和的な時間だったと言えるよう。

そして五日ほど走った後、俺は温泉を遠くに発見して言った。
もちろん、コレは決定事項 の筈

「こんな山奥の温泉に？」

俺は無言でキクゴローの腹を軽く蹴った。
わかってるよ わかってるけど！！

男には諦めきれないモノってあるだろ？

俺だって 俺だってなあ

「たまには癒しが欲しいわけよ。おわかりかね」

「うん。多分無駄だよ？」

「ばか野郎！なんたら補正を舐めんなよ！！

先に放り込んでくれるわ！！」

俺はキクゴローの首根っこを掴み走り出す
とりあえず、夢を破壊した罰じゃ！！
しかと温泉に漬け込んでくれるわ！！
俺はキクゴローを温泉に投げ込んだ。

「に、やあああ、あゝ！！」

お湯は！お湯だけはやめなやあ！！」

ざぱーん！！

そして俺も服を着たまま飛び込んだ。
はふう、温泉だねえ。

何でだろう・・・なごむ。

俺は温泉にゆつくりつかった。

「よきかな、よきかな」

温泉は日本の魂だねえ

キクゴローは、ばしゃばしゃと陸地に上がった。
早い！！

まあ、いいや。

俺は久々の温泉に心を和ませる。

「うはあ、温泉だねえ」

一時間後

俺は心で泣きながら立ち上がった
こーゆー時の主人公補正では無いのか。
いや、主人公じゃなくても願えば・・・

願うだけじゃ奇跡は起きないって事か。

一時間、粘ってみたが結果は0。

何故か待ち合わせをすっぱかされた気分である。

しょうがない、悲しみから泣くか

ゆっくりと湯を上がり、女の子を捜しながら

服に染み込んだお湯を絞った。

俺は近くに居るであろうキクゴローに話し掛ける

「さて、キクゴロー。」

確か知り合いの名前は角隈石そ
なるほど。

此処で補正が来たか。

少しばかりずれているがまあ良いでしょう。

しかし、

きよにゆーのお姉さまではなく。

振り袖の幼女（車椅子乗り）を用意するとは

よろしいじゃないか。

俺は、濡れたままの服を羽織って向かい合う。

「えーと。こんにちわ」

ギコギコ

しゅぱぱぱぱあー！！

擬音ですみません。

逃げられました。

俺はコフツと言いながら崩れ落ちる

俺は膝について己の不甲斐なさを嘆いた。

あれ？車椅子ってこの時代あったか？

二時間後。

「あ、いたいた！アレだよアレが北辰」

「キクゴロー 何処行つてたんだ。」

キクゴローの声が聞こえてさらに人の気配がした。
俺は首だけあげてキクゴローの隣の人物を見た。

「北辰と申します」

「角隈石宗と申す」

チツ！老人かよ！！

いかんいかん。老人を労らねば。

そんなこんなで俺は屋敷に案内された。

場面変更的な言葉

「はあ。この白髪、目立ちますか？」

パチン

「然り。さぞ、苦勞なされた事でしう」

パチン

俺は何故か将棋を差していた。
急に誘われたのでつい頷いてしまったのだが
此が中々、面白い。

実は何回戦目かも記憶していない。
勝っても負けても自然と次の勝負に移るのだ。
因みに言つと今更だが俺は白髪である。
真っ白というか灰色だけど　良いだろ？

「よく飽きないよねー。」

将棋も碁もやりつくしたんじゃないの？」

キクゴローが尻尾を揺らしながら呟いた。
最近はずっとねっころがつている。

飯を食うばかりで非常食位の役割しか出来ない。

「そうでもないな。」

将棋の差し方1つで相手の考え方も価値観もわかるものだ。
それが年齢を重ねた相手なら尚更だ。

「そうじゃな。」

石宗さんも肯定する。

「ん？おお、八幡丸ちゃ　殿。どうなされた？」

あの時の車椅子少女が現れた。

俺は近寄ってきた戸次八幡丸を膝の上に乗せて、髪をほんわかしながら指で撫でた。綺麗な黒髪を透くように撫でる。

何故、こんな羨ましい事になっているかと言うと

温泉で逃げられた後、角隈石宗殿の屋敷で何故か遭遇。俺と彼女は壮絶な攻防（拒絶されるのが怖くて俺が動けなかった）を得て、見事に和解。

どうやら石宗殿に兵法を学びに来ているようだ。

石宗殿はおーとも家（大友家）の軍師的な役割らしい。

軍師　　なんか、かつこいい。

俺はと言うと、八幡丸ちゃんからは同じ学を学ぶ仲間と勘違いされたのか

この屋敷でのみ兄様と呼ばれる

ふふふ　　羨ましかろう。

幼女、幼女　くふふふふふ

「はっ　　危ない危ない。」

俺は首を振りながら呟く。

いつのまにやら移動したキクゴローが

もう、手遅れじゃないかな

と呟いていたが恐らく気のせいだろう。

「兄様。旅に出るとは本当ですか？」

「うん。もう少ししたらね。」

「私はそうだんをうけていません」

「誰にも相談していないからね。」

なんでわかったんだろう。

俺はもう少ししたら旅に出ることにしていた。
きっと角隈さんが言ったんだな。

「何か下さい。」

「ふむ。」

珍しい、この子がそんなことを言うなんて。

戸次八幡丸は元々、聡明な子だ。

仮にも武家？の子がそんなことを言うなんて。

物をねだると言うことは弱味を作ることらしい。

「そうだな。」

俺は声を出しながら懷から布に包まれたモノを出す。

これは俺が予め戸次八幡丸に渡すために用意したものだ。

「これなんかは、以下がですか？お姫様。」

俺は布を取って見せるようにする。

ソレは桜の花弁の一輪挿しを模した

とある鉱石で作った髪留めだ。

ソレを見た八幡丸ちゃんは無言で受けとると

暫く見て俺に向かって返してきた。

俺に向かって無言で返してきた

俺に向かつて返してきた
俺に

そんなに気に入らなかったのか。
ああ もう、疲れたよ

「ちよつくら、旅に出てく
」

指を捻られた。

正確には人差し指を掴み捻られた。
誰に？もちろん、八幡丸ちゃんに
痛い 非常に痛い。

コレは拷問か

八幡丸はジーンと見ている。
ついでに指が捻られている。

北辰はどうする？

撫でる

謝る

土下座

逃げる

土下座とみせかけて逃げる

アンサー 謝る

「髪に挿しては如何か？北辰殿。
」

石宗殿が助言してくれる。

「む。」

だが、俺がつけていいのか？

八幡丸はジーンっと俺を見ている。

八幡丸ちゃんはジーンっと俺を見ている

北辰はどうする？

髪に髪留めを挿す

逃げる

土下座

眠る

まあ、結果は一つしかないから髪留めを手にとる。

俺は左の髪にスツ、と取り付ける。

「これは、ぜひ、お礼をしなければなりません。」

「はい？」

八幡丸は車椅子の裏から何かを取り出した。

「扇子　いや。鉄扇か。」

「つけとってもらえますね！！」

姫様、！！は確定の強調ですね？

うわぁ。うれしいけど

うれしいけど なんだろう。

将来、ややこしい事になりそうだ。

理由はないけど、なんだろう

なんだか、確信が持てそうだ。

いや、何故か確信した。

「では。ありがたく頂戴いたしましょう。」

しかし、俺にその期待の眼差しは裏切れない。

「はい。」

花のような笑みを浮かべる。

あれ？

何か黒い どす黒い笑みが見えた気がした。

何処へ行こうか（前書き）

すみません繋ぎです

何処へ行こうか

「題名通りだよ」

「誰に言っているの？」

「誰かに。」

俺は、とりあえず南に行こうと思ったが
なんか、町中で南蛮人が俺の髪と眼の色を見て

悪魔だ！！

とか、ほざきやがったから殴り飛ばしたら
選択肢 仲間を呼ぶ

を行使したため、たくさん南蛮人が現れた。

俺は南蛮人（男のみ）を殴り飛ばしながら逃亡した。
え？女の子？うん、揉んだよ？

何をつて 何かをだよ。

「肌には寒いが義理人情は厚い北に行こう。

癒されたい。癒しが欲しい。」

あんなこと言われたら泣きたくなるよ
そう言えば途中、戦場を遠目で見て陶隆房とやらをみたが
あのトゲ付き肩当てはなんだろう
ショルダータックルでもするのかな。

西なんたら無双とか言っていたな。一瞬、昔見たアニメの某司令官を思い出したぜ　あ！

司令官は、戦いは数だよ兄やん！

だったけど陶隆房は、無双とか言っていたから単体がふむ。残念だ。

「えゝ、寒いのだー」

肩の上でキクゴローが呟く。

「なら、来なければ良いのに」

俺は思ったことをそのまんま口に出した。

「面白いから。」

即答だった。

そんなに面白いか？

俺は首を傾げながら貰った鉄扇で風を扇ぐ。

「あれ？その鉄扇。開　ひら　けるの？」

「ああ。」

こんな見事な一品貰っちゃったからな。

近い未来、報復が来そうでなんか怖い。」

総鉄扇のクセに開閉が出来る。
しかも、見事なほどの出来だ。
一枚一枚、鋼だし。

「この時代の鍛冶屋は凄いんだな。」

こんな高価なもの本当にいいのかな。」

「なら一生、八幡丸にお仕えしたら？」

「向こうが嫌がるさ。」

キクゴローは旅は嫌いかな？」

「んー。」

普通の旅は好きだよ。普通の旅はね。」

「まるで、今が普通じゃないみたいじゃないか。」

「普通の旅は豊後から播磨まで一日じゃ移動できないよー!」

「本気でやれば沖　琉球から蝦夷地まで行けるぜ!半日で!」

「半日!?!」

「ただ、キクゴローが粉々になるけど!」

「なんでそんなに嬉しそうなの!?!」

「何を馬鹿な！」

「馬鹿は北辰だよ!!」

「じょーだんだよ。」

俺は欠伸をしながら歩く。

「とりあえず全国を回ってみたいんだなあ。」

「回りきつたらどうするの?」

「んー。隠居生活おくって晴耕雨読の生活を送る。」

「なら全国廻らなくてもいいよね」

「いや。可愛い女の子を見て英気を養いたい。」

「北辰って欲望に忠実だよなー」

「そんなもんだろ?」

「そんなもんだね。」

他愛のない会話をしながらまた歩き出した。
そんなこんなで加賀。

町中で甲冑姿の人（子供）が颯爽と働いていた。
正確には、見回りらしきことわしていた。
童と言うにわ大きく。

大人と言うには小さい。

「綺麗な男の子だねー」

キクゴローが肩の上で呟く。

「男の子？何を馬鹿なことを。」

俺はキクゴローに対して落胆を隠さなかった。

「女人だ。」

「え！？甲冑だよ！？」

そう、アレは男物の甲冑だ。

「俺の鼻は誤魔化せない。」

「うそお」

そんな会話をしている間に揉め事を起こしていた
男が甲冑幼女（北辰の幼女定義）にボコられてこちらに逃げてきた

「どけえ！」

「うえあ。」

俺は意味のわからないことを言っ
て前蹴りを繰り出した、あれ？足の裏に変な感触

「おふっ」

北辰は男を倒した。

北辰は六の経験値を手に入れた
テンションが45下がった。
幼女が現れた。

「ねー、ねー。本当に女の子なの？」

「ね、猫が話した！？」

そうか。知猫は珍しい生物だったんだな。

俺は麗しの甲冑幼女を観察していた。

しかし、付き人が居たので撫でることは叶わなかった。

この時代は聡明そうな娘がいっぱいだな。

だが、なんでこの時代の服とかは異様に進んでるんだ？

まったく けしからんじゃないか！

だが、流石は日ノ本。

スカートが無いからスカート捲りがだせない。

アレだけ練習してたのに。

しかし、日ノ本の神秘。

和服の素晴らしさには脱帽だぜ。

とりあえず、加賀を抜けて越後に渡った。

「ウサギだ。」

「ウサギだねえ。」

越後の湖でバツシャバツシャと音がしていたから

俺とキクゴローは湖の畔まで行くと丁度。丁度、湖の中心に飛び出る二本の耳。

失礼しました。

飛び出る二本のウサ耳。

二本のウサ耳

ウサ耳

ウサ耳

「ウサ耳だウサ。」

「北辰？」

「どうやってあの距離まで行つて溺れたか不思議だウサ。」

ちよつと、行つてくるウサ！！」

俺は湖に飛び込んだ。

そして、目を見開く。

女の子！？これは不味いな。

俺は水を蹴った。

沈み逝く女の子に素早く到達すると、脇に手を通して畔まで泳いでいく。

「北辰どうだったって 女の子！？」

俺は女の子を横向きにさせて背中的一点を指で押す。

ゴキッ

奇妙な音がしてから、女の子が水を吐き出した。

「はいはい、失礼っ」と

次は身体を中心線、胸元を指で押す

また、奇妙な後がした。

俺は女の子をねっころがらせた。

「しまった、救助と称して服はだけさせればよか」

絶句した。

既に露出気味になっていた事にはない。
はだけていた服ではない。

「けしからんな。」

なんて、お胸様。

まだ軽く幼さが残る顔立ち。

頭につけるはウサ耳。

珍しい桜色の髪色さえも霞ませる

そう、二つの山。

お胸様。

ソレは俺達男子を虜にする道具の一つ。

いや、神宝か。

どうすればいい。

俺はどうすれば良いんだ？

「んっ うっ ん」

やめてくれ！俺の体力はもう！！

だって濡れてピツシリ肌に服が張り付き

かつ、帯はほどいている上に胸の半分からは生乳なんだよ！！

俺は、急いで後ろを向いた。

危なかった。非常に危なかった。

「とりあえず、火だ焚火をしよう！」

俺は高速で火を起こした。
どれぐらい早いかと言うと指パッチンで火が点くくらいだ。
俺は、火が大きくなる間に濡れた服を振って一瞬で乾燥させた。
ソレを被せる。

「危ないところだった。」

俺は地面に座る。

「ウサギじゃなかったね」

「まっただ。」

もしコレがウサギなら俺は神様を信望する。」

替えの服を出しながら、キクゴローに答えた。

しかし、この時代からコスプレに目覚めるとは

できる。

しかし、この胸はけしからんな。

実にけしからんな！

そして。

十三時間後。

「起きないねー」

「起きないなー」

更に七時間後

ムクリ

「あ、起きた。」

「むっ、服は落ちなかったか。」

「お腹空いた」

だよねえ」

俺は焼魚を差し出した。

おお、食べるねえ。

モキユモキユ食べるねえ。

「ありがとう」

「うん。気にするな」

むしろ俺がお礼を言いたいよ。

すると女の子はウサ耳をぴよこんと動かした

ウサ耳を動かした

ウサ耳を　動くの!?

それ動くの!?! キクゴローは行動を止めた。

「帰らなきゃ　ありがとう」

「お、おう。」

記憶が混乱しているのか、トタトタと帰っていった
多分、溺れたの覚えてないな。

トラウマを思い出させることもあるまい。

あの調子なら帰れるだろう　恐らく。

「そして何よりも、服が奪われた。」

俺の服を羽織ったまま消えていった。

「ねえ！ウサ耳動かなかった！？」

キクゴローがやっと再起動する。

俺とキクゴローはこの後、暫く世界の広さに驚きを覚えていた。しかし、けしからん胸だったな、可愛い娘だったし。そう思いながら、また歩き出した。

山ノ神との邂逅（前書き）

上杉家クリアーしました
あれ？ストーリーが全然

お・ま・け

「所で、山姫ちゃんはどうしてそんな格好を？」

「だから、ちゃん、と呼ぶなと。

所で北辰、そんなに变か？」

山姫ちゃんは藁の服を摘まむ。

そうすることで、つられて山姫ちゃんの胸も揺れて

しかも

隙間から山姫ちゃんの白磁な柔肌が見えるわけで、その
眼福で

「いや、その な？服の隙間から肌がな？」

その瞬間、俺は顔面を殴られた。

「とりあえず、俺の服なら」

山姫ちゃんは驚くほどの早さで奪い取った。

おまけ、終

山ノ神との邂逅

「 キクゴロー。」

「うん。逃げた方が良いよ。」

俺はキクゴローに話しかけた。

キクゴローは俺に向かって返してきた。

あれから暫くぶらり旅をしていた俺達は陸奥の山奥に来ていた。
肌寒い季節が来て寒いな―

とか思いながら山を歩いていたら 女の子が現れた

女の子が現れた

女の子が現れた

女の子が現れた

まず、条件を言っておこう。

- ・ 此処は山奥で普通の人が来るような領域ではない。
- ・ 女の子は居たのではない、現れたのだ。
- ・ 誰も居なかった筈なのに忽然として現れた。

因みに女の子の服装は、和服である（日本なので当然）。

だが、汚れなどが一切無い、そして明らかに人間の気配ではない。

こう、邪気が無い。

翠の髪色なんて初めて見た。

「やばいよ多分、山ノ神だよ。」

「先祖様が言ってるもん。」

キクゴローが小さな声で話し掛けてきた。
ご先祖とはキクゴローの中に居る前のキクゴローの事だ。
死んだら、記憶として受け継がれると聞いたが、
きつと、キクゴローはキクゴロー（ご先祖）と脳内会議したのだろ
う。

「なんで気付かれてないのかはわからないけど」

キクゴローがまた小声で呟く。

山ノ神とは山そのものだ。

だから、山の事なら全て把握しているはず。

人前に姿を現すことは無いと聞いたけど

怒らせたら終りだ。

一応、分類は人間の俺と神では分が悪すぎる。

俺はくるりと身を反転させてその場から離れた。

「へ？」

「え？」

マジでか！？

わざわざ、俺の目の前に現れやがった。

しかし、文字通り現れた。

前兆なんて無いに等しいじゃないか！

「きゃ」

「きゃ??？」

次の瞬間、俺は耳を押さえた。
叫ばれたのだ。
そこら辺の娘の叫びどころではない。
声だけで身体の節々が痛くなる。
具体的には裁縫針で刺されてる気分だ。

「山ノ神!!」

草のガサガサという音と女の子の声がした。
俺は耳を押さえながら刺すような
痛みを乗り越え瞳を開いて声の主を探る。
また、女の子か。

キクゴローは山ノ神が叫ぶ寸前に投げ飛ばしたから被害は無いだろう。黒い長い髪の女の子。

なんだあのセクシーな服装は！けしからんな
どんな服装かと言うと

裸+蓑

どうかね？想像できるかね？

俺は見てるから言える　逆にシニールな絵面だと。
しつつかし、今日は美人のエンカウト率が高い。

女の子が突進、してきたので俺は肩に手を当てて
止めようとするが　押し倒された。

見た目に反してなんて力だ！

やばい、女の子すごい良い香り。

すると女の子は噛み付こうとしてくる。

噛み付こうとしてくる。

いや、これは怖い。

Tウィルスか？

俺は力を入れて拒否する。

「黒髪に白肌　そして蓑の服。

山姫か！」

俺はソコでこのゾン　女の子の正体に気付く。

山姫　妖怪の一種

だから、半裸に近いのか。

この時代から露出プレイとは恐れ入るぜ。

「人間が何故つ　此処に居る！」

「物見遊山だよ！！はなせー」

実際はこのアングルから見える山姫の美しい肢体（主に胸元）を凝視している

だが一応、はなせーと言っておいた。

役得！役得！

「人間がこんなところまで物見遊山に来るものか！！」

「なら、旅をしています！」

俺は血を吸われないように頑張る。

山姫に血を吸われると死んじゃう！

だって、検索サイトが言ってたから！

ぬおおお！なんて力だ！

コレが妖怪パワーか！？

こんなセクシーな姿で押し倒してくるなんてやるじゃないか！！
だって半裸に蓑の服だぜ？

「なら？嘘だったのか！！」

「あんたが否定したんじゃないか！」

「あ、あの」

「五月蠅い！！今、此処で死ね！」

「ふはははは！俺は孫に囲まれて安らかに死にたいのだよ！

女の子に血い吸われて死ぬパターンは無いわ！」

いや、マジで。

この状況は歓迎だけど死にたくない

「ぱたん？なんだそれは」

「やめなさ　　いつ！！」

痛烈な叫び声。

耳が！耳があ！！

俺は耳を押さえてのたうち回った。
ドン！

あれ？

何かに当たって俺は動きを止める。

つかえ棒みたいな　俺は目を開いて上を見る

ニヤリッ

山姫ちゃん？

その、チャーンスみたいな笑いはなんだい？

そしてNice乳

下から見ると横乳ならぬ下乳が　ぐへへへへ

って、やばい！まだ身体が痺れて！

身体が麻痺する効果は卑怯だ。

「やめなさい！！」

山ノ神ちゃんありがとう！

健気な可愛い声もありがとう！

今だけは山ノ神の足元に居るキクゴローにもありがとう！

説得してくれなければ、どうしようもなかった！！

キクゴローが山ノ神と話をしたらしい。

この後、山ノ神は謝ってきて山姫ちゃんは睨んできた。

あれ？なんか山姫ちゃんの方が偉そうだぞ？

「つまり、新米の山ノ神である君は

自分の山を探すために旅に出ていると。

で山姫ちゃんはお供って事だな？」

ちゃん付けしたら睨んできた。
ちよつとだけへこむ。

「はい！そうなんです！」

元氣だねえ

俺はまだ鼓膜が痛いのに。
なんで殺されそうになつたんだろう。

「では。頑張つて下さい。」

「はい！頑張りました！」

頑張りました？

ましよう！？

いやいやいや。

多分、聞き間違えた。

このパターンはいかな！

非常に美味しいけど

命的な意味で非常に悪い！

「じゃあ。俺はコレで失礼するよ。」

ハッハッハッと笑いながら場を抜けようとするが。
ガシッ

痛い 肩に乗せられた手が非常に痛い。

ギリギリと肩肉が悲鳴をあげています。

「まあ、急ぐことは無い。座れ。」

「はい」

「北辰。大変だね。」

「山姫ちゃんはねこ鍋は好きかな？」

「ちゃん付けするな。」

「ねこ鍋？食べてみたい気もするな。」

「にゃ！？」

「キクゴローが奇妙な声をあげる。」

「猫って食べれるんですか？」

「山ノ神が不思議そうに聞いてくる。」

「昔の俺は罪悪感に漬れたが今の俺は違う。」

「ああ。骨と皮が多いが（多分）食えるよ。」

「食べれないよ！！北辰嘘つかないでよ！」

「俺は、ゆっくりと立ち上がると。」

「じゃあ。立派な神様目指して頑張ってください。」

「はい！頑張りますよー！」

「ごめん、なんか一緒に行くみたいな グキイ！」

俺の首がグキイ！となって山姫につれていかれる

まさか、半裸の女の子（妖怪）に二度も押し倒された挙句
二度目は茂みに連れ込まれるとは。

「一度だけ言っておく。

山ノ神は自分の山を持たぬ間は人間に出会ってはならない。」

「もう、ダメじゃないか。」

「だからだ、お前は山ノ神の従者だ。」

何故に！？

だからの意味がわからん。

つか、お前は妖怪だろ 神様の付き人ってどうよ？

「謹んでお断り申しあ グキイ！」

次は逆側に捻られた。

山姫ちゃん？首はそっち側に曲がらない 捻らないで！

曲がらない！曲がらないから！！

山姫は顔を近付けてきて耳元で話す。

「期待しているぞ、人間の賢人。」

「何それ？」

俺は、捻れた首で地面を見ながら聞く。

「日ノ本の木々からそう呼ばれているぞ」

「何それ。とうとう、木と会話を始めたのか？」

頼むからぶつぶつと独り言だけは勘弁してくれよ？」

「それと　山ノ神に手を出したら殺す。」

そう言った後、俺を解放して去っていく。
あれ？結局、俺は逃げちゃダメなの？

「手遅れなんじゃない？」

キクゴローが肩に乗ってくる。

俺は溜め息をつきながら先程の場所に戻る。

「山ノ神は山ノ神以外に固有の名前は無いのか？」

「???あ、はい！」

私達は自分で治める山を持つまでは山ノ神と言われます！

でも、自分の山を持てたら上の神様が名前を授けて下さいます！」

元気だなあ。

そして驚きの神様上下関係。

上の神様から下の神様までいるんだ。
意外と生々しい話だね。

しょうがない、【山っち】と呼ばう

と、考えたが語呂が悪い。
姫っちは山姫がいるしな。

「山姫ちゃんの名前あるの？」

「」

はい、睨めました！！

俺。この娘と旅をするの？
自信が無いんですけど。

「や、山ノ神は突然現れたけど

アレをすれば旅なんて必要ないんじゃないか？」

「い、いえ！アレは凄く力を使うので、もう出来ません！」

なら、何故にあの時はやっていた？
この娘、もしかして アホの娘？

「山姫ちゃん。さん。御名前などをお聞かせ願いたいのですが。」

「山姫だ。」

「ですよー」

ダメだ、話にならない。

アレか？名を教えて欲しいならば認めさせてみる 的なの？

勝てる気がしない。

あの服装に目が奪われてしまう。

「ソレで何処に行くの？」

「あつちです!!」

ビシッ!

と指をさす山ノ神ちゃん。

確かにあつちだが

何処へ!?

俺の未来(生命的な意味で)はどっちだ!?

「うん?名前?北辰だよ。」

場所は変わり違う雪山に来ていた。

途中、山姫ちゃんに殴られたり(拳で)

山姫ちゃんに斬られたり(刀で)

山姫ちゃんに蹴られたり(脚で)

したが、よく生き延びたと自画自賛する。

そして俺は焚き火にあたりながら言った。

下の名前を山姫ちゃんに聞かれたからだ。

息子の名前じゃなくて北辰○○○の○○○だからね？

それはそうと、妖怪や神様も寒いとか在るんだね。

「北辰。人（？）に名前を聞いておきながら自分は答ええないのか。」

山姫ちゃんが両手を暖めながら睨んでくる。

かわいいーなー。

でも何で睨んでくるのかなあ。

だって何時も頑なに教えてくれないじゃん。

「だから、北辰が名前だよ。」

それ以上でもそれ以下でもない。

それは、キクゴローに本当の名前を言えと言ってるのと同じだよ。」

「そうだよ。北辰は北辰だよ。」

珍しくキクゴローが加勢してくる。

因みにキクゴローは俺の服から

顔だけ出して、首から上だけが外気にさらされている。俺はキクゴ

ローをカイロ代わりにしているから

ギブアンドテイクというやつだ。

因みに、山姫の服だけは変えて貰いました。

流石の俺でも毎日半裸をみるのはつらいです。

本当に雑談だが山姫ちゃんの好感度を上げるために

蜂の巣（蜂の子入り）をプレゼントしたら

無言で木々に蜂の巣を叩き込まれた。

まさか此処まで嫌われているとは思いませんでした。

山ノ神ちゃんは何やら唸ってるし。

何やら唸ってるし。

障らぬ神に祟り無し。

山姫も内心は同じ考えなのか放置している。

「山を持てば俺は解放されるのか？」

「正確には、山を持って人間の信仰を集めれば、だ。」

つまりは、山ノ神が他の神様のいない山に住み込んで

山を活気付かせれば良いってことか？

土地に信仰を集めるのか？

あれ？よくわかんなくなってきた。

山を人間と共存させるのか。

俺の目的と少しずれるな。

「そういうことだ。」

「あれ？口に出てたか？」

「顔を見ればわかる。」

「ふむ。次からは気を付けるよ。」

俺はチラリと山ノ神を見る。

山姫もチラリと山ノ神を見る。

山ノ神は唸っている。

「やへどひまひた」

やへどひまひた
やへどひまひた
やへどしました

「火傷しました？」

「ひゃい」

何この娘、可愛い。

異常に可愛いすぎる。

俺は荷袋から小さな竹筒を取り出す。

「火傷薬だよって神は火傷すんの!？」

「やへどぐらいひますよ!！」

「ひますのか!!？」

「うううう!！」

神様が犬のようにうなりはじめました。

いじめすぎたか!？

山姫ちゃんは寝てる!？

主（山ノ神）より先に就寝とはいいい度胸してるな。

まあ、俺も先に寝るか。

俺は横になって、なにやら喚く山ノ神を無視して
深い睡眠に落ちていつ

「何かな。私はもう寝たいのだよ、真面目に。」

叩き起こされました、もちろん、山ノ神に。
話の内容は、私は山ノ神で　だから　であって

はい、ごちそうさまでした。

俺はうつらうつらしながら頷いていた。

「はい、聞いてますとも。」

一匹居たらあと30は居るって事ですね？」

「違います！」

「おやすみなさい。」

俺は深い深い眠りについた。

そして次の日。

俺は溜め息をつきながら歩いていた。

背中には山ノ神。

簡単にいうおんぶだ。

「夜更かしするからこうなるんだよ。」

だいたい、神が睡眠不足とかあるのか。

神なら姿を消すとかないのかなあ

「格がある程度高くないと出来ないそうだ。」

格の低い神は妖怪達の格好の餌食だからな。」

「格の低い神は神というより精霊に近いんじゃないか？」

精霊と言つよりも神霊か？

とりあえず、今はまだ赤ん坊って事か。

「
」

「どうした山姫ちゃん。」

「人間の割に　　いや。」

そうだな、今は神と言つよりも精霊に近いだろう。

ただ、実体の消せない精霊みたいなものだ。」

精霊とは、万物の根源をなすとされる不思議な気と呼ばれあらゆる生物や無生物に宿り、宿り場所を変え渡り歩くと言われる、力そのもののものだ。

単体では弱いが集まれば強い、数〓強さと言うことになる。神はつまりは、精霊の上位職みたいな事らしい。なら、神の上はなんなんだ。

「急に黙ってどうした？」

「何でもない。」

しかし、神にも種類があるんだな。知らなかったよ。」

「　　不思議な所で抜けているな。」

「神は嫌いだったからな、ああ、今は別に普通だぞ？

おお 雪だ。」

そんな事を言っていると雪が降り始めた

「降ってきたか」

「凄い。」

日本で雪が降るなんて珍しい。

いや、元居た所は珍しかったけど

今の時代では普通なんだろう。

俺は目を輝かせながら呟く。

「雪だ。」

「 気味が悪い。」

山姫ちゃんが気持ち悪そうに見てくる。

俺はただ、降り続ける雪を見ている。

「北辰、ついたの？」

キクゴローが懷から顔を出す。

「って、なに童みたいな顔してるの!？」

「キクゴロー雪だぞ!!」

「僕、雪嫌い。」

キクゴローが顔を服の中に引つ込めた。
それでも綺麗な雪に俺のテンションは急上昇中。

「凄い凄い！」

見ろよ山姫ちゃん！雪の壁だ！」

雪が集まって迫ってきていた。

凄い降雪量だな！

すごい、日本の吹雪は塊でくるのか！！

「違う！雪の妖怪だ！！」

「へ？」

背中の山ノ神が山姫ちゃんに回収された。

あれ？俺（キクゴロー付き）は助けてくれないの？

そう思った瞬間。視界は雪に染まった。

「なにになに！？いったいどうしたのさ！！」

キクゴローが慌てたように聞いてくる。

「妖怪らしいよ。」

一人に会つと30人は出てくるとは本当なんだな。」

今まで妖怪に遭遇しなかったのに

一回会つと何度でも現れやがるな。

もはや山ノ神ちゃんはコレを予期して昨日説教を！？

そつえば山姫ちゃんは歴とした妖怪だしな。

とりあえず、山ノ神狙いらしいし、俺は雪で遊んでよっかな。
俺は雪（もはや、吹雪）の中をクルクルと回った。
何故かって？なんとなくさ。

「あの
」

むっ、俺の女の子センサー（美女、美少女のみ）が反応を！！
ついでに声も聞き取った。
後ろだ！！

俺はグリーン！と振り返った。

「はう！！」

「ぬう！！」

雪のような、白い肌。

雪のように白い髪。

少し青みがかかるような透き通る眼。

ストライク！

この俺のストライクゾーン（非常に広い）を
ドストライクで攻めてくるとはやるじゃないか。
落ち着け俺！先日の子（本当は蜂の巣）で
俺はしっかりと学んだはずだ！
今こそ、その成果を見せるとき！
俺は荷袋からすっぽんを

ア・ホ・か！！！！

女の子にすっぱん（乾燥）渡す奴がいるか！？
寧ろ、何故にすっぱん！？

俺はすっぱんを投げ飛ばした。

その勢いで樹が凹むけど気にしない。

きつと熊かなんかが食べるさ。

まてよ？何故に俺はモノで釣ろうとしているんだ？

ここは紳士（と言う名の・・・）になれ！

「何かようかなお嬢ちゃん。」

「私に食べられてください！！」「よろこんでーーーー！！」
俺は心の中で条件反射的に叫んでいた。

たべられてください！！

なんか、エロい。

この時代の言葉で艶まかしい。
しかし、勘違いかもしれない

「どっちの意味だ！？」

「言葉どおり（食用的な意味）です！！」

「言葉どおり（性的な意味）だと！？」

この時代は 凄いな。

懐からキクゴローの多分違うよの声がかかるが俺は気にしない。
こんな小さな娘が

「北辰！」

はっ！！

いかん！山ノ神が狙われてるんだった！

俺は声がした方に飛び込んだ。

回転しながら、雪の上にズボツと着地。

「馬鹿！！何故、妖怪まで連れてきた！！」

妖怪まで連れてきた？

俺は辺りを見回す。

山ノ神（未だ熟睡中）

山姫（山ノ神を背負っている）

女の子（先程の女の子）

「何処にもいないじゃないか！！」

「目の前にいるだろう！！」

「えいつ！！」

足と指の先から氷が出現し始めた。

あの食べられてくださいは食用的な意味か！！

そんな事を考えていると肘や膝の辺りまで氷漬けになる。

「寒いなあ、雪女だったのか」

俺はケラケラと笑った。

そうしている間に完全に氷漬けになる。

よかった、食料的な意味の食べられてくださいだったのか
とりあえず、目が凍ったら痛いので目を瞑った

「やった!!」

雪女は万歳する。

俺もつられて万歳すると氷が割れて剥がれる。

「へ？」

「あつはつはつ、強度が無い。」

この程度じゃ俺は捉えられんぞ？」

「こゝこゝ」

「午後？」

「ごめんなさい!!」

謝られた。

アレか、俺を氷でオブジェにしちゃったからか!?

俺はいいーよーと言っておいた。

俺はパラパラと氷を剥がしていく。

「コイツは確かに人間だ、だから謝る必要は無い。」

「いつそのこと殺してしまえばよかった。」

「ちよっ！酷くない!？」

「酷い？優しいくらいだ。」

山姫ちゃん、酷い

山ノ神ちゃんはまだ寝てるし。

「悪戯（紛らわしい言い方）も大概にしないとダメだぞ。」

俺はビシィ！と指をさして説教した。

雪女ちゃんは頂垂れている。

でも その姿もそそるなあ。

はっ！！

「
ジー」

「お、おはよう。」

「
おはようございます。」

山ノ神、起動しました。

何故か睨んでくる。

何故か睨んでくる。

「さ、さて 次の山に行こうか。」

「そうしよっ。」

生まれたての雪女で良かった。」

「生まれたて？」

「雪山での雪女はこの程度ではないぞ。」

山姫は寒いのが軽く震えながら言う

山ノ神はもちろん震えている。

たしかに吹雪いているしなあ。

「なんでそんな薄衣で平気なんですか？」

山ノ神が山姫の背中で暖をとりながら言うてくる。

そんなに寒いかな？

「育ちの違いだろ。」

俺は旅人だから慣れてるんだよ。」

俺は、そう言つて山姫を抱き締める

次いでに山ノ神ちゃんも抱き締める

服の中のキクゴローがぐえっと呻いたが気にしない。

背中に風が当たる（何故か氷柱が飛んでくる）

やわらかーい

妖怪でもやはり女の子。柔肌の感触を俺はしかと味わっていた。
ドゴン！

俺の愚息（息子）に激しい衝撃！！

北辰は崩れ落ちた

決め技 山姫の膝蹴り

「ふん。私に気付くなんてやるじゃない」

新手の雪女の声がした。

そんな声を聞きながら俺は余りの痛さに意識を手放した。

おまけ的なもの（前書き）

すみません、まだ原作キャラは出てきません。

おまけ的なもの

「ふおう!!」

俺は奇声をあげて飛び起きた。

何処だ此所？

まさか、また違う世界に？

整理しよう。

俺は気を失う前、山姫ちゃんの膝蹴りが

我が息子に直撃して

「思い出すな 思い出すなよ」

鈍い痛みを意思によって押し伏せる事にした。
五分後

「おふう」

股を押さえてうずくまっていた。

気持ち悪い

男はわかると思うが

息子を叩かれると気持ち悪くなるのだ、思い出しただけでも痛い
俺は立ち上がる。

そして、廻りを見た。

「お花畑だ」

「

四季様々なお花が咲き乱れていた。
遠くには川が見える。

ついでに荷袋が無い。

あれ？もしかして

まてまてまて、そんな馬鹿な。

俺は頭の中に出てきた考えを忘れる。

「きつと、夢かなんだ。」

俺は、お花畑を見ながら森の方へ進んでいく。

異様な雰囲気だ、感覚が妨げられるような

気持ちが悪い感覚がする。

俺は警戒しながら鉄扇を持ち先に進む。

「
」

なんだ、只の少女か。

気持ち悪い感覚は続くがそんなことこの少女に比べれば

なんて事はない。

ここは桃源郷だったのか！！

少女は無表情に空を眺めている

少女は気付いていない、北辰はどうする？

選択肢

後ろから

いや、後ろから

やはり後ろから

とりあえず声をかける

結論、とりあえず声をかける。

「こんにちは。」

言葉が思い付かなかったので挨拶する。

幼女は一瞬だけ此方を見てまた空を見始めた。

むう、この反応は予想外。

俺はスタスタと歩いて隣につくと同じように空を見た。

なんか和む。

これはまた不思議な感覚だ。

普通、隣に人がいれば意識を裂かねばならない。

しかし、今は隣の幼女を意識の中に留めた上で空に全ての意識を持つていける。

なんて言うのだろうか。

妙な安心感がある。

幼女も少し驚いたように少し見てきたがまた空を見上げた。

俺もただ、時間を無為に楽しむように空を見上げる。

はて？なんかいつもの空と違う。

透き通っているというか　まあいいや。

俺は暫く眺めた後

「ふお！！いかんいかん！帰らないと。」

俺は頭を振ってぼくとしてた頭を覚醒させる。

先程のお花畑に戻ろう。

ん？先程の幼女が目の前に。

どうする　どうすればいい。

拐うか　いやダメだ、見知らぬ土地だし。

幼女が見つめてくる。

俺も視線を交差しながら頭を撫でる。

頭を撫でた瞬間、力が軽く抜ける

（なんだこれは　　氣が根こそぎ奪われるような。）

でもかわいーからいいや。

俺はそう判断して頭を撫で続けた
はっ！！

しまった、帰らなきゃいけないのに。

「じゃあね」

俺は別れを告げると帰ろうとする。

すると何かが飛んできたので手で取る。

腕輪？

しかも片方。前を見ると、幼女（無表情）が俺を一瞥して
振り返ってスタスタと歩いて　消えた。

消えた

「え？消えた　　これ貰って良いのか？」

とりあえず、懐にしまっておいた。

俺はお花畑に戻った、すると。

「何故に、沼が！！」

沼に嵌まりました。

これはどーゆー事だ！さっきまで無かったのに！

がしっ

なんか掴まれた！足に掴まれた！

先住民！？沼の先住民様がお怒りじゃあ！！

「ちよっ！コレは何気にヤバイ！

力強いし！この沼重いしドロドロだし！」

そんなことを言っている間に俺は沼に沈んだ。

俺は足を掴むモノに腕を伸ばし掴む

ふによ

ふによ？

なんだろうこの感触は

「何をするかこの助平！！」

「あべしっ！！」

鳩尾に激しい衝撃！

俺は急いで起き上がった。

ムニユ

目の前には山姫ちゃんの啞然とした顔、本当に至近距離だ。

近い　近い上にこの感触

ま・さ・か？

俺は山姫ちゃんに突き飛ばされ

気絶するまで殴られたことの詳細は言わなくても大丈夫だろう。

「あれ？君はこの前の」

気絶から快復した後、座っていた少女を見つける

「雪女の小雪です！！よろしく願いします！」

そのまんまじゃないか（名前が）。

小雪ちゃんが仲間に加わった。

手持ちが入りきらない

北辰を野生に返した

みたいにならないかなー

「俺はどのくらい寝てた？」

「四日です。死んじゃったかと思いました」

山ノ神ちゃん　今回は起きてるんだね

あの時は、最後の最後まで寝てたのに。

「もー、心配させないでよね」

キクゴローが喉を鳴らしていた。

夢の中にお前は居なかったな。

キクゴローが懷に侵入してきて

「北辰、なにこれ」

腕輪が発見されました。

「ん？うん。お守り？」

「なんで疑問？」

うん、幼女のお守りだよ。

俺は、腕輪を腕にはめた。

「で、あの後。どーなったの？」

なんでも、他の雪女と闘いに突入して皆で逃げてきたらしい。

俺はとりあえず、運んでくれた山姫ちゃんにお礼を言った。

因みに息子に異常は無かった。

非常に安心しました。

山ノ神ちゃんが幼女の腕輪をみて首をかしげていた。

「違うよ。」

持ち方はこう持つて。

半分くらい回転加えて投げるんだよ。」

俺は小雪にナイフの投げ方を教えていた。

勿論、木製のナイフ、と言うよりも

木製の苦無に近い形だ。

「そんな軽いモノで真っ直ぐ飛んで木を貫通できるのは

北辰だけだと思っよ。」

キクゴローが横から茶々をいれてくる。

でも、多分正論だ。

俺はそーだな、と呟いて荷袋から手裏剣（鉄製）を取り出す
卍型ではなく棒型の手裏剣だ。

何故か荷袋に入っていた代物だ。

俺は投げ方を教え始めた。

なんでこんな事をしているかは一時間ほど前に遡る。

「どうした小雪ちゃん。川に怨みでもあるのか？」

休憩中、ふと小雪ちゃんがいないことに気付いた俺は

小雪ちゃん搜索に向かい川で発見した。

小雪ちゃんは石を川に投げつけていた。

パツシャ、パツシャと投げていた

「あの、魚を採ろうと思って。」

「???小雪ちゃんは覚えなくてもいいだろ」

「役に立ちたいんです!」

なんて健気な!

いつも暢気に遊んでただ飯食らう

馬鹿な神にも見倣って欲しいものだ。

「雪女なんだから、凍らせればいいじゃないか」

「・・・・・・・・!!!!」

あれ？

いつちやいけないこと言った？

小雪ちゃんは見開いているし。

「で、でも！覚えておいて損は在りません！」

そりゃそうだ。

手取り足取りグフフフ

「なら木製の刃の方で良いなら教えるよ。」

現在

「魚の視界は広い。」

しかし、魚は前にしか進めないのだ。

少しでも当てれば浮かんでくるからしっかり狙うんだ。

水中を狙うときは角度もな。」

「はい！」

一時間程して。

「才能ないんじゃない？」

「はうつ!!」

キクゴローの一撃。

「いや、投げるときに躊躇いがあるからだよ。

時にキクゴロー。俺の前で小雪ちゃんを虐めるなんて

死にたいらしいな。」

懷からキクゴローを引つ張り出し
雪の中へ放り込んだ。

「うう、才能ないんでしょうか?」

やめて!!

そんな上目遣いで見ないで!!

「訓練もせずに出来る奴はそうそう居ないよ。」

俺はそう言つて手本を見せる。

更に一時間ほど後。

「出来ました!お兄ちゃん!」

ゲハッ!!!

今なんと?お兄ちゃん??

いい 凄く良い!!

「すみません」

反応が無かったから怒ったと思われたのだろう
しょんぼりして落ち込む。

俺は苦笑して髪を撫でる、雪女だからか冷たい。

「よくやった、おめでとう。」

花が咲いたように小雪ちゃんが笑った。

かわいいーなー。

かわいいーなー。

「さて、帰ろっか。妹よ。」

「はい!」

そして、山姫ちゃんと山ノ神の前でお兄ちゃんと呼ばれ
白い目で見られたことは割愛しよう。

「小雪ちゃんってなんで初めて会ったときに

食べられてくださいって言ったの?」

「怒らないで貰えますか?」

「うん?怒らないよ。」

「皆が、人間を食べないと死んじゃうって」

「ああ。なるほどね。」

妖怪が強くなるには強いやつを食うのが手っ取り早いからなあ。」

妖怪は他者の氣を食らって力とするから

出来る限りの生きた強者を食らうのが好ましいらしい。

死ぬと、氣が霧散するからだそうだ。

「ま、妖怪なら仕方ないだろ、人間だって獣を食うんだしな。」

「お兄ちゃ 兄様はもし食べられても文句は無いんですか？」

「無い。」

言いきる。

在るわけがない。

「食われるときは敗けたときだろ？」

なら文句等は在るはずがないんだよ。」

あれ？

ちよつと俺、良いこと言ってる？

やべ、主人公っぽくない？

「よくわかりません」

だよねえ。

人間、そんなにスッパリ出来てないもんねえ。
寧ろ解つたら逆に気味が悪いわ！
俺のこの考えは潔いとかとは違うからな。

「ひゃわ!!」

急に山ノ神ちゃんの叫び声が聞こえた。
小雪ちゃんが急いで走っていく。
俺も後ろについていく。

「北辰しゃん。たしゅけてくらはい」

うん。なにこの状況。

山姫ちゃんは既に固まっている。

「小雪ちゃん。

神様は冬になると首だけが地面から出るんだよ。」

「そ、そうなんですか!？」

「そうなんだ。

収穫した時の着ている服の色によって毒を持っていたり燃えたりするんだよ。」

「はじめて知りました!」

うん。俺もはじめて知りました。
だって嘘だから。

「北辰。私は最近仕える主を違えたかもしれないと考えるようになってきた。」

山姫ちゃんが言ってくる。

さっきまで寝てたからね、ソレを急に起こされたから心の言葉も出ちゃうんだよ
俺は常に出ちゃうけど。

「俺は最初からさ。」

やっぱり、山ノ神はアホの娘だな。

顔以外全部雪に埋るってそうそうないぞ？

とりあえず、俺は山ノ神の首を掴むと一気に収獲した。

「兄様！毒は大丈夫ですか！？」

あ

この娘（小雪）もアホの娘だ。

家族が増えました（前書き）

まだ原作キャラは

家族が増えました

「奴隷だ。」

俺は、下の山道を歩かされる女の子達を見て眩く。

身体には荒い縄が巻かれていて

この寒い中、ボロボロの服を着ている。

裸足だし、凍傷で死ぬんじゃないか？

やっぱり何時の時代も奴隷の主力は女の子か。

だって男はあんまりいないしね

護衛つーか、奴隷商人も 八人か。

「奴隷 ですか？」

山ノ神と言うのは一般的な知識は持ち合わせているらしい。
でも見るのは初めてだという顔だ。

「 人はね、人を売るんだよ。」

「 そんな 」

「 何のために か？ 」

金。その為だよ。

それ以外はそうだね やっぱり金だ。」

内臓も

血液も

遺伝子も

金だよなあ。

「うん。お金おかね、金子だよ。」

「北辰。どういうことだ。」

山姫ちゃんも知らないのか聞いてくる
俺はどうしようかと思いながら答える

「子供売る 儲かる 以上。」

なんで完璧な説明。

私は戦慄を覚えながら満足する。

「子供達はどうなるんですか？」

「どうする？」

俺は、山ノ神ちゃんの言葉を無視して山姫ちゃんに聞く。
山姫ちゃんは腰に差していた刀の柄を触る。

「小雪ちゃんは危なくないようにな。」

何時でも行けるけど 山ノ神ちゃん。

無視して旅を続けるか、奴隷から開放するか どうする？」

奴隷を開放しても

行く宛は無いのだから、山ノ神ちゃんの性格なら保護する。
短い付き合いでも確信できる。

でもそうすると根無し草の旅はキツくなる。

なら、山ノ神ちゃんも腰を据えなければならぬわけだ。

「別に関係無いと割りきってもいいし。」

「 助けます。」

「 そうかい。」

俺は荷袋から女の子用の着物を出す。

あの薄着じゃ指がとれちゃうかもしれないしね（凍傷で）

「 兄様は何故、着物をそんなに持っているのですか？」

「 え？だってもしもの時困るだろ？」

俺はキリツとした顔で真剣に言った。

俺が変態（傭兵）達と組んでたときの教訓だ。

突然、脱ぎ出す変態や

突然、服を投げ捨てる変態や

突然、服をはだけさせる変態が

俺の側には居たのだ。

俺は服を続けて出す。

「 よし、行こうか。」

俺と山姫ちゃんは雪山を滑るように降りる。

「 千百合だ。」

隣で囁かれた一言。

俺は隣の女の子を見る。

そして、奴隷商人達の前に降り立ち言う。

「なら、ちーたんと呼ぼうじゃないか。」

「死ね!!」

「あばす!!」

俺の抱えていた着物が舞い散る。

ソレは警戒した奴隷商人達の視線を塞ぐように舞う

奴隷商人の位置は前方に三

真ん中前に二

真ん中後に二

後ろに一人だ。

俺は正拳で一人、返しの裏拳で一人殴り飛ばし

蹴りで一人を山道から突き落とす。

「正面クリア」。

俺は石投げるから。」

「わかった。」

ちーたんが答えながら横を抜けていく。

俺は手頃な石を雪ごと掴み投げつける。

「せいっ!!」 俺

「ぐあっ」 モブ

「へいっ！トリプル！」 俺

「あぎゃっ！！」 x 3

「股間クラッシュ！！」 x 4

「あばっす！！」 x 4

俺は石なげで崩れ落ちた奴隷商人の服を掴むと山道から投げ落とす。
ちーたんも同じ様に処分したようだ。

「よし。」

小雪ちゃん！かまくら出来た！？」

暖をとるにはかまくらだと思い

一応、雪女の小雪ちゃんに頼んでおいたのだ。

「兄様！大丈夫です！」

俺は頷いて小脇に奴隷になりそうだった少女を抱えて
小雪ちゃん達と合流し始めた。

「見てくれ。雪ダルマだ。」

俺は誇らしげに力作の雪ダルマを見せた。

なんと全長が三メートル

そして八頭身の達磨だ。

おや？これトーテムポールじゃね？

「お・ま・え・は！！」

私達が動いてるのに何やっているんだ！！」

俺の（作った）トーテムポールが縦に真つ二つになった。

「だって着替えさせるから外行けって言ったじゃん」

俺は、トーテムポールの前で崩れ落ちた。

とりあえず、入れといわれたのでかまくらの中に入る。

「うん、怪我は無いみたいだな。」

遅しくも凍傷にすらかかっていない。

この時代の人 遅しいな。

「寒くはないか？」

アレだ 腐らない程度にゆっくり温めるんだぞ？」

「兄様！怖がらせるようなこと言っちゃダメです！」

「結構重要なんだけどなあ。」

俺はどっくらせと言いながら据わって山ノ神ちゃんを見る。

「どうしようかね?」

「どうしましょう。」

おおう。

俺に聞かれてもなあ。

「家造りならできるよ。
場所さえあればね。」

「ほう。意外な特技だな。」

ちーたんが手を暖めながら言い、
小雪ちゃんは尊敬の眼差しを向けてくる。

「大体の事なら出来るよ。北辰だからね」

俺はここぞと言ったときのキメ顔で言う。

「山ノ神、場所はどつする?」

あれ?

反応がない。

あれ?何故か寂しい

「あ、兄様！すごいです！！」

「ありがとう、小雪ちゃん。」

俺は小雪ちゃんを撫でる。

かわいいーな！。

「あれ？」

女の子達は眠ってしまったようだ。
安心したのか疲れたのかわからないが

「結婚してもないのに子沢山じゃないか！！」

そう叫んだら、ちーたんに刀で殴られた。
因みにすぐに起動して、なら誰が母親だ？
と聞いたら妙な雰囲気になった。

いきなり年数が飛びます

最初の娘が出来てから早、幾日（多分数年）。

俺の娘がああ跡、ねずみ算をするかのように増え
山ノ神ちゃんは櫻と名前を改め。

『森の散歩に行ってます』

とか言っただけ旅立ってから、迷子になっている。

山姫ちゃん改めちーたんが捜しに行ったから大丈夫だともう

因みに俺は居間で正座をしています。

「兄様！」

「しゃい！」

噛んだ

絶対に口内炎になる　鬱だ。

「いいですか？兄様は皆を甘やかせすぎです。

確かに厳しすぎるのもダメですが、やるべき事があるなら、

たとえ子供達の願いだとしてもハッキリと断ると言うことをですな

しかし、甘やかせるなどとは言いませんし、少しは私にもその

聞いていますか！！！！？」

「しゃい　。」

最近、小雪ちゃんが怖いです。

仕事放棄して子供と遊ぼうとしたらこれだよ。

拝啓、あの日の小雪ちゃんよ。

あの時の俺のストライクゾーンを見事なほど捉えた
小雪ちゃんは、今、既に　いるにはいますが
まるで姑のような細かさを誇っています。

純粹無垢な妹は何処に消えたのだろうか。

しかし、子供達の教育にはいいと思います。

あの気弱な小雪ちゃんがこんなことになるなんて誰が想像に出来たでしょうか？

幼さの残る顔立ちなのに内面は姑です。

あの時の君の一喜一憂する笑顔は何処に

「何か良からぬ事を考えていませんでしたか？」

妖怪の成長は速いものです。

しかし、少女と言うよりも姑です。

「いえ。」

さあて。今日も頑張って誠心誠意働くとしますかな。」

俺は、背伸びをして暖かい陽気の中、一歩踏み出し
そしてなんとなく呟いてみた。

明日、天気になあれ。

北辰家フェイズ（前書き）

上杉ルートにしました

北辰家フェイス

真っ赤な世界。

赤と黒を混ぜたような色をした世界。

真下には粘り憑くような液体。

血液？いや、血液ではない 何か。

距離が全然、掴めない。

俺は何故、こんな場所にいるのか。

とりあえず脚をあげてみると案外簡単に抜けた。

「邪魔だなあ。」

弾くか。」

俺は脚を上げると力一杯踏みつけた。

すると、俺を中心に液体が 波すらたたなかつた。

あれ？

川くらいなら普通に吹き飛ばせるのに。

「はろー。」

「おう。」

あれ？

何時現れたのか俺の顔に似た人が居る。

唯一の相違点は髪の色（俺は白で向こうが黒）
とからだつき位だろうか。

「大丈夫かおい。飯食ってるのか!？」

だって目の前の奴はガリガリだもん。
少し心配になる。

「普通はこのくらいだよ。

僕は、神武。この場合君のご先祖になるのかな？」

「とりあえず、頭を強く打ったなら休んでろよ？」

ご先祖がはろー（Hello）なんて言うわけ無いだろ。」

おいおい、頭が変なんじゃないのか？

っーか、いきなりご先祖って

「大丈夫だって。君の言葉のボキャブラリー借りてるだけだから」

なんてこったい

コイツは俺の創造から産まれた奴なのか？

俺も末期になってきているようだ。

「いや、考えに口差すみただけけど

話しやすいように借りただけだから。」

心まで読めるのか。

とりあえず、無視して俺は歩き出す、弾けないのにピチャピチャと音を立てながら俺は進む、後ろでも同じ様に音が聞こえる

ご先祖（笑）がついてきているようだ。

「何で、名乗らないんだ？」

後ろの男の声色が変わる。

その言葉には誤魔化しを許さない力がある。

ご先祖つてのもあながち嘘じゃ無いみたいだ。

「名乗る？」

俺は北辰だよ。それ以上でも以下でもない。」

「北辰　　ね。

じゃあ、質問だ。」

俺は丁度、分かれ道？に出る。

何故か、石段になっている道が左右に続いている。

「裏切られた国を助けたいと思うのは馬鹿かな？」

「当然だな。」

ど・ち・ら・に・し・よ・う・か・な・氣分的に言う通り。

俺は交互に指差して方向を決める

「じゃあ、馬鹿な君に聞くよ？」

歴史が変わる度に喪うとしても？」

何を喪うかは言わないのか

俺は呆れた顔で後ろを見ずに言う。

「それが“北辰”の願いならば俺は叶えるだけだ。

何かを喪わずに得られる成果は望めぬのならな。

聞いてくれよ、ご先祖（笑）俺に娘が出来たんだぞ？

家族なんて重いだけだけど　良いもんだな。」

そういつて、石段を無視して真ん中の道を液体を掻き分けながら進んでいく。

選択肢は真っ直ぐにも行けたから

「君は弱いね。」

「そう、俺は弱いんだ。」

そう返して、俺は聞く“羨ましいか？”と。
後ろで聞こえていた水を掻き分ける音が止む。
だが俺は気にせず歩く。

「羨ましいよ、とても。」

遠くから返ってきた答えに真っ赤な世界を見て溜め息をつく。

此処が何処なのかは知らない。

自分の夢の中なのか。

幻なのか。

ただ、現実ではないのだろう。

だって、俺が積み上げてきた、魂に染み付いた血の臭いがしないの

だから。

「そう たった一度の 恩返しなんだから。」

今は亡き、友のたった1つの願い。

俺は、ただ、一歩。歩き出した。

トクン

音が聞こえた気がした。

なんだか、懐かしくて安らぐ音が。

「夢か。」

鳥のさえずりで起きると言う何とも素晴らしい目覚めをして俺は、布団から這い出ながら呟く。

なんか嫌な夢を見たな。

そう呟きながら俺は、手を握ったり開いたりする。

「歴史を変える代償かあ。」

殺してでもくれるのかな。」

俺は寝巻きを着替えると、外に出て深呼吸。

いやあ、曇ってるねえ

しかも全然晴れてないなあ

俺が晴れを願うと曇るとはやるじゃないか。

「さて、今日も働くとしますかね。」

とりあえず台所に行つて朝餉造りの手伝いを

「結構です。」

兄様の料理が美味しいのは重重承知ですが女人には女人の矜持があるんです。」

無理なようだ。

俺は項垂れて挨拶を交わし台所を出る。

「つか、背を向けられながらオタマを斜め下に振りながら言われた。なんか、凄いかっこいい姿でした。

嫌われてるのかな、そう思いながら家を囲む山々を見る。

今、俺がいる場所はとある山

と言つか飛驒の高山あたりに家を構えている。

場所は秘境とさえ呼べるんじゃないか？

と思われるほどに山に囲まれていて自然の城壁の中に家はある。

家と言つてもアホみたいに広い家で、元は小さかったのだが改築している間に

造りが長屋＋長屋みたいな感じになつてしまった。

家を下れば流れ者の集落があり、いい雰囲気になっている

「や、朝から精が出るね。」

俺は汗だくでなんか艶やかなちーたんを見つけた。

汗に濡れる女の子って、エロいね。

張り付いてる服、艶やかな肢体。

刀の訓練でもしてたんだろう。

すると、ちーたんはジト目でこちらを見ると

お前は気楽で良いなと言うような感じで　抱き着いてきた。

「ちーたん？　なんか柔らかいものが当たって

汗！汗で凄いことに！！」

すると、ちーたんは俺を解放して、湯殿（温泉）に行く。

俺は、ちーたんの汗で濡れた服を触って

「嫌がらせなのか役得なのか　いや役得だな。」

結論付けて庭を流れる川で服を洗おうと思い砂利を歩きながら川に向かった。

と、まあ。

調子に乗ってずぶ濡れになって帰ったら
小雪ちゃんに溜め息をつかれたのだが。

麓の村へ

「北辰さん！おはようございやす！！」

顔に傷の入った大男が挨拶してくる。

「北辰さん！今朝いい猪が取れましたよ！！」

半裸で肩口から胸板まで傷の入った大男が挨拶してくる。
しかも、猪がまだ生きてるし。

「北辰さん「喧しい！！」」

俺は耳を押さえて言う。

何で朝からこんなに元気なんだ。

そしてなんで野郎ばかりなんだ。

家は女の子（娘）ばかりなのに

「まあいい。今日の仕事はなんだっけ？

自然薯掘りだっけか？」

俺はぼやくと気付いたら隣に居たちーたんが言う。

「家の増築と道の整備だろう。

それと、新しく商売したいと言う商人が来てる。」

「何故に商人が俺のところに」

とりあえず、今日は内政みたいなことをしている

この山は櫻ちゃん（一応山ノ神）の領地だから

この山の繁栄や活気は櫻ちゃんの力に繋がるらしい。

繁と繋つて漢字が似てるよね。

なんか、頼りになるなー

とか

すごいなー

とか

おねがいしますー

とか思われて貯まる“信仰”も在るみたいだけど

これは名目山ノ神（櫻ちゃん）に仕えている者が受けた
信仰も櫻ちゃんに幾分貯まるらしい。

だから、ちーたんとかの美貌で（裏で）荒稼ぎとかもしている。
え？こんなんが信仰って？

だいたい、信仰とは

信仰 神々の力＝神通力

みたいなものらしい、念じるだけで火が起きるとか凄いと思う。

結局、信仰について意味は不明だが

なんだか凄いらしい。

だからこの地より南側、つまりは沖縄（琉球）の方に活動範囲を広め
何故、南側なのかと言う理由は寒くて北は嫌だからと言う理由だ。

俺はたまに他の国に出て山賊なぐったり

ム力つく奴なぐったり

娘に手を出した奴、潰したりと、まあそんなことをしているのだ。

と、そんなことを言っている手前、現在は北の方にも活動範囲を
広めようと、結構前からある女の子を手伝ったりもした

今は省くがアレは人類の至宝だと思う。

そして今現在

「うん。俺等の決まりは以上だ。

決まりと仁義さえ忘れなければ何も言わないよ。」

目障りだったら潰すけどね、と内心で加える。
この商人に言わなくても集落の奴等が言ってくれるだろう。
あいつらも流れ者　軽く仁侠者だからなあ
余所者への対応は任せている。

「じゃあ、何か在れば。」

この広い道を真っ直ぐに行けば家がある、そこに来ると良い。
「
そう言い残して、俺は家に帰る。」

家へ

「と、言うわけで家の増築をしたいわけだが
想像にすらしてなかったな、これは。」

燃えとるやん　俺は頬を掻く、どうしてこうなった。

俺は、チラッと燃える増築というか改築用の木材の横を見る。

鍋。

料理用の鍋だ。

燃え盛った跡が見える。

料理の練習をしていた娘が料理を（何故か）燃やし
慌てて中庭に捨てたらその先にあった木材に引火。

「ないない。ソレは無い」

ソレは無いだろう幾らなんでも。
だって調理場から中庭まで結構距離があるし
俺はそう頷くと櫻ちゃんが謝ってくる。

「うう　　すみません。」

流石は神様　　人智を超えた動きをするようだ。
つか、神様　　料理すんなよ。
家族だと隣に居ても気付けないのは何でだろう。

「小雪ちゃんには　　」

「ビクウツ!!」

「　　怒られた後なんだね。」

正直に言つと家の序列1位が櫻ちゃんの筈なんだけど

1位　小雪ちゃん（不動の1位）

的な感じになっている。

「とりあえず、俺は新しい材料持ってくるよ」

俺はテクテクと森の方に歩いていく。

ちーたんはどうやら後片付けをしてくれるようだ。

さて、今日も大仕事になりそうだ。

小雪 Side

「おかしいです。

何時もなら兄様が起きてきている時間です。」

台所で私は兄様が作ってくれたオタマを手に呟く。
どうしましょう やっぱり起こしに行った方が
でも、迷惑とか嫌だとか思われたら。
私は暫く考えてから結論を出します。

「やっぱり、様子を見る」

そう呟きそうになった瞬間、襖が開きました。
それと同時に兄様の言葉が聞こえてきます。

「小雪ちゃん。朝餉の手伝い」

私は慌てて兄様と反対の方向を見て言います。

「結構です。」

兄様の料理が美味しいのは重重承知ですが女人には女人の矜恃があるんです。」

思わずオタマを振るいながら言っていました。

本当はこんなこと言いたくありません

本当は兄様と一緒に料理を作って

兄様に沢山の料理を習って褒めてもらいたいです。

でも、兄様の妹としてそんな甘えは許されません。

兄様の妹として恥ずかしくないように頑張らなくては。

「そっか。じゃあ　おはよう。」

「あ　　おはようございます。」

顔を見ていないのでわかりませんが兄様は少し寂しそうに
そっか。と、言いました。

私は慌てて振り向いて謝ろうとしましたが兄様はもう遠くを歩いて
いました。

距離では近いのですが何故か遠くに感じます。

思わず手の力が抜けてオタマを落としそうになり

私は、ただ挨拶を返すことしか出来ませんでした。

しかし、兄様は手を軽く挙げてくれたので

私は嫌われてないと感じ、安堵しました。

そして私はオタマをしっかりと握り朝餉を作ることを始めます。

しかし

何故かずぶ濡れになっている兄様を見て溜め息をついてしまいました。

そして朝餉を終え、今日の洗濯物当番と洗濯物を処理している時です
我が家の簡単な家事は当番制で行っています。

中庭には、兄様と千百合さん（兄様呼びでちーたん）
が調達してきた我が家を増築するための木材が在ります。
それを見て私も私の仕事を頑張ろうと意気込みました。

「はわわわあああ！！！」

ドタドタドタと、慌ただしい音がして障子が開きました
独りでに開いたと言うことは櫻さんでしょうか？

まったく、兄様じゃありませんが神力をなんでこんな
所で使うのかと溜め息をつきたくになります。

私なら、洗濯物を干すために使うのに

そう呆れたのが間違いでした。

私が反応できたのはとある液体が木材にかかった所からです。

兄様の邪魔がしたいのですね？わかります。

はっ！

私は一体、何をしていたのでしょうか

???

。 櫻さんが正座をしているのですが何故でしょうか

そうでした。

兄様の邪魔 もとい、兄様から貰った料理鍋を 違います。

お仕事の邪魔をした櫻さんにお説教をしなければなりません。

何故、お説教をする前から怯えているのでしょうか。

さあ。櫻さん、お説教の時間です。

千百合Side

「や、朝から精が出るね。」

私が朝の鍛練から戻ると丁度、縁側から歩いてくる奴の声が聞こえた。

この家に住んでいる男は一人だけ。
そして、聞こえてきた声も男の声だ。

“ 北辰 ”

たった独りで私の主でもある櫻（山ノ神）の願いを確立させた男。
数年前までは、妖怪の私ですら畏怖を覚える存在だった。

そう、数年前までは。

何を間違えたのかこの男は、急に腑抜けてしまった。

あの時、少しでも見直した私に苛立ちを覚える。

そして私は私を見ていた北辰を抱き締める様に捕まえる。

丁度、汗で濡れていたんだ 移してやる。

しかし、男と言うものは皆、こんなからだつきをしているのか？

胸板も背中もゴツゴツしていて その 何故か落ち着く。

何故なのだろう。

こんなゴツゴツしていて武骨なように思えるが

実は武骨ではない鍛え上げられた肉体。

「 ちーたん？ なんか柔らかいものが当たって 」

ふん。

私もお前の感覚を味わっているんだ。

お互い様だ。

「 汗！汗で凄いことに！！ 」

む そうだった。

本来の目的を忘れる所だった。

私は、北辰を離すと

汗を洗い流すために、温泉へ向かった。

「想像にすらしてなかったなこれは」

私は呆然としながらその言葉に頷く。

以前、私と北辰が二人で取ってきた木材が燃えている。

犯人は　　櫻か。

私は呆れてモノも言えずに燃え盛る木材を見る。

そうしている間に北辰は新しく木を調達しに森に消えていった。

私はまず、火を消そうとしたが少し考える。

この燃え尽きた灰等の屑は確か肥料になったはずだ。

前に北辰がキクゴロー（話す猫）に教えていた。

それが一番良いだろう。

私は、縁側に座り木が燃え尽きるのを待つことにした。

「お姉ちゃん！！」

お客さん！お客さんだよ！！」

「客？」

従妹（北辰の娘）の一人が走りながら言うてくる。

私が疑問に思ったのは従妹の慌てようだ。

普通の客なら誰も慌てない筈なのだが

「　　ふむ。」

私も落ち着いたものだ。

普通の人間にはまだ遠すぎる距離に居た客を見て頷く。

先ず一人、兎の耳をしている。髪は薄紅色だ。
とりあえず胸があり得ないほど大きい。

次の一人、愛の髪飾りに何故かヘソを出している鎧。髪は薄蒼色だ。
胸は残念だ、小雪と同じ いや・・・

最後の一人、黒い髪に着物のような鎧
だが、一番強く人間ならざる気を感じる。
北辰ならどんな感想を抱くのだろうか。

あいつなら客人の強さ見極めた上でふざけるだろう。
ソレよりも、あの兎の耳は何なのだ。

あの鎧はヘソを出して意味があるのか。

北辰が居なくて良かった。

居たなら絶対に“ほほう”とか言いながら
舐め回すように見詰めて小雪を怒らせてしまう。
小雪を怒らせるのだけは回避しなくては。

「私が出るから、小雪に伝えなさい。」

私は何時もの北辰のように柔らかい口調で話し従妹の頭を撫でる。
従妹は笑って小雪に報告に向かった。

私は、刀を腰に差し出迎えるために歩いて行く。

しかし、客の迎え入れ等、やったことがない。
どうする。

普段の態度は小雪曰く“相手に威圧的です”
と言われている　しかし、どの様に接すれば
北辰の様に普段通り接して小雪に叱られるのは
しかし、私には普段以外の対応等

叱られるしかないか。

いや、必ずしも叱られるとは限るまい。

「　どうかしたのか？」

透き通るような澄んだ声が私を戻す。
近くで見たが若干、神氣を纏っている。
人間であることは間違い無いようだが

「すまない。私は千百合だ。」

今日はなんの目的で来た？」

「貴様！景虎様に何と言う口の聞き方を！！」

青いヘソだし少女が太刀に手を伸ばす。

「止めよ兼続。」

私は長尾景虎だ。

此方は私の臣下の宇佐美と兼続だ。」

「そうか。」

少し待ってくれ、家は散らかっているのな。」

私は家の方を見る。

黒い髪の女人　景虎と言ったか、景虎は苦笑して頷いた。

「すまない。」

それと用事は何だったか？あらかじめ聞いておく。

見た限り、初めて見る顔だが。」

「ふむ。」

この地に、賢者と唄われている者が居ると聞いてな。」

「賢者？　　ああ、北辰の事か。」

「名前は誰も教えてはくれなくなてな、それで気になり参った次第だ。

この町の者に聞いたら北辰という姓だと言つことはわかったが。」

その言葉に私は頷く。

「この家を指して北辰と呼ばれるのは一人。

彼奴に名前は無いからな、教える以前の問題だ。」

賢者と呼ばれた事があるのは北辰だけのはずだ。

ソレに北辰の情報を探るのは無理だと言うものだ。

何故なら誰も北辰を知り得ない上に知っていても誰もソレを不思議と口に出そうとしないからだ。

「下にあつた町の者に聞いたのだが、誰もかれもが

笑うばかりで答えようとはしませんでしたね。」

へソだし少女　確か兼続と言ったか、兼続が景虎に言う。

ソコで私は宇佐美とかいう女人に何も反応がない事に気付く。

「大丈夫か？」

「おなか　すいた。」

眠たそうなゆっくりとした口調で言ってきた。

時刻も丁度、昼頃。

ソレにしても、神気を纏った女人に

規律を重んじる見た限り真面目な女人に

兎の耳を備えた腹ペコの女人か

「ふふ、ははははは！」

私は思わず笑ってしまった。

面白い、少し緊張した空間で場を掻き回すのは北辰のようだ。

「笑ってすまなかった。」

昼餉を食べていっただけ。」

「いいの？」

「ああ。」

私は一度頷くと家に案内をした。

「お粗末様でした。」

小雪が微笑みながら言う。

良かった、小雪にしかられなかった。

「しかし、礼儀正しいんですね」

櫻が客人に言う。

「??普通だと思うのだが。」

「うーん、北辰を訪ねてくるお侍さんとかは大体

『まあ、私の配下にしてやらんこともないぞ、ん?。?』

みたいな事を言う人ばかりだったから。」

櫻　練習したのか？

『ん??』の辺りが凄く上手い。

「ふああ。

さわがしいなあ　何かあったの？」

すると、客間の片隅で座布団を占拠して
寝ていたキクゴローが目を醒ます

「　これは!？」

「もののけ!！」

「　猫。」

櫻が慌ててキクゴローについて説明を始める。
妖怪だと言われて斬りかかられた事もあるからな。
おや？

そう言えば、私も妖怪だな。

「あれ？北辰は？」

キクゴローは私に向かって聞いてくる。

私はその視線に込められた言葉を受け取る。

女の子がいるのに北辰が居ないのは何故
と。

そして、その問いは私も疑問だ。

逆に何故帰ってこないのか私も聞きたい。

それに集落の治め方なんて考えたこともないから聞かれても答えられる訳がない。

「もしかして、迷子になってるんじゃないの？」

キクゴローが顔を掻きながら呟く。

私は小さな声で返答する。

「女が居るのにか？」

北辰に限って女が居る場所に現れないのは変だ。

客が女人の場合、北辰は必ず現れる上に

私が見てもわかるほど美人ならば尚更だ。

「まさか 他の山ノ神に」

「ただいま」

気の抜けた声が中庭から聞こえた。

帰ってきたか、私は一先ず安堵した。

長尾景虎との邂逅（前書き）

駄文ですみません

長尾景虎との邂逅

ほっほう

俺は内心で呟いた。

なんか家にお客さんの気配がして中に入ったら

なんてことはない

そう

そこは

桃源郷だったのだ。

と、多少混乱していたら

「すみません、少しお時間を貰います。」

「あだっ！」

急に小雪ちゃんに脛を蹴られて耳を引っ張られたまま廊下に連行された。

「ちーたん、小雪ちゃん。俺は吃驚したよ。」

「私はお前の反応が予想通りすぎて吃驚した。」

「兄様、くれぐれも失礼の無いように。」

「了解。」

時に、あのヘソを出している鎧の意味は??」

ワキも空いてるし 斬新な鎧だ。

しかし、胸は希少価値ですな。

今回のお客さんはなんかすごいぞ。

「兄様、くれぐれも失礼の無いようにお願いしますね?」

「お、おお。」

ちゃんと人によって真面目になるよ。」

「俺の名前は北辰です。」

わざわざ、遠いところからお疲れ様でした。」

と、こんな感じで自己紹介をしていく。

どんな感じかって？こんな感じだ。

「こんにちは」

「こんにちは」

目の前には、ゆったりと喋る女の子。

遠い昔、湖で溺れていたウサ耳の女の子だ。

ウサ耳の女の子なのだ。

そして、けしからんお胸様もやはり

けしからんお胸様だ

いや、マジで この破壊力はミサイルにも匹敵するんじゃないか？男ならその視線を離せないじゃないか

まさに誘導兵器とはこの事だ。

この時代に誘導兵器が存在しようとは

「 魚、美味しかった」

「さいですか」

何時の話？

多分、初めて会ったときの事だよな？

うん、律儀な娘だ。

お客さん三人の中の一人は昔、会ったことがありました。
うん。

独特の雰囲気があるね。

「 宇佐美 定満」

宇佐美

ウサミ

ウサミミ？

「ほ、北辰。」

宇佐美さんは武将らしい。

腰に差す得物からそれは察することが出来る。

しかし、あのウサ耳と宇佐美の姓の関係はいかに？

まさか、両親も同じ耳を？

そんなことがあり得るのか？

いや、あり得るのだろう。

そしてあの耳はどうなっているんだ？

飾りとは思えない 生えている？

俺はお胸様がウサ耳か、どちらを見れば良いのだ？

胸（革命的な大きさ）か！ウサ耳か！！

と、こんな感じ自己紹介をした。

へソを出している女の子？

こんな感じだよ。

「」

「北辰です。」

「

いいか。

私はまだ、お前の事を　」

はい。ご馳走さまでした。

昔のちーたん見ているようです。
とりあえず名前だけは分かった。
直江兼続ちゃん　さんらしい。
胸？うん。需要は在るよ。

そして、最後。

艶の良い黒髪、豊満な胸、完成されたような人形のようなお姿。

そして、神氣。

いや、吃驚した。

容姿も凄く綺麗だが、声も佳い声だ。

うん、凄い美人さん達だなあ。

神氣？

うん。名前を聞いたときに理解したよ。

長尾景虎。

越後で軍神と崇められる少女。

その知名度は高く、慕う者も多いと聞く。

「たしか、毘沙門天でしたか？」

「　何故それを？」

長尾景虎の視線が厳しくなる。

むう　しまったな。

知ったかぶりをしてしまったからか

「噂で聞いたんですよ。」

毘沙門天の生まれ変わりと信じているとね

と、繋げようと思ったけど繋げたら不審に思われるから止めた。
ナイスな判断だ。俺。

「茶屋の看板娘が聞かなくても語ってくれたんだけどね。」

しかし、別に貴女方のシマを荒らした覚えはありませんが。」

「シマ？」

「いや、此方の話です。」

と、所で皆さんは礼儀正しいですね。」

「先程も聞いたのだが、そんなに此処へ来る客人は礼儀が悪いのか？」

「先程も？」

そりゃあ、大体が『貴様の娘を嫁にしてやらんこともないぞ？んん？』

みたいな事を言う奴ばかりですからな。」

「だから、練習したのか!？」

「どうした、ちーた　千百合??」

練習?したに決まってるだろう!」

「そんな人を不快にさせる練習せんで良いわ!!」

「千百合、お客様の前だぞ?

声を荒げるのはダメだよ。」

「兄様、真面目に対応してください。」

「いや、な、小雪ちゃん、凄く本気で台詞練習したんだけど。

ごめんなさい。」

身体の向きを変えて俺は素直に頭を下げる。

小雪ちゃんの睨み方がヤバイッス。

そして、また身体の向きを戻す。

「本日の用件はなんでしょうか?」

「貴方が賢者と唄われている北辰か?」

「賢者かは知りませんが俺が北辰ですか?」

現れる沈黙。

しまった!

会話が續かない返しをしてしまった！
せっかく、話を戻してくれたのに。

「すみません、もう一度お願いします。」

「う　　うむ。」

俺は息を整えてもう一度

「本日の用件はなんでしょうか？」

「あ　　貴方が賢者と唄われている北辰か？」

おいおい、なんて返せば良いんだよ。

「　　なんて返せば正解なんだ？」

俺は小雪ちゃんに首だけ向けて聞いた。

小雪ちゃんは溜め息をつく

「すみません、兄様は少々混乱しているようです。」

無駄な茶番にお付き合いさせてしまい申し訳ありませんでした。

今少し、お時間を頂きます。」

小雪ちゃんは一気に捲し立てると

ジェスチャー（笑顔と気迫）で俺を廊下に出ると促した。

「冷静になってみると凄い混乱してるね。」

俺は廊下に出て呟いた。

今、客間では俺の娘達が繋ぎ（暇潰し）をしている手筈だ。

俺は真面目な顔で小雪ちゃん、ちーたん、櫻ちゃん（権力順）を見てから呟くように言う。

「あんな美人さんに訪ねられる覚えは無いんだけど。」

「どうやら、兄様の噂を聞いて見に来たらしいです。」

「マジでか。」

「どうしよう、どんな対応をすれば」

変態を全面的に出すべきか。

真面目に行くべきか。

「兄様？」

「真面目にやるさ。」

「丁度、良いし。」

そろそろ、誰かが天下統一してくれないと簡単に外国の諸国に潰されるだろうから。

「じゃあ、行きますか。」

俺は襖に手を掛けて再び客に会いに行った。

「では、気を取り直して。」

本日はどのようなご用件でしょうか？

あ、すみません。これはさっきやりましたね。」

俺は頭を捻る。

どうしよう、客人の対応なんてわからないぞ。

「えっと、北辰と言います。」

まあ、職業はよろず屋をやっておりますつと。

その前は傭兵として生きてました。」

「何故、棒読みなんだ。」

ちーたんがボソリと呟いた。

再び訪れる沈黙。

コレは俺が悪い訳ではあるまい。

しかし、どうすれば良いのだろうか。

誰か、現状を打開してくれる 来た！

「アニキ！！アニキ！！アーニーキー！ただいま戻りましたあ！！」

中庭へ繋がる障子が開かれて人影が飛び込んできた。
俺は、声だけでその人物を特定する。

「ハチ。お客さんが来てるんだぞ？」

すると、人懐っこい笑みを浮かべていたハチは

「お客さん？ハウア！！玄関から出直してきます！」

ハチは急いで逃げ出した。

小雪ちゃんに説教されるコース確定だな。

「すみませんね、アレは良い奴なんですよ。」

犬みたいな子だしな。

そう言うと同時にハチが来て隣に座った。

「おつかいは出来たか！」

「出来ました！！」

「そうか、偉いぞ。」

俺はハチのオールバック風な髪をわっしやわっしやと撫でる。
すると、ハチはまた人懐っこい笑み浮かべた。
犬ならば尻尾を振っている事だろう。

「コイツはハチ。この家の飛脚役をしている。」

俺はお客さんに紹介をする。

ハチはこの家の飛脚をしている。

そして、ハチにはもう一つ秘密がある。

すると景虎さんはまた苦笑して

「見た限りこの家に男手は二人、大変ではないのか？」

その一言に俺は満足気に頷く。

小雪ちゃんもちーたんも櫻ちゃんも頷く。

景虎さんはソレを不審に思ったのか首を傾げる。

すると、次に行動を起こしたのはハチだ。

ハチは立ち上がると地団駄を踏んだ。

「だああああ！俺、女！！女！！女！！お・ん・なあああ！！！」

そう、ハチはおなご（女の子）なのだ。

俺でも認識できないおなごなのだ。

確かに、良く見ればおなごだと言うことは分かる。

分かるのだが、おなごだと理解しているのだが。

どう頑張っても男扱いしてしまうのだ。

まさに東方の神秘。

「そ、それは失礼した。」

と、景虎さんが言っただけだ。

「本当に？」

ウサ耳　宇佐美さんが聞く。

隣では直江さんが小さな声で“宇佐美殿！！”と注意している。

「なんで誰も信じてくれないんだよおお！！」

こうなったらぬいでやるしか！！」

「はい、出口はあちらです」

俺は中庭の方を指差して言った。

すると、ハチは泣きながら飛び出していった。

「腹が減れば戻ってくるんで気にしないで下さい。」

「そ、そうか。」

「して、何か他に用事がありますか？」

俺を見に来たのならこんなもんですが。」

俺は肩を竦める。

生憎、賢者なんて柄じゃないしな。

そうすると、何故か景虎さんが言ってきた。

「こんなもの？ふふ、そう謙遜はするな。」

この部屋に入ってから一度たりとも皆を間合いから離さなかっただろっ？

何があっても護れるように、違うか？」

俺は、その言葉にこめかみを搔く。
ばれちゃったか。

ばれないように頑張ってたのに。

「貴様！」

景虎様を疑うとはどういうことだ!!」

「ちよつ！待ってくださいよ直江さん。

大体、俺は貴女方の事を知らないんですよ？」

ウサ耳の彼女は軽く知り合いだけどね！

すると景虎さんは此方を真っ直ぐ見て言う。

「北辰は私を、長尾景虎を見てどう思った？」

まだまだ可愛らしいと思いました。

まだ少女を残す美しさだと思いました。

なんて言ったら怒られるなあ。

「測りかねますな。」

「そう言うことを聞いているのではない。

そのくらい分かっているのだろう？」

景虎さんは聞いているのだ。

俺が仕えるに値するかを。

「
」

俺は景虎さんと視線を重ねる。

「もし、急ぎの事が無いと言っならば、私を見定めてみるのはどうだ？」

「
貴女を？」

「うむ。知っているとは思うが。」

我が越後は今、混乱の極みにある。

義を通すにも力が必要なのだ。よって、

今の我が軍には義の旗を支える実力のある者が必要なのだ。

そして、お前は軍師として戦った経験も在ると聞いた。

北辰、お前は私と共に戦場で肩を並べる気はないか？」

俺と景虎さんが視線を交差させる。

だれた、軍師として戦ったと言ったのは！

「即断しろと言わぬ。」

納得が行くまで私を見定めるが良い。」

「
」
一点の曇りも無い蒼い瞳で、俺の心を見透かすかのように覗き込んでくる。

「 他の方から聞いたかも知れませんが

俺は、生憎と作法も知らない礼儀も知らないそして、

何よりも流れの方です。

跡目争いをする越後の中、いくら戦力が必要とは言っても、

どこの馬の骨とも分からぬ外の方を軍師として雇っては

家臣に不満を持つ方も現れるでしょう。」

直江さんとか直江さんとか直江さんとか！

「そうすると、貴女の威光に傷が付くでしょう。

それに、貴女ならば越後の統一は可能でしょう？

俺を雇うのは良策とは言えませんな。」

非常に残念だけど、惹かれたうしろ髪を断ち切るしか無い。
個人的には美人さんだから影で支援ぐらいするかな。

「 ふふ、軍略家の弱点はみな同じなのだな」

小さな笑い声が部屋の中に響いた。
景虎さんは微笑みを浮かべている。

「　　続きを。」

俺は続きを促す。

「名のある軍師でも、その明晰さ故に見えぬものもあると言つことだ。」

我が軍には下らぬ妬みや猜疑心など持ち合わせた家臣はおらぬし、

決してそのようなことで揺らいだりはせぬ。」

確固たる自信をもって言い放つ。

俺はその言葉に満足気に頷く。

「貴女が言つならばそうなのでしょうね。」

ならば、俺のような者を雇おうとする訳は、戦乱に呑み込まれる越後の、

民や家臣、そして義の為ですか？」

俺がそう言つと景虎さんは目を丸くさせた。

そして、もう一度姿勢を正し

「私はお前の眼の中に光を見た。」

だから我が天道を歩む為、お前の力を貸して欲しい。」

今の天（空）は曇りがちだから残念だなあ。

「私はよろず屋であり傭兵です。

この意味がわかりますか？」

「貴様！黙っていれば又ケ又ケと！！」

直江さんの怒りが頂点に達した。

そりゃ、こんな言い方をすれば金が目的だと思われる。
え？宇佐美さん？寝てるよ？

「兼続！！」

「か、景虎様！？」

景虎さんは視線で続きを促してくる

「そうですね。

1つは週に二日間は暇を貰いたいです。

それと、今は南出羽のものがみんって女の子に周一で雇われてます。

秘密は漏らしませんが信用できないなら断って下さい。」

「ふふ、約束は必ず守り。信義に重き者、下の町ではそう言われていたぞ？」

「まあ、約束を破ることはしませんが。

では、一番欲しいものを言います。」

俺は言葉を一度切る。

「子供達が飢える事が無く安心して遊べる日ノ本を。」

しかし、次には何の気負いも無いように、世間話をするかのように言う。

「ソレが貰えるならば貴女に仕えましょう。
貴女が俺を必要としなくなるときまで。」

そう言つて俺はお茶を飲む。

“ その時まで俺が生きてるかわからないけどね。
そう他人事のように考える。”

何か今日見た夢が全て夢だとは思えないから。

「ふふ、ははははは！面白い、面白いぞ！

そのような啖呵、初めて聞いた。

北辰。私が、この長尾景虎がその欲した物を作り上げる。
ついて参れ！！」

「承知。」

こうして、俺は安定した就職先を見つけたのだった。

「所で、この家には幼子が沢山居るのだが、下の町の子供達なのかな？」

「。」

俺はお茶を飲んだ。

「。」

俺は腕を組んで天井を向く。

「娘だよ。」

俺はお茶を啜る。

「俺のね。」

本人達はどう思ってるかわからないけど。」

迷惑がられてたら嫌だなあ。

今まで考え無いようにしてたけど。

嫌なのかな、嫌だと思われてたら嫌だ。

「戦か？」

直江さんが聞いてくる。

俺は首を左右に振ってから答える。

「売られたんですよ。大人達に。」

「なっ！！」

「七割程が売られた子供達ですよ。」

つまりは、七割が奴隷となるかもしれなかった子供達だ。

「幼少期の傷は深く、人間の心は脆い。」

ですから、知らぬ者が触れてあげないで下さい。」

「知らぬ者??」

「親に売られた経験は?」

俺は微笑みを浮かべながら客人の三人を見る。

「あ、あるわけがない!」

直江殿が返してくる。

動揺するほど衝撃的な事実だったのか?

「ある“わけがない”。

そう思えるのは凄いです、いえ。

普通の事なのでしょうね、しかし俺はこう言います。

“ない” わけではない。

価値観の違いですよ、あるわけではない。

その言葉がどれほど残酷な事が、理解していますか？」

そして俺はお茶を飲みながら、言う

「参考までに覚えておいて下さい。」

「すまなかった。」

驚いた、直江殿は素直な人なんだな。

後は世間話や俺の法螺話をして、暫くしたら

景虎さん、いや 景虎様は帰っていった。

宇佐美さん？

必死に起こしてお引き取り願いました。

しかし、宇佐美さん。

すさまじいポテンシャルだったな。

番外

「待て。」

長尾景虎は帰り道の途中、呼び止められた。
それに合わせて後ろを歩いていた二人も止まる。

長尾景虎の前方の木の影から人影が現れる。

その人物は男物の着物に髪を後ろまで上げていた。

「ハチ殿と言ったか？」

「ハチで良い。」

俺はアンタをまだ信じた訳じゃない。」

直江兼続が反応するが、長尾景虎が手で制する。

「でも、アニキはアンタを、アンタ達を信じる。」

それは別にアンタだからって訳じゃない。

アニキはどんな奴でも一度は最後まで信じるんだ。

アニキを裏切る奴は数え切れないし

アニキを裏切らなかった奴は数える位しかない。
だから、俺はアンタ達を信じない。

だから
」

ハチは何の迷いも見せずに頭を下げる。
今まで見せていた敵愾心も棄てて。

「アニキを裏切らないで下さい。」

「ならば、ハチも私の元に来ないか

いや、北辰の下に就いたらどうだ?？」

「俺がアニキの下に？」

その手があつた!!

アニキ!!アニキ!アーニーキー!!!」

長尾景虎の言葉にハチは何かに気付き帰っていく。

「ふふ、面白い奴だ。

ハチも、そして北辰も。

私が此処に来たのは天命だったのかも知れぬ。」

会つてすぐの者に対する期待と微かに混じった喜び、

長尾景虎の呟きは吹き抜けた風に紛れて消えていった。

越後へ参りました（前書き）

すみません、繋ぎです

感想・ご要望などありましたら宜しく願います。

越後へ参りました

「ねえ、北辰。」

肩の上で声がする。

キクゴロー、猫でありながら人語を話す種族らしい。

なんでも、頭の中に歴代のご先祖がいて脳内会議が開かれているらしいのだ。

良くわからないが、頭が良いので

俺が知っている生活の知恵を教えている。

そうすることでもしもの時に対応出来るからだ。

コレも人生経験だと思いキクゴローを就職先（越後）に連れてきた。

「ねえ、北辰。」

「 なんだ？」

「何かついてきてるように見えるんだけど。」

「奇遇だな、風呂敷を頭に巻いた如何にも泥棒的な奴が

後ろからついてきているように感じる。」

ハチだ。

あの昆虫の蜂じゃないと言う事は覚えておいて欲しい。

我が家のマスコットキャラの男の子 じゃない女の子だ。

因みに一人称は“俺”であり飛脚役をしている。

俺は振り向く。

「 気のせいかな。」

「 現実逃避は止めなよ。」

キクゴローが俺に対して言う。

俺は振り向いた先にある茶屋の柱を見る。

「 現実でアレを見るとイラッ!とするよね。」

「 現実? なんの事? 」

「 いや、我が妹分ながら素晴らしい尾行だな と。」

「 どうするの? 」

「 遊びで来ただけだろ?
放っておけば帰るさ。」

俺はそう答えてお城に向かう。

お城なんて凄いなあ。

一応、着物は普段着ているボロボロの着物ではなく立派な藍色の羽織と着物だ。

そう、アレは朝の事だ。

俺が朝目覚めて着替えようとしたときの事である。

「あれ？」

小雪ちゃん。俺の服は？？」

「ソコに置いてあるじゃ無いですか。」

「いや、俺の」

「ソコに置いてあるじゃ無いですか。」

「いや、俺の娘から貰った服の事なんだけど。」

「とりあえずソレを着てください。」

「ついでに聞くけど、俺の箆笥から服がゴッソリ無くなってるんだけど？」

気のせいかな。

いや、気のせいではない。
だって服が無いんだから。

「兄様、着てください。」

「着物は分かるが羽織まであるんだけど。」

「兄様、良いですか？人に仕えると言うことは」

今まで無かった説教が待っていました。

つか、小雪ちゃん。

どんだけ説教のレパートリーが在るんですか？

兄はその一点に疑問を持ちました。

「ねえ、現実逃避してないでどうにかしたら？」

「そうだな、小雪ちゃんに叱られても難だしな。」

ハチ！こっちにおいで。」

「はい！アニキ！！」

「ハチが犬に見えてきた。」

俺は呟くとキクゴローが答える。

「僕には尻尾が幻視出来るよ。」

「ハウツあ！！」

俺がハチの頭を（犬にするように）撫でると変な悲鳴を上げてハチは再び隠れた。

アレで隠れたと思ってるのが凄しいし

一度、見付かったのに再度隠れるとは

それ以前にあの柱から出過ぎてる状態で隠れたと言えるのか？

「ハチ！怒らないから、おいで。」

すると、ハチはパアアア！と顔を輝かせて出てきた。
まあ、なんとかなるだろ。
戦闘なら役に立つし。

「所でお前まで服が良いやつだな。」

「うん！朝起きたら全部消えてこれだけだった！！」

ハチよ　お前もか。

と、言うことは小雪ちゃん、ハチがついてくること知っていたのか。

城へ

「え？何で初めから二人つてことになってるの？」

何か門番さんに一人増えたと言ったら
首をかしげられて初めから二人と聞かされていたらしい。

つまり

「景虎様パネエ。」

景虎様なんで知ってるの？
コレが軍神の力なのか。

「何か勘違いしてるように感じるんだけど。」

「さて、気を引き締めて軍義に行こうか。」

俺は呟いて軍義の間の襖を開けていった。

軍義省略

「まあ、若干手抜きであることは否めないな。

要望が在れば書くことも吝かではないが。」

「アニキ？何いつてるの？」

「いや、景虎様の演説もとい鼓舞は凄かったな。

ん？ハチ、不機嫌になってどうした？」

キクゴローも肩の上で、御先祖も一番って言ってるよ、
と言っているほどの大絶賛だった。

ハチはハチで『アレくらい』とか『アニキなら』

とか意味のわからないことを呟いている。俺は立ち止まり言っ

「ちゃんと全員、鍬は持ってきたか？」

俺は、集まっていた八十人程の農民に聞く。

この農民達は俺に割り当てられた部隊だ。

いきなり八十人とか正気か？

と思ったけど戦国時代とはこんなものと解釈した。

いきなり部隊を預けるのも信頼すぎだと思う。
だから景虎様にはそこはかとなく注意しておこつとおもった。

「あの、お侍さん。」

あつしらは一体何をするんでしょうか？」

一人のおっさんが聞いてくる。

そして俺はその言葉に苦笑する。

「お侍じゃ無いよ。」

まあ、どちらかと言えば俺も農民だからな。

じゃ、ちょっとついてきて。」

団体ご一行は町外れまで移動した。

ソコはちよくちよく草が生えている荒地だ。

以前、畑でも作ろうとして失敗したのか
戦で荒らされたのか

「じゃあ、耕すか。」

「へ？」

「じゃあ、分担を別けよう。」

手拭いで石を投げる役と草を素手で刈る役そして鍬で抉る役に別け

ようか。」

「待ってくださいよ、お侍さ」

「北辰だ。」

そしてお前らの命を預かる奴でもある。

何か異存があるのか？」

「あ いえ、何でもありません。」

「石は手拭いで使って振って投げろよ」

俺は落ちてた手拭いを小石を挟んで2つにたたみ
小石を重みにグルグルと回して手拭いの片方を離す。
すると小石は小気味良く空に吸い込まれていった。

「俺はお前等に人を殺す訓練はさせんよ。」

生き残る最小限の力はつけて貰わないとな。

とりあえず、農作業は体力も力もつくし国も豊かになる良いところ
くしだ

けどソレだけじゃつまらんしちょっとかい出すけど。」

「ちよっかいですか？」

「うん、たまに俺とコイツが襲撃するから

どんな方法でもいいから防いで反撃してな。」

俺は鍬を手に取って防ぐフリをするして

鍬を風呂はらって防御、反撃の一例を見せる。

すると、怪我をするんじゃないかと心配してきた奴が居たので。
俺は当然だとばかりに頷くハチに指示を出す。

「ハチ、あの岩に頭突き。」

「はい!!」

ハチは人間が腰掛ける程の岩に頭突きをして。

粉碎した。

「と、言うわけだから死ぬ気だな?」

「わき腹いただき!」

俺は布に包まれた石を投げる。

「うおおおおっ!!」

一人の若者が振り返り鍬を振るう　　が！
鍬をすり抜け石は若者のわき腹に直撃。

「気迫は良いけど、石を弾くのに気迫が要るのか疑問だな。」

俺が呟くと同時に若者が崩れ落ちる。

「ハチ、追撃！」

「はい！！！」

「ちよっ！心配するとか！ギャアアア！！！」

若者はハチに投げ飛ばされた。

最初の頃は気絶していたが今では石ごときじゃ皆、ピンピンしてる。
頭とか狙うと普通に弾くけど
腹とか狙うと普通に当たる

「無意識に選別してるのか？」

また器用な真似をするなあ。」

危険な攻撃と比較的安全な攻撃を分けるとか。
最初に比べれば多少良くなったくらいだ。

「じゃ、明日は休みな。」

俺は全員を集めて告げると全員の動きが止まる。
まるで信じられないものを見るような目だ。

「なんだ？」

明後日に戦が控えてるから明日は作戦練るから

休みと部隊内の軍義を同時に行うだけだ。」

「い、戦　ですか？」

「気負うな、誰一人として俺の隊から死者は出さないから。

じゃ、解散！」

俺は手をシツシツ！と振って農民達を帰らせる。

「ハチ、お前に武器をやる。」

ハチは雷に撃たれたかのように棒立ちになった。

俺はなんだか珍しいリアクションをするハチを見る。

「もしかして、いらないか？」

「いるるあああ！！！」

ハチが突然タツクルしてくる。

俺はこふつと息を吐きながら吹き飛ばす。

ギャグに走るとは俺も堕ちたものよ。

「アニキ！？アニキいいいい！！！」

「と、遊ぶのも大概にしてくれな。」

今すぐ本家に帰って小雪ちゃんに言って貰ってこい。

明後日までに 来れるな？ハチ。」

俺はわざと挑発するように聞く。

ハチは満面の笑みで“ハイッ！”と答えると走って消えた。

俺はソレを見送ると自分に割り当てられた部屋へ戻る。

だって、仕事はまだ残っているのだから。

人知れず俺はため息をついた。

仕事仕事仕事 戦?戦というか一方的な暴力(前書き)

すみません、やはり戦闘描写は稚拙です
感想ご要望待ってます

仕事仕事仕事 戦？戦というか一方的な暴力

「させと、こんなものかな」

俺は書き上がった治水工事と開墾に関する報告書にもう一度目を通してうなずく。

先程の訓練（と言う名の開墾）を終えた後から始めて外は既に陽が傾いている時間だ。襖が橙色になっっているから綺麗な感じだ。

「今日の分の書簡は終りだな。」

大体、軍師って言っても

戦場で軍配を振るって雇い主を勝利に導く。

と、おもわれがちだが、そんなことは滅多に無く書類や雑務などの国を支える政まつりごと

が主な仕事で戦の後の統治が一番重要な仕事なのだ。戦う前に勝てるのが軍師として一流らしい。

俺からすれば戦うことすらさせなくて一流だろうと思う。それに、戦が戦国時代の醍醐味だとおもわれがちだが国の基礎がなければ戦なんぞできない。つまり

「北辰っ！！お前という奴はっ！！」

突然、誰かが襖を勢いよく開けた

「あ、すみません！ソコにはお茶が！」

俺はたまたまお茶を襖の近くに置いていたのだ。

「うわっ！！な、何をするっ！！貴様 嫌がらせか！」

寧ろ、そんな勢い良く来ると誰が予想したのだろうか。

「申しわけありません。」

それで、どうかされましたか？」

すると直江殿 じゃなくて兼続殿は憤慨したように言う。

此処で補足しておこう。

兼続殿は景虎様と同じ様に蒼を基本とした鎧？を身に付けている。

しかもその鎧はピッチリとしていて

何故かヘソを露出する

何故かワキも露出する

下に至ってはどうみてもミニスカ（鎧）です。

本当にありがとうございます

いいや、まだ早い、良く見たら。

白 ニーソ

じゃ無いですか？

いいや、さらに

その上に

黒のハイソックス

だー！？

何でこの時代は衣服に関してだけ水準高いんだ？

そして兼続殿。

貧乳いえ　希少価値はステータスでしょうか？

「どうもこうもあるか！何なのだこれは！？」

目を吊り上げて俺を睨む兼続殿が

俺の机の上に数枚の書簡を叩きつけてくる。

なるほど、当たり前事を聞くなと？

そうですね、平原には平原の生きざまが

すみません、ようではなく憤慨しております。

そして叩きつけられた書簡は昨日俺が書き上げた書簡だ。

「お前の提出した報告書も提案書も！

全てに渡って不備ばかりではないかつ！？

良くこれで渡り軍師などと言えたものだな！？」

「渡り軍師と名乗った覚えはありませんがこれは分かりきった事と省略して。」

「問答無用！！当家には当家のやり方という

ものがあると、あれほどに言ったのにまだ分からぬのかつ！？」

「以後きをつけます」

「貴様、この間も同じ台詞を吐いたのを忘れたのか！？」

今日という今日はもう見過ごせぬ！

私が書状の書き方と言うものをお前に教えてやる!!」

そう言いながら、語気の割に丁寧な所作でちょこんと俺の隣に座る兼続殿。

相当に怒っているとはいえ、身体が小さいからか隣に来ると妙な可愛気を感じてしまう。

「いいか！まず表題の書き方から違うのだ！

いいか、これは」

しまった、この間は誤魔化したけど

今日のお説教はかなり長くなりそうだ。

何か俺は目の敵にされてるからどうやって切り抜けるか。

「おい！北辰！ちゃんと私の話を聞いているのか!？」

「もちろん聞いておりますとも。

お腹いっぱい　もとい完璧です。

それよりも兼続殿、愛の前立が少し曲がっていますよ。」

俺は手を伸ばして前立の角度を日頃のように直す。

「な、何をするか!？」

「あ、すみません。」

「む、いや、いい。」

道理で今日は何か調子が優れないと思っていたのだ」

つか、愛の前立とか斬新だよな。

前立はアレだ自分を派手に見せて戦果を上げたときの証人にさせるためのアレだろ？

「その愛は景虎様への誓いを表しているのですか？」

俺が場を和ませようとして言うと

兼続殿は面白いように動揺してしまった。

「な　　ななっ！何だと！？

わ、私如きが景虎様に愛などと

そんな畏れ多い劣情がある訳ないだろうっ！？

こ、これは愛染明王の『愛』だ！この痴れ者がっ！！」

やべえ、肺活量半端ないぞ？

「それは申し訳ないです。」

「そうだ！

私はそんな話をしに来たのではないのだ！

まったく、貴様はすぐにそうやって話をはぐらかそうとする！！

反省の色と言うものが見えんだ！」

謝ってみたけど、誤魔化せてなかった！！

「とりあえず、俺の出した提案書に矛盾点は無かったようで良かったです。」

「何がよかったものか！！」

貴様の出す提案書は確かに現場でしか
分からぬ知識を持ってソレを元に出してくる。

だがな！貴様の読み難い提案書はな 読む気を無くすのだ！！！！」

それ

かんけいなくね？

でも、兼続殿は俺の様子を見に来たのだろう。

書簡は建前で実際は俺の監視だ。

戦を近くに控えたから逃げ出していないかを見に来たのだと予測する。。

俺はソレを感じて内心で笑う。

（正直で素直すぎるが 正しいのだろうな。）

元々、監視など柄ではないのだろう。

じゃなければこんな敵を見るような目はしないから。

「読む気を 無くすですか。」

こればかりは想定外。

モチベーションの問題は無理ですな。

「あ、いや、すまん。言いすぎた。」

俺はお気になさらずと答えようとした所で襖が少し開いてキクゴローが入ってきて

「あ、こんなところにいたんだ。

兼続、景虎が呼んでるよ。」

そんな、救世主的な言葉を下さった。

ナイス！ナイス！キクゴロー！

「なに！？景虎様が！？」

そうしてドタタタタタ！！と兼続殿は去っていった。因みに言うときくゴローは全ての人に対して呼び捨てだ。今度、ゆつくりと話し合う必要があると思う。

「北辰も普段、女の子にはちゃん付けだよね。」

まあ、そんな事よりもだ。

俺は何故にこの時代は露出が多いのか考える。そしてその結論を出した。

その結論をキクゴローしか居ない部屋で呟く。

「ええじゃないか。」

「と、言うわけで集まって貰った訳だよ。」

「すみません、まだ何も言われてません。」

「君の妻から相談されてな君が浮気をしてるんじゃないかと。」

俺はツツコミ？を入れてきた若者に言葉を返す。

現在、この部屋には俺に預けられた農民達が集まっている。

部屋と言っても訓練と言う名の農地開拓の為の休憩小屋なのだ。

「な、何て返したんですか！？」

それよりも、何で妻が北辰さんを知っているんですか！？」

「何を馬鹿なことを。俺はお前等の命を預かる奴だぞ？」

お前等の命を預かるなら挨拶位するのが筋だろう。」

「そ、それで、何て返したんですか！？」

「君が妻に簪を買ってやるために動いてる何て言えないだろ？」

だから、それだけは無いと返しておいたが。」

「北辰さああああん！！！！」

泣き付いてきた農民を平手で殴り飛ばす。

俺は気を取り直して話を進める。

「今日、集まって貰ったワケは

また皆でこの部屋に集まれる為の作戦を練る為だよ。」

俺は言いながら懷から紙と数個の石をだす。

俺は地図（と言う名の紙）を開きながら伝える。

「俺達がするのはアレだ。

皆大好き、奇襲の奇襲だ。」

俺は石を地図の上に配置する。

作戦の概要は知つとかなないとダメだからな。

「基本的にお前等のすることは石を投げて集団で敵を叩くだけだ。」

「待ってくださいよ！鍬を振るうことは刀を振るうのと同じだと

」

「ソレは冗談だ。忘れる。

じゃあ続けるぞ、俺達は後方支援となる」

俺は地図の上で石を滑らせる。

戦況を表すためだ。

「景虎様達が進軍するとこの辺りで敵が現れると思う」

俺は色が違う石を敵側から進める。

「そして噂から見るに景虎様を止めることは出来ないだろう。」

そして此处で敵は奇襲をかけてくる。

「相手も人数が少ないだろうし多分こちら側だ。」

俺はもう一つ敵を指した石を横から景虎様を指した石に当てる。
そして俺達を指した石を進めた。

「長尾様に届く前に戦ってはダメなんですか？」

そう言ってきた農民の顔に戦に対する迷いは無い。
いや、全員が景虎様の為に命を捧げても良いと思っている。
気の良い奴等ばかりだからこそ俺は死なせない。

「奇襲と言うものはな 相手に知られてないことが前提だ。」

相手の予想しない攻撃を加え動揺させて徹底的に潰す。

まあ徹底的じゃなくてもいいけどもし奇襲が

バレてしまつて退却されたら後々面倒になる。

それに相手も奇襲している部隊だ。

自分が奇襲されるとは微塵も思っていないだろう。」

俺はもう一度説明を繰り返して覚えさせる。

「続いて戦い方だ。」

俺と今は居ないがハチが相手の奇襲隊の前に立ちはだかる。

その瞬間、お前等は農地開拓　あ、訓練でやらせた礫投げをしてもらう。」

「やっぱり農地開拓じゃないですか！！

鍬の話とかは嘘だったんですか！？」

鍬の話とかはアレだ。

刀を振り降ろすのと鍬を振り降ろすのは似ている
だから次の戦で大活躍だ」と言う話だ。

「喧しいわ、長槍使うから長槍振るえよ。

そして礫を投げ終えたら長槍で攻撃。

出来ればこの辺りで終わらせたい。

一応、肉弾戦の訓練（ハチの襲撃）はさせたが心配だからな。

もし、残りが突撃してきたら即座に三人一組で組んで

敵に対応、対応の仕方は教えてないから死ぬって事で。

一人になったら逃げろ、寧ろ基本近付かれた逃げろ。

優位な立場に立てるまで逃げろ。」

「に、逃げろつて。」

「俺とハチが援護する。」

お前等一人の死がこの国の損失なんだ。

死ぬことが目的ではないぞ　わかつているな？

ま、真面目なのはこれまでだ。

気にすんな礮投げで終わらせて見せるさ。」

俺は全員に小袋を渡して帰らせる。

そして俺も地図を懐に入れてから城に戻る。

戦の準備はまだ沢山あるのだから。

城へ

「いよいよ、明日だねえ。」

キクゴローが肩の上から言ってくる。

俺は慌ただしく準備を始めている軍を見る。

兵糧やらなんやら

この時代の戦争は人がいるから仕方がないけど　　凄いなあ

城なんて俺の時代、爆撃とかあったからな。

あの変態（傭兵）達と一緒に居たときは　　うん。

滅茶苦茶だったな。

だって、基地を単機で爆撃する変態（女）や

有り得ない機動で被弾率零の変態（女）や

戦場をライフル1つで歩く半裸の変態（女）

いや、やめよう。

思い出すと悲しくなってくるから。
でもアレだな俺ともう一人以外全員女の子だったな。
馬鹿みたいに強かったけど。

「北辰？どうしたの？」

「いや、戦前なのに重々しくないなと思ってな。」

質が違うつて言うのかな、緊張感が無い。

その癖、弱肉強食の世界だ。

未来は銃がありミサイルがあるから、

どれだけ離れようが油断なんか出来なかった。

だが、モノは豊かで弱肉強食ではあったが

自然の弱肉強食と比べれば生易しかった。

しかし、今は飛び道具は離れすぎれば安全で

敵が見えなければ緊張すらない奴がいるだろう

しかし、その反面、モノに乏しく

無ければ奪うしかない弱肉強食の世界だ

奪わなければ生きられない点では今の方が圧倒的に強い。

しかし、人を殺すという罪の意識は無いに等しい。

戦場独特のあの血が止まるような感じが無いのだ。

今と未来、どちらが幸せなんだろうな。

「人の命はそんなに軽いのか？」

俺はキクゴローに聞く。

「おかしくないか、明日には戦がある筈なのに

平然と武功だの手柄だの軽すぎるとは思わないか？」

キクゴローは暫くして、“僕に聞かないでよ”と答えた。
確かにそうだな、猫に話す言葉ではないか。

俺は少しだけ不安になる

もし戦が順調に終わって誰かがその勝利を俺の前で

抑えろ。

それがこの世界の常識なんだ。

「だが、俺は出来ることをするだけだ。」

俺は精神を戦へと作り替えていった。

戦へ

「アニキ！！持ってきました！」

戦の日の朝、ハチは布に包まれた棒を持ってきた、中身は2mちょつとの槍だ。

しかし、目の前のモノは布に包まれた上に御札が貼ってある。
一見すると妙に禍々しく見えてしまう。

「じゃ、それお前のだから。」

「え？お札が剥がせないけど」

「力量不足って事だな。」

俺は集まっていた俺の隊と合流する。
やっぱり締まらない。
それでも戦は行われる。

「
少し過大評価だったか。」

結果から言えば予想通りの流れだ。
俺は左手を上げ敵の奇襲に向けた。
すると、一定の方向から礫が敵に大量に降り注ぐ。
その中に八チと俺は入っていく。
景虎様ご一行は先に進んだ。
俺達がなんとかすると判断したのだろう。

「八チ、景虎様を守れ。」

意識がある兵士が少ないので八チに言う。
八チは何故か『あいつの？』みたいなことを呟いたが
言われた通りに走り抜けていった。
俺は八チを横目に見て拳を浅く握り振るう。
一人一発食らわせて完全に気絶させる。
いくら長槍でも危険はあるからだ。そして奇襲を完全に止めたあと
俺の隊に指示をだす。

「俺達は人数が少ないから邪魔になる
今から後方に戻り進軍の調整を行う。」

蜘蛛の子を散らすかのように農民が走って戻る

あれ？

もしかして怖がられてる？

確かに殴るのは野蛮だけど一番楽なんだけど。

そういえば小雪ちゃんも兄様は無表情で人を殴るから怖い
って言われた事があるな なら、笑顔で殴るか。

余計怖くないか？

俺は首を傾げる。

笑って殴るか無表情で殴るか

どちらが正しい いや、怖くないのだろうか。

「ん？」

俺は眉を潜める。

血の臭いに混じるほんの少し 実際の量は

手のひらに安々収まるくらいの量だろう

血の臭いの隙間に混じる 火薬の臭い。

「火縄銃か？」

ハチなら対処出来るだろうけど不安だな。」

この臭いからして二、三発が限度だと思っけど

「ちょっと出てくるから。」

そう告げて俺は地面を蹴った。

ハチSide

戦は実際にアニキの言った通りに進んだ。

寸分違わずまるで知らされていたかのように敵は現れる。

俺はアニキから貰った武器？を握ってアニキを倣って様子を見る。
全然わからない。

だって森ばかりだし 木しか見えないし

アニキは意識を戦に切り替えてるから

何時もみたいな優しい雰囲気じゃないからつまらない。

アニキは戦が嫌いなのに景虎は有能なアニキを無理矢理戦場に送り出した

そのせいでアニキも笑顔じゃない。

「ハチ、景虎様を守れ。」

無機的なアニキの声が聞こえた。

「あいつの？」

反射的に答えてしまい俺はしまったと思う。

俺は恐る恐るアニキを見るとアニキの目は恐ろしいくらい無機的だった。

でも、怒ってないことがわかり安堵する。

俺は返事をして長尾景虎の隊の方へ走り出した。

昔からだけど、アニキは戦ではけして表情を表に出さない。

戦いで慌てることなく常に冷静に戦っている。

だから、アニキは強いんだと思う。

でも、前にアニキに言ったら

『そりゃ、お前が若いからだ。若いから気付かない。』

俺だって常に慌ててるし無表情とか無感情ましてや無機的な目は弱さの証だ。』

と返してくれたけどまだ俺にはわからない。

わかってることはアニキはアニキって事。意味不明

ソコで斜め前に景虎の旗が見えてきた。

俺は今まで木々に飛び移って移動していたけど一度地面に降りて助走する。

人前でやるなって言われてたけど他の兵からは見えないところだから大丈夫だと思う。

アニキにバレないで！！

そう切に願いながら大地を踏み締め翔んだ。

俺は越後の兵士達？の上を飛び

そして辿り着くと同時に景虎の延長線にいる

敵兵に文字通り飛び蹴りを繰り出す。

当然、敵兵の前には景虎が居るわけで ニヤリ

俺は長尾景虎討ち取ったり！と叫びそうになるが耐える。そんな事したらアニキに叱られる。

しかし、景虎は避けやがった 畜生！！

「チッ！！」

「ハチか！？敵かと思つたぞ！」

「護衛に来ただけだ。」

助けに来たんじゃない勘違いすんなよ！！」

「先程、明らかに舌打ちが　。」

うむ、そうか。助かる。」

気に食わない。

アニキみたいな事を言うからだ。

別に助けなどいらぬ癖に

それよりも俺は良いことを思いついた。

俺、頑張る

アニキ、喜ぶ

褒めて貰える。

「うへ、へへへへへ」

「は、ハチ？
大丈夫か？」

「アニキい あーにきい へへへへへ」

ドゴォン!!

急に轟音がして正気に戻る。

なんだ!?

なんかドゴォンの後のチュインツとか聞こえたけど。

「なるほど 参考になる。」

耳に心地よく響くこの声は

「アニキ!？」

「正面から受けるのは厳しいな。」

ここに来て俺は理解する

先程の轟音は火縄銃だ。

火縄銃は外国からもたらされた飛び道具で

アニキが言うには場所によってはアニキでも倒れる
って言うほどの武器だ。

ソレをアニキは正面から受けたらしいと言うこと。

怒られる!?

私の目の前は真っ黒になった。

Side 北辰

「はわあ　あわわわ、ああああ、アニキ!？」

「いや、火縄銃が在るとは知らなかったな。

八チ?八チ!？」

なんか知らんけど八チが暴走してる。

俺はとりあえず指でデコを弾く。

「隙を見せるな。」

そして、囁くように言う。

ただ単に声を低めただけなんだけど。

なんか八チが更に慌ててしまった。

「無傷　だと!？」

この距離で!？」

冑を着用したおっさんがなんか動揺している。

無傷だけど棒手裏剣が少し凹んだ。

火縄銃は　海賊から貰ったものだと言想する。

後々、調べておく必要があるみたいだ。

そして、この位置は邪魔になると思い後ろに退いていく。

後は八チが頑張ってくれると思う。

S i d e 八チ

あ、あああああ!!

アニキが無言で下がっていった

絶対に怒ってる

絶対に 呆れられた

小雪姐さんから迷惑はかけるなと言われてるのに 無言が一番怖い。

俺は何とか氣を奮い起たせる。

落ち着くんだ俺！此处で頑張らないと北辰の一員じゃない。

「俺の名はハチ！！北辰衆が一人！そして、そして」

俺は言葉を止める。

暫く、暫く何故か沈黙が続き
後方、後ろから声が聞こえた

「勢いで言うからだ。」

アニキの言葉に顔が真っ赤になりその場で踞りそうになるが

また、アニキの言葉が聴こえそうな気がしたので

俺は恥ずかしさをまぎらわせるために敵に向かって走り出した。

S i d e 北辰

お、おおう

ハチが物凄い頑張ってる。

戦は勝利だ。

先程、城は落ちたが

何故か張り切っているハチは未だに残存兵力を叩いてる。

悪いことではないから見守る。

「おい、北辰！」

「兼続殿。どうなされましたか？」

景虎様と宇佐美さんも、もう戦は大丈夫ですか？」

「そんな事より先程の轟音はなんなのだ！？」

「大陸　南蛮の武器ですよ。」

鎧くらいなら突き抜ける故、気を付けて下さい。」

俺は懷から密かに押収した火縄銃を兼続殿に渡す。

「これが？」

「弾と火薬が入りますから今は使えませんが」

いずれ、弓に代わり主力となると思います。」

俺はそろそろ八手を止めるために場を離れる。

結果から言えば

結果も経過も俺の隊に死人は無かった。

閲覧注意、厨二病が発症しました。本編とはまったく関係がありません。内容

でも勿体無いから投票

閲覧注意、厨二病が発症しました。本編とはまったく関係がありません。内容

ソコは部屋だった。

真ん中には円型のテーブルが置いてあり

それに付属される椅子が十二個置いてある。

その席は一席を除いて埋まり、一人を除き全員女性で軍服を着ている。

一人の女性は首から下げた懐中時計を見て立ち上がり

唯一の空席の前まで歩いていくと腰を屈めて

どこで取り出したのか自立式の写真立を設置する。

女性は、満足そうに頷き元の席に戻

「なに不吉な事してんだ、ロンメルごらあ！！」

真つ赤な髪をした女性が写真を立てたロンメルに飛び回し蹴りを繰り返す。

椅子に腰掛けてた状態からは疑問な機動である。

「
？ルーデル」

避けることは叶わず直撃したロンメルが心底、疑問なように聞く。

この時、ロンメルは完全な善意からこの行為を行ったのだ。

少し前からこの隊の中核の一人が行方不明になったのだ。

所属はドイツ軍となっているが表向きは

自由に動けるように傭兵団という扱いとなっていて

一般的なこの隊の呼び名は“円卓”

隊の呼び名となっているが円卓と言えば人間離れた功績を持つ十二人の人物を指す。

ハンス・ウルリッヒ・ルーデル

エーリッヒ・アルフレート・ハルトマン

ゲルハルト・バルクホルン

マンフレート・フォン・リヒトホーフェン

ハインリヒ・エーラー

ハンス・ヨアヒム・マルセイユ

ハインツ・ヴォルフガング・シュナウファー

エルヴィン・ロンメル

そしてフィンランドから移軍してきた

エイノ・イルマリ・ユートイライネン

シモ・ヘイヘ

最後に円卓の肩身が狭い男

ヴォルフガング・リュート（年寄り）

北辰一文字（最年少）

ほぼ、空での空からの戦闘の専門家ばかりではあるが
ロンメル、ヘイヘ、リュート、北辰だけは空の専門家ではなく
若干の偏りがある部隊なわけだが決して
空のみではなく

ヘイヘ、ロンメルが陸での戦いを支配し

リュートは歳ながら海での戦いにおいて最強を誇る。

ただ単に空の戦いが得意なものが多くだけであり

制空権が非常に重要なのである。

中には爆撃機でありながら戦闘機を撃墜するチートもいたりする
しかし、今回は円卓が集まった会議室はピリピリしている。

「さて、そろそろ。」

この場の唯一の男であり

一番外見が老けてしまっている男でもあるリュートが言う。

少しだけ緊張が高まる中、リュートは落ち着いたら口調で言う。

「冷蔵庫の醤油が切れておりましたな。」

そな言葉を皮切りに全員（リュートを除いて）が立ち上がる。

「老人からかうとは良い度胸だ。」

自分で老人と言うには若すぎる女性が

ポキポキと骨を鳴らして歩き出す。

この円卓全員に言えることだが

円卓のメンバーは老いて死ぬことはない。

何の因果かはわからないが何故か細胞に変異が起きているらしい。
細胞は老いる事がなく

細胞が成長し続ける

細胞の限界がなくなってしまうている。

故に円卓は円卓（化け物）として機能する。

「じよ、冗談です。バルクホルンさん。

だから皆さん座って、すみません！場を和ませようかと思ひまして

アアーーーーー！！！」

会議室の中に中年のオッサンの叫びが木霊した。

「で？？アイツが来ないって事は何だ？

ついに、死んじまったか？ん？？」

「フエン。」

「んだよロンメル。

遺影なんて飾ったのはてめえだろうがよ。」

「つ。」

「座れ。話はそれからだ。」

エールラーが声を低める。

ソコで言い合いをしていたロンメルとリヒトホーフェンは周りを見る、他の者は席についた所だった。

「チツ!!」

「。」

二人も席につく。

そしてリュートが紙を配る。

現在は殆どがデータでのやり取りだが

円卓の間では紙を使うのが好まれている。

その紙に書かれているのは一人のデータ。

本来なら空白の席を埋めているはずの者の一人。

「北辰一文字。行方不明　ね。」

最後にアイツを見たのは誰だっけ？」

ユーティライネンが紙をパラパラみて言う。

「それは私ですな、ユツティ殿。」

リュートが答える。

リュートは紙を卓上に置き報告する。

「最後に見たのは食堂でしたな。」

確か、消費期限が切れた卵を食べてました。」

「もしかして、トイレに隠ってんじゃねえのか？」

「。。もしもし。」

「ハルトマン？冗談だからよ　ハルトマン！？」

マジで探すために軍を動かすな！！」

「あの　一応、衛星から見て貰ったんですけど

あの、見つかりませんでした。」

衛星とはドイツ軍が打ち上げている軍事衛星の事だ。

「シュナウファー、軍規違

いや、そうか。見付からなかったか。」

「マルセイユさん、ごめんな　」

「たまたま衛星の情報が入ってきたのに何を謝る？

ただ　アイツが本気で隠れたならば衛星からは見つからないだろう。」

比較的、円卓に加入したのが遅いマルセイユが話す。

「裏切りの可能性は皆無と見て良い、いや無い。

逃げたとしても何故逃げたが理解できない。」

「もしや、戸籍を勝手にハンス・ウルリッヒ・北辰に変えようとしたからか？」

「ルーデル。休戦の誓いはどうした？」

「ふっ、甘いエールラー。」

お前も隠れて夜這いを駆けようとしていただろう。」

「何の事だか。マルセイユ続きを。」

何故か会議室が別の意味でもピリピリしはじめた。

「死亡の可能性は無いと考えていいだろう。」

しかし、消えるタイミングが悪かった。

一文字があこの事件を起こしてから丁度一年後の日だったからだ。

そして元老共が北辰一文字を捕獲、抹消を提案した。」

北辰一文字の捕獲、抹消と言われているが実際のところ始末する気だろう。

それはこの円卓全員が理解していた。

だからこそ、この徴集に集まったのだ。

「ヒトラーは黙認したの？」

今までうたた寝をしていたヘイヘが目細めて聞く。
ただ、話に通っていると言うことは黙認した
と言うことでありヘイヘは否定の言葉を待っていたが
誰も望んだ答えは帰ってこなかった。

「。私は降りる。」

「その前に乗っていた者が居たのですかな？」

リユートが席を立とうとするへいへを遮る。

「まずどうやって始末するんだよ。」

アイツは爆撃の中を平然と歩く奴だぞ？」

リヒトホーフエンが気だるそうに言う。

リヒトホーフエンは爆撃機乗りではなく

戦闘機乗りであり赤い悪魔と恐れられている。

もちろん爆撃機もこなせるのだが

爆撃に関しては悪魔すら越える奴が一人存在する。

先程から唸っている軽くウェーブ掛かった真つ赤な髪を女性。

この女性こそ魔王と詠われる軍人ルーデルであり

行方不明になった北辰一文字を円卓に拉致してきたのもルーデルだ。

そして北辰と共に暮らしているのもルーデルである。

そしてそのルーデルは腕を組みなにやらうんうんと唸り

長いウェーブ掛かった髪をさらに乱している。

「
実はな。」

そしてルーデルは苦々しい口調で口を開く、

顔は苦虫を噛み潰したかのような顔だ。

「アイツのデザートをアタシが横取りしちまったんだ」

全員（数名を除き）が息を呑む。

理由は簡単

“なにいつてんだ？こいつ”

しかし、ルーデルは本気の本気で話している。

事実、これ以上の理由は無いとさえ思っていた。

戸籍を勝手に変えようとするのは何度もやったことであり他に理由といたら消えた日の一緒に食べた最後の食事のデザートを北辰から奪ったくらいである。

「ただ仲が良かったよ。逆に気味悪いぜ。」

リヒトホーフエンの呟きにほぼ全員が頷く。

ソコで会議室の扉が開いた。

開けたのはメイド二名、そして中央を歩く真っ直ぐなピンク色の髪をした小柄な少女小さな軍服に身を包み帽子を被る。

威風堂々と扉を抜けた所で。

「あう！！」

普段ならソコで支える役目をする人物は今亡く顔面から少女は床に落下した。

「うう　　すみません。遅れました。」

少女は立ち上がって会議室のホワイトボードの前に立つ。
全員が立ち上がって敬礼をして座った。

「すみません　すみません皆さん

私の　私のせいなんです。」

今にも泣きそうな口調で少女は言葉を漏らす。

「ヒトラー　　どういう事だ。」

ルーデルが冷静に聞く。

此处で怒ってしまえば目の前の上司は泣き崩れてしまうだろう。しかし、追求せずにはいられなかった。

ヒトラーに関しては怒鳴ってくれた方が嬉しかっただろう。しかし、ヒトラーは上司として言わなければならない。たとえ、幾度も命を預けた仲間に嫌われるとしても。

「私があの日　腐っているとは知らずに

北辰に　　一文字にあげてしまったから　　彼は　　彼は。」

一度の静寂。

ソコで落ち着いたリユートの声が響く。

「ああ、だから一文字殿は卵を。」

暫く、ドイツ屈指の指導者でもあるヒトラーの
嗚咽が会議室に流れ続けていた。
実は円卓の中で一番まともなりヒトホーフェン
は頭を抱えて卓上に伏していた。

「だめだ、こいつら馬鹿ばっかだ。」

休日〜後にもがみん〜（前書き）

もしもシリーズ

【魔法少女もがみん〜ぴーあーる〜】

北辰：「いけ！もがみん！！マジカルステッキで変身だ！」

もがみん：「もおおお！もがみんじゃありません！！」

キクゴロー：「もがみん！このステッキを使って！」

キクゴローが口に加えているステッキを投げ飛ばす

もがみん：「恥ずかしいけど　がんばります！！」

最上家再興までまだまだ遠い

終

つかれてるのかな？

感想、ご要望待ってます。

最近戦極姫2ができない

休日〴〵後にもがみん〴〵

あの後、坂戸、新発田、鳥坂を落とし今は、束の間の休息をしていた時である。

俺は持参したお菓子を食べて日向ぼっこをしていた。場所は城の縁側で丁度良い位の日が射してある。キクゴローも隣でうたた寝している。

「北辰。珍しい家に帰ったのではなかったのか？」

すると景虎様を通り掛かって話しかけてきた。
あれ？なんで景虎様がここに？

「妹に怒られてましてね、居づらくて逃げてきました。」

「ほう、妹が居たのか？」

「ええ。小雪ちゃんの事です。
所でお仕事はよろしいので？」

すると景虎様はくすりと笑った

「私も今日は休みなのだ。」

兼続に無理矢理休みをとらされた」

そりゃあ働きすぎだからだろうね。

あれ？俺は景虎様から休み貰ったんだけど？

兼続殿は、私達のために休んでくださいとか説得したんだろう。
景虎様はどうも無理が過ぎる節があるから

根を詰めないように無理にでも休ませた方が良い。

「と、言うわけだコレも臣下の事を知る機会だ

小雪殿はどのような者なのだ？話してくれ。」

あれ？と、言うわけ？

やっぱい、何にも聞いてなかった。

「そうですか。小雪ちゃんは

昔は可愛げがあっただけですけどね

いや、今も可愛げは在るんですけど頭が上がりません。」

「ふふ、仲が良いのだな」

「そうですね。優しい娘ですよ。」

ただ、一番甘えたい時期に居てやれませんでした。」

だから、大人びてしまったんだと思う。

甘やかしてやりたいけど

拒絶されたらと思うとどうにも手が出ない。

「ふふ、北辰は妹が大切なのだな。」

「そうかもしれません。」

お茶飲みますか？」

俺は荷袋から茶碗を出して温かいお茶を注ぐ

「うむ、戴こう。」

所でその荷袋

「あ、お茶菓子もどうぞ。」

俺は荷袋から和紙に包まれた茶菓子を渡す

景虎様が呆れたように荷袋を見て何でも出てくるのだなとか呟いていたような気がする。

景虎様は和紙の中身を暫し見つめると一口食べた。

あれ？毒を盛られるとか考えてないのかな。

「美味しい　！これは、なんという菓子なのだ？」

「手作りなんで考えてません。」

「て、手作り！？北辰がか！？」

「ええ。」

家の馬鹿の馬鹿な願いを叶えてたら得意になりました。」

なにが、甘いものが食べたいだ

小雪ちゃんも甘えてこないのに櫻ちゃんは甘えて来やがって。思い出しただけでも苛々する。

「そうか、ん？」

北辰、鉄扇を持っていたのか？」

横から見て見えたのだろう景虎様が聞いてくる
俺は懷から鉄扇を取り出した。

「昔に女の子から貰いました。」

景虎様は鉄扇を見て眉を潜める

「その紋は いや。そうか、見事な鉄扇だな。」

「はい？ありがとうございます。」

景虎様には珍しく言葉を切っていた。

俺はとりあえず礼を言った。

「北辰！景虎様はお休みの日なのだぞ！何をしているか！！！」

兼続殿登場！

相変わらず貧乳だなあ。

俺は頷いて立ち上がった。

「ではこの辺で失礼いたします。」

そう言つて俺は家に帰った。

ハチは飛脚をしていて今は西の方に行っている。
俺が家に帰ると千百合ことちーたんに出会った。

「北辰！何処に行っていたんだ？」

「やつほー、ちーたん。
ちよつと現実逃避をしにね。」

こんにちはお胸様。

宇佐美さんはでかで責めてくるなら

ちーたんはその重力を無視するハリで責めてくる。

艶やかな黒髪と合わさって手がつけられない。

あれ？

兼続殿が薄蒼で宇佐美さんが薄紅で桜が薄緑

惜しいな、黄色が足りないか。

「なぜ、胸元を見る？

それよりもだ！小雪が怒っている なんとかしてくれ！」

「じゃあ逃げるしか無いな。」

「まて」

ガシィィ！つと捕まれた。

肩が痛い！凄い痛い！！

「とりあえず、何故小雪が怒っているか話せ。」

「アレは今日の朝の事だった」

「簡潔に」

「洗濯物したら物凄く怒られた。」

「それだけか？」

「ああ。恐らく下着も纏めて洗って干したからだろう
肺まで凍ったと思うぐらい怒られた。」

「つか、凍り付けにされた。
だから今日は少し鬱になった。」

「それだけじゃないだろ？」

「本当にそれだけだ。」

「急に後ろから攻撃されてな命からがら逃げていた所だよ。」

「てつきり、また子供達を甘やかしたのかと。」

「櫻も怯えている、さあ生け贄になってくれ。」

「何故に！？」

「小雪ちゃん妖怪だろ？」

「櫻ちゃん神様じゃん！なんで妖怪に怯えるわけ？」

「俺は引き摺られながら死地へ向かい」

「その晩」

「中庭で倒れている所を発見された。」

「曇天か。今日はもがみんなに会いに行つて癒されてくるかなあ。」

俺は空を見て呟く。

気味が悪い。

今にも何かが崩れる感覚がする。

でも青空も嫌いなんだけど。

特に澄み渡る蒼い空は特に嫌いだ。

蒼い空を見て気味悪がる俺は少し変なのだろうか。

だからと言って曇天もいやなんだけど

あらアレか、雷の日なら

「
やっぱ、普通の晴れでいいや。」

「
なんの事だ？」

「
あらら、ちーたんおはよう。」

「
ああ、小雪が心配していたぞ。」

昨日からその体勢のまま動かないって。」

「
マジでか。」

よし起きる、すぐ起きる。」

俺は身体をコロコロと回転させて起きる。

お前まで俺を醜うか

「
およ？ちーたん何か言った？」

「ん??なんの事だ?」

ちーたんは鍛錬をするつもりだったのか
片手に木刀を持って振り返って。

「いや、鍛錬頑張った。」

俺は手をヒラヒラさせて最も残酷で無責任な言葉をかける。

「兄様!」

「どうした小雪ちゃん!？」

「あ、起きてましたか。」

小雪ちゃんが安堵したように言ってきた。
俺は苦笑して小雪ちゃんの頭に手を乗せる。

「お越しに来てくれたのか、ありがとう。」

「は、はい!」

小雪ちゃんの花が咲くような笑顔に俺も笑う。

「あ、兄様は今日はもがみんさんの所に行くんですよね?」

「ああ、その予定だ。」

「なら、コレを渡してください。」

「ん??ああ、渡しておく。」

俺は小雪ちゃんから包みを受け取る。

多分、小雪ちゃん手作りのお茶菓子が入っているんだろう。
そして今、俺に渡されると言うことは

今すぐ行けってことか

俺 嫌われてるな。

「行ってきます。」

俺は（結構マジで）泣きながら家に出た。

「もがみいいいん！！！」

場所は南出羽国の山形城の城門。

そこに俺が会いに来た女の子がいた。

名前は もがみん。

「もおお！もがみんじゃありませんっ！

私の名前は義守です！

何でしっかり呼んでくれないんですか！？」

ぐふっ！

北辰に痛恨の一撃。

俺は高い高いの状態を維持しながら意識が軋んだ。

強い　強すぎる！！！！

もがみんは二重三重の単衣に身を包まれた　　小さな女の子だ。

小さな女の子だ

小さな女の子

小さな女の子　これ重要

その小さな体には衣がたつぷりとしてとても歩きにくそうだと、言いますか。

完璧に着物が着こなせていない。

そんな幼さが残る顔立ちでそんな着物をきても　　微笑ましいじゃないか！

いいや、この大人になろうという背伸び感

素晴らしすぎる！！

因みにもがみんは最上家当主なのだ。

普通の当主にこんな高い高いすれば切腹ものだがこの光景をみた家臣団や門番は俺と目が合うや互いに頷き、もがみんの素晴らしさを共有した。それほどまでにもがみんは　素晴らしいのだ。この戦国の世にあるまじき和み、あるまじき癒し

「なるほど。もがみんの姿が見当たらないと思ったら。」

今日は来る日だったのね、北辰。」

一人の妙齡の女性が現れ聞いてくる。

「おう。清水義氏。

氏家定直殿も相変わらず父性溢れてるな」

俺は、清水義氏の隣で笑う老人に話し掛ける。

「当然じゃな、又シもなかなかの者じゃがな。」

「はっはっはっ。」

すると俺の手に持ち上げられているもがみんは頬をプクーツと膨らませて怒る。

しかし本人は怒っていても俺達からすれば。

「もおおお！！またもがみんって！

皆さん！私の事また子供扱いしてますね！？」

そう、俺達からすれば可愛い以外の

なにものでもない

まったく、この娘は　もがみんの行為は俺達を喜ばせるだけだと何故、気付かないのか！！いや、気付かないのだ！

本人は至って本気なのだから！

「小雪から預かってるんじゃないの？」

キクゴローが懷から声を出している。

俺はソコで思い出してもがみに荷物を渡した。
当然、地面に降ろした上で　だ。

「わあああ！ありがとうございます！」

「冷暗所に置いておくといいよ。」

「はい！」

もがみんは包みを胸に抱えてトタトタと走り？だした。
俺はソレを見ながらいつの間にか集まっていた
城の常備兵達に対して腕を振り上げる。

「全てはもがみの為に！！！」

「「「もがみ様の為に！！！」」」

全員が腕を振り上げて言った。

「長尾の家でもその調子でやればいいのに」

キクゴローが呟き俺が返す

“ 兼続殿に殺されるがな ”

おまえ、アレだぞ？

全ては虎ちゃん（景虎）の為に！！
なんて言ってみろ？

予想です

『キサマアアア！！！！』

兼続殿は様々な事を言いたそうではあったが
余りの怒りに言葉ではなく身体が動いた。
一線、兼続殿の太刀は俺の身体を切り裂いた。

『なん　　で。』

北辰の行方を知るものは誰もいなかった。

みたいな事になりかねん、いや、なる。

「じゃ、仕事は溜まっているんだからはやくやりな。」

清水義氏、いや、この痴女に俺は引き摺られる。

目的は言葉の通り最上家の内政仕事だ。

実はこの清水義氏　政が全く出来ない。

昔はもがみがまだまだ若く

そう、俺が吐血してしまうほど可愛い

今も可愛く小さいがさらに小さかった時の事。

「定直殿。やつれているな。」

氏家定直、最上家に昔から仕える重鎮。

そして幼き、もがみが最上家当主になったときから支える功労者。俺はその定直殿にたまにはお茶を飲まんか？と誘われた。

そして会った定直殿はやつれていた

外見は然程やつれていないが 雰囲気が。

「 ケツを撫でるな痴女め。

服の中に手を入れてまさぐるな。」

俺は先程から身体に触ってくる痴女に言う。

名前は清水義氏。

妙齡の美女だ、そしていつフラグを立てたのか知らんが俺に執拗にセクハラを働いてくるド変態だ。

故に俺はちゃん付けしない。

ソレにこの手の変態はこの世界に来る前に耐性が出来ている。

「ソレで、今日はどうしたんで？」

「北辰殿。最上家に働きに来ぬか？」

「嫌だよ。」

「頼む。」

「俺は薄情なんです。遠いし寒いし。却下。」

「ふむ。仕方無いか」

定直は案外すんなりと引き下がった。

俺は何故か延々と義氏から注がれる酒を呑んでいた。
何かあるな

俺はそう思い厠に行く。

そこで事件が起きた。

何故か用を出している時に扉が開かれた。

「義氏？」

と、こんなことが起きたのだ。

まあ、まあ、そんなこんなで働きに来ることになった。

最も、後に引き合わされた　もがみん　に俺は惨敗したのだが

「義氏も仕事が少しは出来るようになれよ。」

定直殿の心労は義氏も関係していると思う。

「うん？」

北辰女装してくれる？」

「嫌だ。」

「なら、私も嫌。」

「　　　そーかい。」

「でも、北辰いれば一瞬で終わるしい？」

別に私がやらなくても　　

「　　あの、お兄さん。

私もお手伝いを　　」

控え目な（もがみんの）声がして襖が開いた。

さて、今の状況を整理しようか。

俺は机に向かい宿題中。

そんな俺にしなだれで指を（俺の体に）這わせる痴女（清水義氏）。

まあ、何故か俺も一緒に説教されたのだが疑問でたまらない。

何故に俺が怒られるのだろうか。

空は曇っている。

晴れの日の思い出は少ないが
曇りの日の思い出は多い。

それだけ　曇りは憂鬱になる。

「もがみんは習い事だし、つゝまゝにな〜い〜。」

俺は中庭でゴロゴロ転がっている義氏を横目で見る
横目で見ると言うことは俺も仰向けに寝そべっている。

「はいはい、でも、だんだん　もがみんも仕事出来るようになって
きて

俺もやる仕事少ないし　もしかして来る意味無い？」

その時だ、バサバサと何かが落ちる音がした。
俺と義氏は身体を起こして音の方を見る。

「お兄　さん。」

何故だかもがみんが　もがみんが

泣いていた。

「あ、あわわわ　ど、ど、どっしょ!？」

や、によ、あわわわ!!もがみん!

どうしたもがみん！

もがみん！もがみいいいん！！！！」

「北辰！？落ち着くのよ！！今すぐ私と婚姻を」

「せいっ！！」

落ち着け 落ち着け俺。

もがみん。な、何故に泣いているのかな？」

俺は義氏の投げ飛ばした後もがみんを必死であやした。
何故、泣いたかは俺が来なくなると思ったかららしい。
因みに俺はこれ以上かと言うくらい頭を下げて弁解した。

「やばい 泣いたもがみんも可愛かった。」

俺は変態になってしまったのだろうか。
少し頭を冷やすために散歩に出ることにした。
また泣かれたら（俺が）死んでしまうので。

「やっぱ、何か聞こえる。」

「なにが？」

キクゴローが懐から顔だけ出して聞いてくる。

キクゴローの顔からして俺は判断する。
やっぱり俺だけの幻聴なんだと。

「空が曇りだからな、耳鳴りがしたんだよ。」

耳鳴りではなく幻聴。

曇りの日はやっぱり嫌な事が起きる。

ジンクスって奴かな。

思い込みって凄いやからなあ。

売ったのはお前等だろう

「なあキクゴロー。」

「なに？」

「俺はちゃんと親としてやってるかな。」

「親はやるものじゃなくなってるものだって前に言っただけだ？」

俺は空を仰ぎ見て頷く。

「だな。」

「お、よろず屋じゃないか。」

「ん?? おおう。」

俺は声をかけた人物を見る。

寝癖かどうやって整えたかわからんがボサボサ？な紅い髪に

何故か上（服）を肩にかけている。

肩にかけていることは裸　に近く

胸にサラシを巻いている。

わかるか？溢れんばかりの果実を押さえるその姿が。

「いやはや眼福でござった。」

俺はお礼を言う。

目の前の女性は鬼庭良直。

伊達家に昔から仕える武将だ。

伊達家　　うん。

癖のお強い人達ばかりです。

あれ？武将は殆ど一癖二癖あるような

ま、とりあえず伊達家はアレだ

当主（とその姉）に俺は命を狙われている。

今は省くけどなんか事件があって

現当主の記憶があやふやになって気性も荒くなった

と噂を聞いて俺は見に行ったら

『よろず屋？　問者ではないのか？』

とか言ってきて挙げ句の果てに北辰まで馬鹿にしたから

怒り狂った俺がケツを撫でた（下から上に）ら

伊達家当主とその姉（巫女属性保持）が怒り狂い

俺は命辛々（ケツは二、三回撫でた）逃げ出したと言っわけだ。

伊達家当主の説明は後（出会った時）にしようと思う。

「出会った時の楽しみと言うことだよキクゴロー君。」

「北辰って本当にスケベだよね？」

「別に良いじゃないか減るもんじゃないし。」

年取るとな 尻がな。」

「ソレを私の前で言うかね？」

「違うんだ 違うんだよ。」

鬼庭さん いや、違わないか。」

「変態じゃあないか。」

「 おおう。」

「お、あれは梵天丸（伊達家当主）じゃないか。」

「よし、帰ろうかキクゴロー！！」

今日は用事があつたんだ！」

俺は急いで最上家領地に帰った。

その後、我が家にてキクゴローに色々と密告されて中庭にて朽ち果てたのは言うまでもない。

北辰フェイズ2（前書き）

駄文でごめんなさい

北辰フェイズ2

「お久しぶり真っ赤な世界。」

なんか再び説明するのも面倒だから前の悪夢と同じだと言っておく。

忘れてる奴が大半だと思うけどな！

しかし、相変わらずの鬱になる空間だ。

「やあ、久しぶり。」

そこでご先祖（笑）が現れた。

外見が俺と似ているが筋肉の付き方と髪の色が違う。

「お前 居たんだ。」

「一応言っておくけど夢じゃないからね？」

「よく住めるな。いや、マジで。」

こんなとこ住みたくないなあ。

地面は血の池地獄みたいになってるし
適度に明るいけど真っ赤だし。

こんな物件？俺なら一瞬で売却する。

そもそも買い取り手が無いと思うけど。

「金が無いなら貸すぞ？」

「いや、僕もう死んでるし。」

そんな哀れんだ目で見ないでくれるかな？」

「死人は喋らんよ。」キリッ

「とりあえず、性格が前と変わってない？」

「地だ。」

なんだその目は？」

何か哀れんだ目で見られたからム力ついて俺は歩き出す。

「思い出せないんだ。」

ポツリと俺が歩きながら呟く。

地面に溜まる液体を掻き分ける音だけが返ってくる。

少しだけ重く感じる液体を掻き分けながら続ける。

「昔は 此処に來た頃は思い出せた。」

今まで殺した者の顔を名を声を場所を。

例えば名は知らなくても何処で何人どのような者を殺したくらいは覚えていたんだ。

それが 思い出せないんだ。

ほんの少しずつ 思い出せない。

わかるのはただ漠然とした殺した事実。

わからないんだ　俺が何を思い　どうして殺したかが。」

わからない。

覚えていないんじゃない、記憶なら漠然と残っている。

寧ろ記憶よりも記録と言った方が良くらいなのだが

それよりも、思い出せない

わからない

自分の心が行動が思いが

「失われていく。喪われていく　何もかも。」

「何か　出来ることはあるか？」

後ろから聞こえるご先祖（笑）神武の声。

俺は少しだけ気に触れたみたいだ。

まだまだ修行が足りないって事だな。

「何を白々しい、やってももらわないと困る　だろ？」

北辰も神武も目的は同じだ。

「だからこそ、俺が北辰で無くなったとき　思い出させてくれ。

俺が俺で在ると　日本が憎くて仕方がない。」

「心得たよ。」

此処だけの話、俺は元々、北辰という名前じゃない。

トクン

俺は足を止めて上を見る。

なんだか、心安らぐ音が聞こえた。

「前は此处で起きたのになあ。」

夢から覚めないや。

とりあえず、また歩き出す。

「どうする？話題が無いんだけど。」

話したいこと話したから話題が無くなってしまった。

「風呂は人類が産み出した最高の文化だと」

「お前の時代無かっただろ？」

「温泉なら」

「さて、小汚ないご先祖（汚）略して汚物よ。」

「略してない!？」

「時々聞こえるこの心臓の鼓動はなんだ？」

「さあ？腹の中なんじゃないの？」

「まあ 良いけど。」

汚物は嘘が下手だな。」

「さらつと酷いよね北辰つて。」

本当に僕の子孫なのかな？と首を傾げる神武、いや汚物を他所に謎のトクンという鼓動と共に俺の意識が切り替わった。

場所は春日山城。

「ふむ。」

俺は腕を組んで考える。

考える程でもないが戦についてだ。

もうほとんど制圧出来たとはいえ越後はまだ内乱中だ。

でも景虎様が強すぎる。

いや、もう、軍師必要か？と思うくらいだ。

ソレに俺がいなくても切羽詰まらない限りキクゴローに俺は知識を託してるから猫の話聞いてくれる限り乗り切れる。

力の方もハチがいるからなんとかなるだろう。

キクゴローは最近俺の真意に気付いたのか知らないが遺言みたいだからやめてよ。

と言ってくるが、知識の継承は着々と進んでいる。

まず目下の問題を処理するべきだな。

「白スク（白いスクール水着）」

「だど？」

とりあえず言っておく。

ここは春日山城の城内にある中庭。

武家にあるまじき素晴らしい庭があつたから眺めていたらウサ耳を発見した。

キクゴローに聞いてもウサ耳だと答えたため

俺はキクゴローに鼻で笑い“アレは宇佐美さんだ！”

と、

答えたらキクゴローが“倒れてるよ？”

と言ったから俺は慌てて助けに行った。

すると

なんだ、また天国に来てしまったのか。

と、思えばかりに素晴らしい光景だった。

なんと其所に居た宇佐美さんは

大きな胸をたゆんと揺らして上下させながら寝息を立てていた。

もちろん 傍らには刀も槍も甲冑も

そして羽織すら丁寧に畳まれて置いてある。

そう、昼寝である。

息を吸ったり吐いたりすることに（革命的な）胸が揺れ
しかも、かなりの美人いや、美女であり。
いつも、ゆったりした口調で耳にすっと入ってくる
柔らかな声色の方であり、今の説明は関係無いけど
もう

もう

「ごちそうさまでございました。」

俺は深々と頭を下げた。

朝から嫌な夢見て気が滅入ってたんだよ。

「北辰？」

「ふつ、本来なら此处で“おっぱい！おっぱい！！”と叫ぶ所だぜ。」

「最低だね。」

キクゴローが物凄く冷たい目をしていた。

しかし俺はしっかりと眼に焼き付けるためそんなもの気にならない。
気にならない気にしない

「ソレが男と言うことよ。」

「小雪に報告するからね。」

「ちよっ！ソレは反則だろ！！！！」

「僕知らないもんね。」

少しは自分の行動をかえりみたら？」

「みたみた！反省はしてる！！」

「後悔は？」

「するわけがない！！」

「」

「あれ？キクゴローさん！？」

キクゴローがスタスタと去っていった。

しまったな 止めるべきだったか

いや、しかし、このお胸様から目を離すわけには。

だが小雪ちゃんに怒られるのは嫌だ

でもお胸様から目を離す事は

よし、あと五分したら仕事しよう。

「 自殺するなら勝手に死ねば良いのにな。」

俺は目の前の倒れている男をみる。

「北辰。それはあんまりだよ。」

キクゴローが俺を諫めるように肩の上から言う

「かもしれん。」

目の前に伏して死んでいる男をみる。

越後で景虎様から敵対した最後の敵将。

何て事はない。

勝手に襲い掛かり勝手に失敗して

勝手に罵り勝手に死んだ

「景虎様に報告しなきゃな。」

八千。

俺が八ちを呼ぶと八ちはやりきれない顔をして頷いた。

俺は八ちの頭を乱暴に撫でた。

「忘れてやるな。」

「アニキ？」

「忘れてやらないでくれ。」

敵でも最期くらい 誰かが覚えててやっても良いだろ？」

「はい！」

「けど、背負い込むなよ。」

じゃ、帰ろう。

そう言つて帰路についた。

けど景虎様に報告しようとしたけどやりきれないから兼続殿にどうしたら良いか聞いてみたら景虎様に代弁してくれた。何でも、無闇に士気を下げる必要はない！らしい。

「ハチ。これで団子を食べてこい。

土産はなんか旨いもん頼む。」

俺が金を渡すとハチは「パアアア！」と輝いて直ぐに飛び立った。

俺は腕を組んで真面目に考える。

戦力が足りない。

普通に考えれば足りるが指揮官が足りない。

アレだ 景虎様が強すぎる。

故に越後の民は依存しすぎてしまっている。危険だ。

もし景虎様が揺らいだら国すらも傾く。

傾いた国を治すのは非常に難しい。

いくら神と唄われようが所詮は人。

ソレにまだまだ心が柔い。

しかし、俺のように壊れるのを見るのも忍びない。だが、裏で動いても景虎様から嫌われるし。

「昔なら迷わず動いたんだが 変わったな。」

俺は溜め息をつく。

駒がいる。

どうせ、俺の命も長くない　せめて目的を果たせるだけの駒が。幸い　この世界にはまだ神秘が残っている。

俺が居た時代　怪異は少なかった。

つーか、一人を除いて死んでいた。

その一人は“最古の亡霊”と言われていて力は圧倒的だった。

なら、この時代なら殺されていない仲間（化け物）も生きているんじゃないか？

歴史が変わってしまうだろうが元々変える予定だ。

それに　少しは寂しく無くなると思う。

日本は神秘が多いから共存もしやすいだろうしな。

「ただ、唯一変なのは人間の寿命。」

俺のいた世界は極まれに突然変異か知らないけど不老になり細胞の限界を無くす（永遠に成長する）

呪いみたいのがあってその呪い？の始祖と言われたのが“最古の亡霊”だ、本人も言っていたし事実だと思う。でも、この世界は不老が通例になっている。

「何かがあったとしか思えないな。」

不老だけど細胞の制限はあるみたいだし。

けどその分、俺達のような化け物が隠れやすいのも事実。

「アニキイー！！」

ハチが帰ってきた。

「あれ？食べて来れば良かったのに。」

「アニキ！！一緒に食べませんか！！？」

「ああ、良いよ。食べようか。」

丁度、小腹が空いてたんだ。」

まあ、急ぐのは良くないから後から考えよう。

「貴様あ！私が後処理をしている間に何を優雅に団子なんぞ食っているか！！」

「違っんです、違っんですよ。」

これはハチが」

「えっ！？アニキが買ってこいて」

「ほう。少し、そう、少しだけ話し合う必要がありそうだな。」

「」

ああ、説教がなくなりそうだ。

俺は服を掴まれて引き摺られて行った。

「ほ、北辰？ 何故、部屋の隅で固まっておるのだ？」

「あ、あ、景虎様。無くした物を捜しておりました。お氣遣い無く。」

「そ、そうか。兼続は」

「ビクウ ……！！！！！！」

「ど、どうした！？」

「働いてます、ええ、頑張っていますとも！！」

「そ、そうか。引き続き頑張ってくれ。」

景虎様は何故か直ぐに去っていった。
俺はソコでハッと我にかえる。

「書簡が書き上がっている 何があった。」

何故か書簡が完成していた。
いったい、俺に何が、そういうえば先程 景虎様が居たような。

「当然の報いだよ。」

「あれ？ キクゴローじゃないか。」

家に帰ったんじゃないのか？」

「遠いから戻ってきたんだよ。」

「そつか。俺はなんか白昼夢をみた気分だよ。」

「そ、そうなの？」

あ、ハチは先に帰ってるって。」

「うん？今日はなんか宴があるから帰るなって

兼続さん 兼続殿に言われてるんだよ。」

「うん。ハチはソレを伝えに帰ったよ。」

キクゴローの返答に俺はそつかと返した。
うん？

凄いだろ？身体が勝手に書簡を完成させていく。
やばい、とうとう政を極めたか。
俺も神懸かって来たな。

「否。私は神を超えた。」

「大丈夫？」 シラー

「うめん、冗談だから。」

俺はそう言って越後統一の宴に出向いて行った。

越後統一、そしてスク水、最後に武田信玄（前書き）

感想とかありましたらよろしくお願い致しますm（
—
—
）m

越後統一、そしてスク水、最後に武田信玄

越後を統一して最初の軍義を終え

統一の宴が始まった時、俺はいち早く抜け出して外に居た。

しかし、景虎様は強いなあ。

戦の最大の功労者も兼ねるほどに。

「つと、名前を変えたんだっとな」

景虎様は名前を変えた、上杉謙信と。

なんか、権力上のアレコレらしい。

「こんなところにいたのか。」

「これは兼続殿、どうなさいましたか？」

「お前を探していたのだ」

あれ？意外だ。

兼続殿は謙信様と呑んでると思っていたけど。

「俺を？」

「ああ、過日の非礼を詫びようと思っていた。」

そう言うのと、兼続は俺が腰かけていた平石の隣に腰を下ろす。

え？油断させてザパア！みたいな？

よくも先程の軍義、舐めた真似をしてくれたものだな！
とかいつて殺されちゃうんじゃないか？

「今回の宴、お前も主役のひとりなんだぞ。

それを抜け出すのは、礼節に欠けると思うがな？」

「それを言うならば兼続殿こそ。

それに宴はあまり得意では無いんですよ。

俺は特にこれといった功も立てていませんしね。」

おまけに軍義で口出しちゃったし。

功なんてちらほら妨害を妨害したくらいだ。

「お前が意図して後方に徹していたことくらい、兵の動きを見ればわかる。

春日山軍の神速の用兵は、新参者が

普通の新参者は合わせられるものではない。

しかし、お前の後方での指揮は此方の動きに呼応し

陣形が崩れぬばかりか妨害の払いすらしていた。

そして背中を守り被害を減らしてくれた。

景虎様の活躍を間近で見せつけられれば、皆

どうしても熱くなってしまうからな。

だから、我が軍の布陣は竜頭蛇尾になりがちだったのだ。」

いや、なつてましたよ、兼続殿。

ただ、景虎様が強すぎて孤立しなかつただけです。

まあ全員が一丸となつてたから尻尾なんてなかつたけど。

「まあ、この城に身を置くくらいは許してやつてもいい働きだつたな」

「それはどうも」

なんだ？とうとう兼続殿もデレ期突入か？

「お前が嫌いだと言つた、あの言葉の何割かは撤回しよう。」

告白すれば、お前の実力など全く信用していなかつた。

が、実力を示されれば、自然と改めようという気になる。

気を悪くさせてすまなかつた、北辰。」

そつといえば最初の頃、面と向かつて

お前が嫌いだ！とか言われてたな。

夜な夜な（俺が）泣いた思い出がある。

風邪か？

あの兼続殿がこんなことを

いや

「あー、いえ、筆頭家臣の兼続殿からその言葉を貰えれば、心強く思いますよ。」

ただ、直情径行なだけか！

よかった、病かと思った。

なるほど胸が薄いと男気溢れるようになるのか
俺はまた一つ賢くなったな。

「なにか酷く失礼な視線を感じるのだが？」

「所で兼続殿。

もう景虎様も景虎様と呼ぶのは相応しくないんじゃないですかね？」

「む、そうだな、これからは上杉謙信様と　そう呼ばなければなら
ない。」

「襲名と共に俗名まで捨てるとは思いませんでしたけどね。」

まあ、それこそが謙信様らしかったんだろう。

名前くらいで神仏への信仰心はゆらがないとか。

兼続殿は一段高みへ行った謙信様を見ているようだが

あの神仏に傾斜していく謙信様には不安が残る。

それは別に個人だから関係ないがこの先はどうするのかだ。

なんとか天下統一を目指すようだけど（説得して）

いずれ無茶が来ると思う。

人が人を救うこと自体無茶なんだから。

それでも人を、民を助けるために天下統一に動く度

戦は起こり、民への負担も増加する。

“ だからこそせめて、自分の手で民の手を取って
穏やかな日々を掴むことを民に約束したい。”

コレは先程の軍義の言葉。
天道を歩く謙信様の想い。

平穩を望む謙信様に戦うよう言ったのは俺だ。
俺と交わした約束の意味を考えさせなかったのも俺だ。
謙信様は毘沙門天の御導きだと言っていたが、違う。
俺が戦をするように誘導したのだ。

「
報いは受けるさ」

「へ？」

「おや ふたり仲良く腰かけて、何をしているのだ？」

話に聞く逢い引きとは、そのことか？」

「ハッハッハ、相手が兼続殿なら光栄の極み。」

その声を聞いて俺は言い

兼続殿は飛び退くように立ち上がった。

「何を言うか貴様は！」

謙信様！私の前だからと、また戯れにそのようなことを
！」

謙信様は笑う、少し酒が入っているのか

「ふふっ、そう怒るな。」

私とて、今宵は冗談のひとつも口にしたいくなるほど

気分がいいのだ 北辰、隣に寄っても良いか？」

「どうぞ、でも怒ってらっしゃらないのですか？」

是非！

むしろ喜んで！！

返事をした頃には兼続殿が座っていたところに腰かけていた。

「謙信様！本日の主役が抜け出してきては困ります！

越後統一を果たした、御目出度い日の宴だというのに！」

「賑やかな場は苦手なのだ、兼続も知っているだろう？

私は　一人静かに杯を傾ける以上の楽しみ方を知らぬ。」

「　　そうでしたね」

なんかふたりの世界だ。

「北辰。此度の平定におけるお前の働き、見事であったぞ。

兼続もようやく私の人選を認めてくれたようだからな、私も鼻が高い。」

「なるほど、兼続殿は謙信様の目を疑っていたと。」

「ど　　どうして私を引き合いに出すんですか！？

北辰もいい加減にしろ！！」

怒られちゃった

「なんだ、今宵の兼続はいつになく血気盛んだな。」

俺が小声で“血に飢えている虎とうじょ”とか言ったら
思いつきり石を投げられ頭に直撃。

「こついう日なのだ、無礼講だと思って許してくれ

それに兼続の功も忘れてはいない。見事だったぞ。」

「も、もう　そうやってからかわないでください！」

兼続殿も謙信様の前では形無しか、とおれはまた言つと
再度、頭に石がクリティカルヒット！
洒落にならん。

俺は頭からどぼどぼと血を流していた。

真の敵は此处に居たのか　そう思いながら頭を揺らす

「北辰。先程、怒っているかと聞いてきたがそれは間違いだ、」

「すみません。

客のようです。」

俺のセンサーが反応した。

謙信様の言葉を遮ってしまったが仕方がない。
春日山城城下町に入った位だ。

「客？」

「血の匂い、それと戦場の感覚がする。」

「止まれ。」

少女が声を放つ。

その声は武將の放つソレだ。

そして背後の足輕達も動きを止める。

「どーも。上杉謙信様の軍師をしている北辰だ。」

俺は少女を村上義清を見る。

そして内心で首をかしげる

スクール水着？

いや、スクール水着だ。

鎧の下に見えるは間違いなくスクール水着。

しかし、スク水、を濃紺に定めた先人は、

おそらく天才に……否、間違い無く！

神に違いない！！

胸、腰回り、お尻と 女性特有のラインを

クッキリと現すスク水は至高の逸品。

また、宇佐美さんのような白スクは水に濡れると

肌が透けてエロくなるという傾向がある。

このまま、旧スク水に持っていきたいが今はそんな場面じゃ無さそうだ。

目の前の少女を今度、川に連れていこう。

そう決める俺が何処かにいた。

「北辰。そちらは？」

「村上義清殿らしいですよ。」

見たところ逃げてきたらしいです。」

謙信様は義清を城に案内するようだ。
宴からは離れた部屋に移動していく。

因みに村上義清は北信濃国から逃げてきたらしい

「武田家か。」

兼続殿（酒のせいかまだ頬が紅い）が呟く。
何処か苦々しい口調だ。

「武田家ねえ。うん？ああ？うんうん。」

男 縄標 おお！！」

俺は手をポンツ！と叩いた。

村上義清を撃退した男に心当たりが俺はある。

天城颯馬

今はそう名乗っている筈だ、前は武田なんたらで
武田家の家督争いから逃げてきて俺を師匠師匠と言ってきて

知識をくれ知識をくれと迫ってきた坊主が今は武田家に居る筈だ
縄標（標に縄をつけたもの）を使うなら間違いない。
天城っちだ。

「どうした？」

謙信様が俺に聞いてくる。

「その増援の男は天城っちの事ですよ。」

ああ、天城颯馬って名前ですね。」

「その者はどのような人物なのだ？」

「うん？俺から見れば出来の悪い息子

アイツから見れば師匠って所ですかね。

いやいや、アイツが迷惑をかけました」

「あ、いや、お主が謝ることではない。」

「戦える？」

宇佐美さんが聞いてくる。

最悪、刃を交わすかもしれないと言っことだ。
俺はカラカラと笑いながら答える。

「叩き潰しますよ。」

弟子は潰してなんぼ。

弟子と認めた気は無いけどね。

「女の子が辱しめを受けたとあっちゃあ生きる資格はないでしょう。」

俺は清々しい笑顔で言う。

寧ろ殺す天城っち。

おまつ、縄標で縛り付けるって

何で俺を呼んでくれなかったんだ
！？

殺す。

でも晴信ちゃん（現・武田信玄）から怒られるから

二、三発殴るだけで勘弁しておいてやる。あれ？興奮したからか頭から血が出てきた。

さつき兼続殿から投げられた石が当たった所からだ。

「謙信様。ウチの奴等呼んでも良いですか？」

俺は我が家の下の村に住む傭兵達を呼ぶことにした。

ふふふふふふ。

俺の娘に兄と呼ばれた報いを受けるがいいさ！

俺なんか お父さんとか呼ばれたこと無いのに！

あれ？なんか

景色が 赤く

「なるほど、怖いな越後の兵は。
誰が状況説明お願い。」

俺はとりあえず言葉に出した。
なんか頭が痛いし。

どうやら、俺が何故か負傷した次の日の朝、国境に兵の姿が見えたらしい
いつ負傷したのかは思い出せない 相当な使い手が居たようだな。

【風林火山】

その旗を掲げるのは“武田”強国らしい。
向こうの兵数に合わせて此方も同じ兵数なだけども
まず疑問なのは

「何故に俺が縛られて連れてこられてるかだな。

つか、新手の拷問と受け取っても差し支えあるまい。

ケツ痛いし俺は本来、休暇なんだよ？」

現在の状況は縛られた状態で馬に乗っている。

ご丁寧に椅子みたいな支え付きだ。

これは拷問と受け取っても良さそうだな。

だって誰も否定しないし。

「俺が思うに、俺の回りはきつと俺がなにをしても

“北辰だし？”　みたいなことだと思っただ。」

「」

「うん。」

俺、明日から拗ねるから。

明日の訓練は通常の七倍だな。」

明日の北辰の訓練を受ける者達に黙祷を兵士達は捧げた。

そんなこんなで俺は呼ばれて謙信様と合流する。

もちろん、ハチが居たので縄を解いて貰った。

何故か兼続殿が目を合わせないのは何故だろう。

あれ？頭が普通に痛いぞ？

俺は頭を押さえながら聞いてみる。

「兼続殿、俺はいつ怪我しましたっけ？」

「しらん！！」

「　　武田の、菱の旗」

宇佐美さんの呟きに頭を押さえながら顔をあげる

でも、なんで兼続殿の返答はあんなに早かったんだろう？

ふと前を見るとなんか赤い軍装の一隊が悠然と待ち構えていた

「どれが大将で？」

「　　まだ見えない」

そっか、俺には見えるんだけどなあ
ちらほら見た顔が居るし。

あれ？頭の傷が開いた

「そうか、まだみえないのか
あれ？血が止まらない」

ちよつと、頭の回転が悪くなってる
頭がふわふわしてきた。

うえすぎのこんのはたががちがついていきけんしんさまがてをあげて

「北辰？、大丈夫か？」

「はい。だいじょーぶです
でもそうさんはもっとすきです」

「こんなときに。」

。 北辰！妹とやらに言いつけるぞ！」

「はっ！！俺はいつたい！？」

あれ？いつの間にか敵が近いぞ！？

いかん 最近、癒しが足りなかったからか？
今日は早く帰って子供達と遊ぼう。

っーか、ハチいないし！

あいつ （後ろに）逃げやがったな？

暇ならかわってくれば良いのに。

そんなことを考えていると敵中央で馬上に跨がる

女の子が軍配団扇を突きつけ、抑揚のない語調で口上を述べてくる。
おお、うちの大將が祝辞を貰ったぞ。
明日は赤飯だな。

「　つか、晴信ちゃん？」

誰にも聞こえない声で呟いた
うん。天城っちの妹だ。

「　かわいい」

宇佐美さんが呟く

「陣容から察するに　」

兼続殿が話す。

するとけんしんさまが　謙信様と言う

「長尾景虎ではない、上杉謙信と見知りおいて頂きたい。

その威風、貴君は武田信玄殿とお見受け致しますが、

相違ありませんか」

「　いかにも、私は武田信玄です」

「武田信玄？晴信ちゃんだろ。」

「うそ　」

「あ、あれが　　甲州武田軍団の総帥　　」

上から俺、宇佐美さん、兼続殿である

武田信玄と名乗った女の子は軽く鼻を鳴らしながら言葉を続ける。

「ですが、私は貴女を『上杉』と呼ぶ気など毛頭ありません。

所詮、騒動に紛れて強奪しただけのものではありませんか。」

そして、続く言葉には明らかに侮蔑の意志が込められている。

それは謙信様が名誉と尊崇を抱く名だ、いい挑発だな。

謙信様はすこし震えてるな

「信濃の国人の地を次々と

そのような

頂こう!!」

「笑止、ならば　　」

「　　う　　!？」

「　　っ　　!？」

「　　zzz　　はっ!」

上から兼続殿、宇佐美さん、俺である
言い様のない威圧の塊が瞬時に広がり
居並んだ上杉の諸将がたじろく。

俺は目を掻いた。

少し寝てみたいだ。

でも結構、いい氣を出すじゃないか。
だがやはり眠くなってきた。

「兵は不祥の器なり
即ち天道ではないか!!」

「ふん、　　どうなのですか」

「ならば　　連ねるべし!」

ダメだ、耳に入ってこない。

つか、なんて修羅場?

二人とも初対面だろ?

本当なら今日は休みなのに

なんで目の前で鬨氣の応酬なんぞしているんだ。
暫くして

「これ以上の問答は無用でしょう。

関東管領の武威を示したければ、掛かってきなさい

全軍、退くぞ」

やっと終わったのか武田信玄は馬を返す

関東管領って　飾りだろ?

示した所で將軍家は無いんだから意味は無い筈だけど
しまったな、意識が朦朧としてて聞いてなかった。

「まて!信玄!」

「
」

武田信玄は謙信様の叫びをかわしつつ、
見事な統制を取りながら馬首を返していく。
が、何故か武田信玄は振り返った。

「最後に聞き忘れていました　北辰！」

「
うん？」

俺は首を傾げる。

帰るなら帰れば良いのに

「なんだい？晴信ちゃ　殿？」

危ない危ない。

ちゃん付けで呼んだら叱られちゃうよ。

「晴信ではありません、信玄です。」

「うん？そうだったか？」

信濃を平定したんだって？凄いじゃないか。」

「よけいな世辞はいりません。何故、そこにいるのですか？」

むう、何故に怒っているんだ？

自分だって謙信様に世辞言ってたのに。

「雇われの軍配者だが？」

「 ほう？

貴方のような者が越後に？

生温い理想を掲げる長尾景虎の元に居るのは解せませんね。」

景虎様が 失礼、謙信様がギシリと齒軋りをする。

俺はこの状態で話すのか

「生温い？寧ろ最高に難しいと思えるが？

しかし、そのような理想を掲げる者を見届けるのも面白いと思うがな。」

「貴方が山から出るなど千百合に何か吹き込まれましたか？」

「いや、そろそろ頃合いだと思ってな。」

「？ 惜しいものです。

此方に来ればその才、存分に活かせたものを。」

俺に才能なんか無いっての。

あつたらとつくに天下統一だし。

「いや、そつちには天城つちが居るだろ？

彼が俺を師と呼ぶならば行けないし

師と弟子は戦うと昔から決まっている。

それと人は馬鹿にしても構わんが家は駄目だろ？」

「
退きます」

「まあ、立場上謝れんのは知っているが

口から出した言葉は二度と戻らんぞ？」

武田信玄は帰っていった。

ひねくれたやつちやのお。

城に戻ると何故に知り合いか咎められた。

説明

結構前からの知り合い

武田信玄の兄らしき男を匿っていた？ら

武田信玄、当時は武田晴信と知り合った

みたいなことを朦朧とする意識の中説明した。

普通なら打ち首じゃね？と思っていいたら呆れられただけだった。

ただ、頭の傷はいつ出来たのか思い出せず

兼続殿に聞いたら始終顔を合わせなかった。

きつと今日はデレの日なんだと解釈した。

「北辰の旦那ああ！？その傷だれにやられたんですかい！？」

「わからん。気付いたらな。」

この越後には人知を超えた存在がいるらしい。冗談だけど。」

俺は暑苦しい仲間達に答える。

我が家の麓にある集落の者達だ。

まあ、全員が訳在りの奴等な訳だけでも実力は充分にある。

「ついでに言えばキクゴローが行方不明だ。」

そう言えば昼前の武田信玄との邂逅辺りから見てない。

「俺も見えてないです！アニキ！！」

「そうか　冥福を祈るより他、無さそうだな。」

【因みにキクゴローSide】

僕は北辰と晴信との会話を聞いていた。

うーん、晴信も大きくなつたねえ

北辰も素直に褒めてあげれば良いのに説教なんかして
何で北辰はいつも損な事を言うのかな？

僕はふと北辰の服から顔を出していると晴信と目があつた

（話があります？

に　や！？新鮮な魚！？）

僕はその話を聞いて頷いた。

北辰達が帰るときに僕は北辰の懐から出る

行き先伝えたけど　血が出てるし大丈夫かな？

僕は首を傾げたけど北辰だから良いと思って晴信に会いに行く。

「キク。良く来ましたね。」

ムンズ！と口を掴まれて持ち上げられる

「さあ、詳しいことは城で聞きましょう。」

何故、兄いえ、北辰が血塗れだったのかも聞きたいですね。」

「にやや！？晴信騙したの！？」

「信玄です。名前を間違える猫にはお仕置きが必要ですね？」

晴信、じゃなくて信玄は花が咲くような笑みを浮かべた。

そして次の瞬間には僕を風にさらしながら走り出したのだった。

【北辰Side】

「と、言うわけだ。」

天城つちを殴ろう。

「ハッ！ ハッ！ ハッ！
八つ裂きじゃあああ
あああ！！！」

「じゃあ、お前等はアレだ 戦線維持。」

俺は農民達に告げる。

なんか預けられた兵士（農民）が増えて俺が呼んだ傭兵仲間も加わったから

結構多い部隊になっている。

だから、俺の戦い方を教えるよりも見せた方が早いと思う

「そして見ていろ。北辰の戦ってヤツを魅せてやる。」

そして俺と昔からの傭兵仲間と同時に戦線を押し上げた。

越後統一、そしてスク水、最後に武田信玄（後書き）

スク水 次回も！！

やはりスク水

スク水への愛が止まらな

戦闘？カット！！（前書き）

タイトル通り

戦闘描写は作者の技量的に不可能です。

ごめんなさい。

やはりスク水 スク水への愛が止まらな 戦闘？カット！！

「幾百の戦場を越えた者達だ、止められると思うな。」

なんか言ってみたらかつこいいと思ったが案外恥ずかしかった。
こう、アレだ 恥ずかしい。

「恥ずかしがるから言わなきゃ良いのに。」

キクゴローが今回は肩の上から言う。

「女の子の手前格好良く行こうと思ったんだ。」

「なんと滅茶苦茶な」

俺の隣で美少女が呟く。

なんか尖った飾り（防具？）をつけていて
その下にスクール水着を着用している神だ。
神じゃないけどスク水の効果は絶大だ。
でもスク水って

時代を超越し過ぎじゃないのか？

しかも、隣に居る神こと村上義清は

自ら先陣を切って敵に突撃するという話もあって
長槍による槍袞戦法を得意とも聞いて

武将で長槍を主に使うのは少ないと思ったが
そんな事は関係がない

年齢は知らんが顔立ちが明らかに幼いのだ。

幼いのだ

幼いのだ

おさないのだ

幼女＋スク水＋長い黒髪〃神

となること間違いない。

「だが、強いだろう？」

戦に勝つと言うのが強いのならばな。

俺は素手で戦うアホ共を見る。

何故に素手？

腰に携えている刀は飾りか！？

でも死人が出ないのは好ましいな。

「なんか矢が降ってくるぞ！進軍止め。」

俺は申し訳程度の心配をしながら言う。

「最後の兵は皆　このような感じなのか？」

「いや、ウチの奴等は　だな。」

素手で矢を払う兵達を指して義清ちゃんが言った。
ウチの奴等の戦い方。

普通に突撃。

ただ、地力が違いすぎて圧倒的に見えるだけ。
個々の能力、連係、経験。

それら全てが武田の兵を上回っているだけだ。

俺は答えを返して矢が放たれた方を見る。

「じゃあ、義清ちゃん。」

後は頼むな、ゆっくり来てくれ。」

「北辰殿はどうするのだ？」

「はっはっはっ、堅苦しいな。
いっそのこと兄と呼んでくれ。」

俺は　まあ、評価を言い渡してくるよ。」

そう言っただけ俺は大地を踏み締めた。

「み・つ・け・た!!」

俺は木々の隙間を縫うように跳びながら目的の一人を見つける。
そしてそのままスピードを落とさず天城っちの首を掴む。

少し位、苦しめば良いと思ってそのまま地面を蹴って空中を跳ぶ。

「ぐっ　　あっ　　」

まあ、死なない程度に手加減するけど。

目の前の天城っちは抵抗しようとするが
俺にとってその程度の抵抗は無抵抗も同然。

「まず先に言っておこうか。」

俺は目的の場所まで達すると天城つちを掴んでいる腕を前方に振って天城つちを投げ飛ばす。

「ダメダメだな。小僧。」

兵の配置、使い方、指揮の仕方。時期。落第だ。

あ、謙信様おはようございます。」

「北辰。どんな登場の仕方だ!？」

「いや、久々の再開に嬉しすぎて。丁度、武田の将も勢揃いだな。」

俺は七人の将兵と信玄ちゃんを見る。

あれ? 八人?

ん??

俺は目を擦る。

あれ? ぬいぐるみが見えたような気がするけど気のせいか。六人の将兵と信玄ちゃんだ。

「天城つち、俺は教えなかったか?

戦をする時、相手を知れと。」

相手の望みを知り望みへと至る道を知れと。」

「師匠 それは」

「知っているが出来なかったか？
違うな、しなかった だろう。」

地理、気候、人数、目的、思考、全てを頭に置き

そして、相手の行動を予測し備える。

そんなことすら忘れたか？」

俺は天城うち（敵）に説教をしていた。

「あの その」

空気を読むとかそれ以前に死んだら元も子もない
だから、今からちゃんと叱らないとダメだと思う。
でも、天城たちは身が入っていないようだから

「武田の将が集まるこの場で甲斐に上杉の兵が進攻したら、甲斐の
民はどう思うかな？」

「まさかっ！」

「たとえばだよ。雇い主の命無しじゃ動けないし。」

たとえば、この場で、この山から、大木が降ってきたらどうする？」

俺は山の上方を指す。

ソコには綺麗に並べられた丸太があった。

「結構な威力だと思うがな。

たとえばだ、俺が話している間にお前等の後ろから

北信濃の反乱分子が結託して攻めてくるとしたら どんする？」

武田の兵達に緊張が走る。

緊張は伝染するもので次々に緊張が伝染する。

「たとえばだ、

今この場で ー

俺は少し歩き木の下にある岩を蹴って退かす。

すると縄が地面から俺の腹辺りまでビシィ！と持ち上がった。
簡単なトラップだ。

岩で縄を地面に押さえ付けておく簡単な子供遊び

「油を染み込ませた縄に火をつけたら、動揺しないか？
まあ、冗談だけど。

そんなことしたら怒られちゃうし。」

俺は縄を斬る。

「でも春日ちゃんは見事だったよ。」

「は、はい」

虎綱春日

深い青い髪をした短髪気味の女の子。

性格は気弱な感じがする。

オレンジ色の瞳をしていて尚且つ美少女。

しかも何故か肌の露出が多いこの時代

春日ちゃんは露出が無くしっかり着込んだ服（上下共に）

その気弱な感じがなんとも

そそるじゃないか

「唯一、誤算だったよ。

進攻を止められた。」

弓矢での援護の事だ。

「そ、そんな」

「そんなことすら出来ない奴がいるんだよ。

そんなことすら出来ない気色悪い内藤とかいう奴とか

変な馬の被り物した気違いの馬場とかいう奴とか

軍師の心構えすら出来ないボケとかがな。

その点、春日ちゃんは凄いと思う。

敬意を評してもいい。」

いや、マジで。

なんか、“き、気色悪い！？”とか“き、気違い！？”とか聞こえたような気がするけど気のせいだと思う。

「それと天城うち、軍師は人に非ず。この意味は理解できたか？」

「いえ、まだです。」

「戦いとはな。相手のできる行動を全て予測し

その上でとれる行動を選ぶだけだ。」

「北辰、お前　ソレがどれほど難しいか知っていて言っているのか？」

すると兼続殿が聞いてくる。

俺は事も無げに言う、紛れもない真実だから。

「出来なければ死ぬだけです。」

「　賢者　か。」

見事なものだ、おい！信玄！」

謙信様が何かを呟いて信玄ちゃんを呼ぶ。

「　気安く呼ばないで下さい。」

「この勝負、私の、いや北辰の勝ちのようだな！

此処は退くことを勧めるが、どうか？」

「ふん。　　良いでしょう。」

この場は北辰に免じで　　」

「意味がわからな　　くないよ、うん。」

「　　退いて差し上げましょう。」

やばい、晴信ちゃんの睨みが半端無い。
そこまでして謙信様に敗けたくないのか。
そして武田軍団は帰っていった。

因みに六人の将とは

内藤昌秀

馬場信春

山県昌景

山本勘助

真田幸村

虎綱春日

一条信龍

の事　　あれ！？

一人多い？

内藤昌秀

馬場信春

山県昌景

山本勘助

真田幸村

虎綱春日

いや、六人だ。

じゃあ完全版をつくろうか。

ナルシスト

内藤昌秀

馬場信春（気違い）

山県昌景（忠臣1おっさん）

山本勘助（忠臣2爺）

真田幸村（猪娘、可愛い）

虎綱春日（いいお嫁さんになる（断言））

俺の観察眼に惚れ惚れする。

え？武田信玄？

癖が強いけど可愛いんですよ。

つか、武田軍団癖が強い。

「北辰も同等だと思っよ？」

「キクゴローじゃないか。」

「いったい何処に行ってたんだ？」

「ちよつとね。」

「てつきり信玄ちゃんの所に居ると思っていたが、ただの迷子か。」

「うん！迷子に決まってるよ！」

「そうか、さて」

「アニキ！！言われた通りに追い出しました！」

「北辰の旦那！武田の奴等退きましたぜ！！」

ハチを皮切りに次々と報告が舞い込んでくる。

「結構。」

謙信様、どうしますか？」

そうした報告の中、俺は謙信様に聞く。
主の意志が優先されるからね。

「北辰。賢者の異名は名ばかりでは無いと言うことか。」

「？？？本当の賢者は戦う前に終わらせますよ。」

「村上殿の城は取り戻せたのか？」

「あれ？知ってたんですか？」

俺は首をかしげる。

実は先程の会話の裏で上杉の兵達が村上殿の城を取り返していたのだ。

「冗談だったのだが」

本来、信玄を退けられれば良いと思っていたのだ。」

「えっ？？兼続殿が“そのくらい出来るよな”」

と俺に言ったのでやっただけですけど?」

「わ、私はその位の気持ちでやれと言ったのだ!」

「北辰。頑張った、良い子、良い子。」

「うわあい、褒められた。」

「でも、無茶しちゃダメだよ?」

「怒られちゃった。」

上げて落とされた　でも宇佐美さん。

さつき（話しているとき）寝ていたような　気のせいか!」

でも、目標は達成したからいいや。

無茶したように見えるのかなあ?

俺は、天城っち達の動きを思い出す。

合理的に動き、まだ稚拙ながらも兵を動かしていた。

「まだまだ　若いな。」

「北辰って一体何歳なの?」

キクゴローが聞いてくる。

すると何故か謙信様と兼続殿が俺を見る。

宇佐美さんの耳がびよこんと動く。

「何故に?」

「俺も気になります!」

ハチが手を元気良く空にむかつて拳げている。
何故に拳手？

「それほどの智や指揮、そして戦場における身の置き方。

どれほどの歳月が必要か知ってみたい気もする。」

「いや、謙信様？

そんな過大評価してもらうと困るんですけど。」

「で、北辰って何歳なの？」

キクゴローが再度、聞いてくる。

何でそんな事に興味があるのかわからないけど
まあ、こんな風に注目されたら言うしかないか。

「24になる。」

「えっ！？」 キクゴロー

「「はっ！？」」 謙信様と兼続殿

「へ？」 宇佐美さん

「はいっ！？」 ハチ

「！！」 その他

「えっ？」 俺

逆に吃驚した。

何故に皆、驚くんだ？

「どうしたんだ？ 驚くほどでも無いだろう。」

まだ戦場の感覚が抜けていないのか

口調が何時もより堅くなってしまう。

もしかして、この口調のせいで老けて見えるとか！？

「そ、そうだよね！？」

124の間違いだよな。」

「いや、24だ。」

キクゴローの失礼な勘違いに俺は口を出す。

その後、何故か兼続殿が詰問（首を絞められながら）されたと言っただけ
言っておこう。

そしてその夜、小雪ちゃんにまで驚かれた。

俺は初めて何故、皆が驚くのか聞いてみた。

老けて見えるようだ 俺が。

今日はふて寝をすると俺は心に決め就寝した。

北辰家にて（前書き）

テストが

北辰家にて

場所は飛驒の奥地、我が家だ。

先日の“老けて見える”的な発言により俺は傷心して縁側で寝て転がっている。

季節はもう冬になる頃だけど、いい小春日和だ。

「もう！兄様！だらだらしないで退いてくださいー！」

俺はドゲシツ！と蹴られて縁側から落下した。

そのまま、庭の木の下まで転がりねっころがる。

「しょうがないじゃないか 昨日は休みを押してまで

働いたんだから、もう少し労いとかは無いのかねー。」

「充分労っています。」

三角巾を頭につけて掃除をする小雪を見る。

なんだろう、日に日に強くなってる？

「歳を追う毎にお綺麗になってまあ、何処に出しても

兄として恥ずかしくないよ。」

いや、本当に可愛いく育った。

小雪は眉を潜めて、尋ねるように聞いてくる。

「出て行って 欲しいんですか？」

「出ていきたいのか？」

「嫌です」

「そうか。」

あら？ちーたん、鍛練中？」

ちーたんが汗でびっしょりになりながら現れた、服が汗で濡れてエロい

だが片手に木刀装備だから下手なこと言えないねっころがつてるから下から見ると

いや、下から見るとこそ艶やかに見えるその胸。重量を無視し持ち上がる張りのある胸。

そして汗で張り付き艶やかな、ふともも。どれをとっても、素 晴 ら し い

「ん？最近是不躑な輩が増えてるからな。」

「え？最近は何きなんかしてないぞ？」

「兄様？」

「ともかくだよ。」

不躑な輩 他の妖怪？」

「他山の山ノ神の手下だ。」

「うん、そういえばたまに見るよ。」

でも女の子だし、下着丸見えだったから見逃した。」

何故か二人が同時に溜め息をついた。

だって木の上で見てたんだもん

すると、こう、パンツが見えるラインが

「でも、神も喧嘩と言つか縄張り争いするんだな」

俺は疑問を口にする、そして木の上にキクゴローを発見した。
しまった、存在ごと忘れてた。

なんか縄張り争いみたいなものが在るらしい。

ヤクザを思い浮かべたけど間違いでは無いと思う。

「勝つたら相手の言うことを聞くんです。」

殆どは土地や物ですけど 人も、あります。」

「うん？ “私なんかかつこよくない？”

みたいな顔してるけど、寝癖直したら？」

「はう！？」

櫻ちゃんは慌てて溜め池の前に行って水に映った姿を見て髪形を整える

さっきの意味ありげな視線は一体なんなんだろうか。

キクゴローはとことこと寄ってきて肩に乗った。

キクゴローの頭を撫でている間に櫻ちゃんが戻ってくる。

「こほん。私達、山ノ神は敗者は勝者の言うことを

聞くと言つ決まりがあるんです。」

「そうか。」

所で、食糧庫から果物が消えているんだが いや、言わなくてもわかっていたな。」

「何ですかその目は！」

小雪も千百合も私の方を見ないで下さい！」

「私は掃除に戻ります」

「私は汗を流してくる」

「俺も掃除を手伝うか。」

「兄様は寝ていてください、仕事帰りなんですから。」

小雪 お前ってやつは！

なんで佳い女なんだ！

「誤解です！！私は（そんなに）食べてません！！」

櫻ちゃんの弁明を聞きながら俺は縁側に戻ると
再び這いずるように床にねっころがった

「桜。と白！」

俺は呟いて、蹴られた。

俺は再度、縁側から落下してから頭だけ持ち上げて言う

「晴信ちゃん　いきなり酷いな」

「だから信玄だと言っています。」

「やぁ天城っち。」

「お久しぶりです。師匠。」

「　　　変態め！」

「酷いよ幸村ちゃん」

目の前には武田信玄（幼女）と真田幸村とおまけの天城颯馬

真田幸村は武田信玄の家臣だ

武田信玄を御館様と呼び慕う。

イノシシで、盲目になるくらい御館様好きだ

女の子と女の子は良い。許す。

しかも、何を装備しているかって大前提に紫を基本に

ツインテール＋二の腕の露出＋スカート＋黒ニーソ

手がつけられない

おまつ、黒ニーソだぞ？

むちむちなふとももだぞ？

健康的なむちむちなふともも

一見、合わさることの無さそうだが

流石は真田幸村。

見事な訓練でその見事なバランスが調和されているのだろう。

天城颯馬は何年か前に家督争いから逃げて来て

古い友達から俺のところを紹介されたのだ。

散々働かせて、勉強みてやつたら急に師匠とか呼び始めた。

このイケメン野郎が！失せる！

なんて言えば晴信ちゃんもとい、信玄ちゃんに嫌われるからとりあえず、迎え入れた。

「お前の妹の下着は大人びすぎじゃないか？」

武田信玄の容姿は白に近い銀の髪で少女

どのくらい幼女かと言うと一人で馬に乗れないほど小さい。

「信玄はどうも薄紅色が好きなようで　　！！」

俺は膝を抑えた　真田幸村の攻撃

「膝っておま　皿が割れる　」

「ぬおおお」

颯馬は信玄ちゃんから脛らしくのたうち回っている
キクゴローがソレを見て言う

「余計なことを言わなければいいのに」

「菊か。近う寄れ」

「うん。」

キクゴローが信玄ちゃんに撫でられる。
信玄ちゃんはキクゴローの事を菊と呼ぶ。
キクゴローも満更では無いようだ。
俺は復活して縁側に這い上がる
すると天城っちも上ろうとするが

「あ、その位置だと天城っちが信玄ちゃんの下着を!!」

「ちよっ！出任せグバツ!!」

さらば！天城っち！

そして容赦がないな幸村ちゃん！

「で？今日はどうしたの？」

「わかりませんか？」

「うん？」

ごめん、少し抜ける。くつろいでてくれ。」

俺はちーたんに呼ばれた気がして旅立った。
残された二人にキクゴローが言う

「湯殿でも入ってきたら？信玄温泉好きでしょ？」

そして、奥から小雪が現れた

以後軽く天城颯馬Side

「あら、晴信さん。来てたんですか？」

師匠が消えたあと小雪姐さんが現れた。

実際は小雪さんと呼ぶが内心では姐さんだ。

この家での権力的な役割で最上位に居る。

「小雪。私は武田信玄です間違えないように。」

「あら、名前変えたんですか？」

それと颯馬さん。あの人は？」

小雪さんの言うあの人は北辰 師匠の事だ。

俺（天城颯馬）は何故か冷や汗を出しながら答える

「急に何処かへ行ったみたいだが です。」

つい、敬語

師匠 俺も彼女が怖いです

昔はもつと こう 柔らかかった気が

「なにか？」

しないでもないです。

いやあ、ヤワラカナ笑ミダナア

俺はガクガクと震えだした。

「しかたありません、信玄さんは長旅でお疲れでしょうから

温泉でも入ってきたらいかがですか？」

「そうしましょう。」

颯馬！」

「は、はい！！」

「くれぐれも粗相（小雪を怒らせない）ないように」

あ、信玄も（小雪姐さんが）怖いんだ。

「御意！散歩してきます！」

俺はそう言って慣れ親しんだ山の中に
食糧（上納品）を探しに旅立った。

「幸村。貴女も一緒にどうですか？」

「い、いえ！御館様と共になど恐れ多い！！」

私も食糧を取りに行って参ります！！」

真田幸村も旅立った

北辰Side

ごくり

俺は唾を飲んだ。

これはどーゆーことだ？

目の前では貧乳と巨乳の戦いだ？

貧乳は兼続殿だし

巨乳は当然、ちーたんだが、半裸

半裸

半裸

半裸 コレ大事。

畜生 足が動かないぜ。

俺が一步も動けないなんて 脚と首が固定されたみたいだ。

っ！か、何故（兼続殿）此処にいるし？

謙信様も居るし。

宇佐美さんは やばい、眠たげだ

俺はまだ揺れる乳、略して揺乳を見ていたかったが止めに入る。

俺は懷から在るものを取り出し二人の間に入る

「だぶる蜜柑汁あたーくー!!」

ぎゅっ！ぷしやああー!!

あれ？擬音が一瞬、エロく感じたのは俺だけ？

「~~~~~」 声に鳴らない叫び。

二人とも流石だな武器を離さないなんて

そして、あれ？なんで武器を振り上げて

あゝ ああああー!!!

「死ぬかと思つた。いや、マジで。」

今の季節、収穫時期で戦所では無いらしい
収穫時期だからこそ戦だと思つたのは俺だけか？
俺つて外道？うん鬼畜だとなんかエロい。
何か用事があつて来たらしい。
なんか、一国の主に訪ねられてるよ、俺。

「そうですか。」

とりあえず、家に案内しますよ。」

とりあえず、どうしよう

武田信玄vs上杉謙信

が現実になりそうだ。

俺は謙信様に風呂を勧めて回避することにした。

謙信様も風に誘われた温泉の香りに誘われて頷いた

宇佐美さんは眠たげだから却下（残念ながら）

兼続殿は、湯を共にするなど恐れ多い！！

とか言つて却下していた。

まあ良い。本命は回避できた。

俺は、そう思いながら歩く。

「家が前より巨大になっているように見えるのだが。」

「そうですね。」

家に家を繋ぐように造つてたら

そこら辺の城より広くなつてしまった。

最近は一階も造っている。

「どれだけ巨大にすれば気がすむんだお前は」

兼続殿が軽く狼狽えている。

そんなこんなで移動。

小雪に紹介して部屋に移動した。

「宇佐美さんが」

宇佐美さんが畳の上で寝てしまった。

くっ、なんて破壊力だ。

こぼれ出る程のお胸様！

「北辰??」

「いえ。

謙信様は湯殿に行かれたことですし。

何故、ちーたん 千百合と戦いを？」

「「過ぎたことだ、忘れる。」」

あれ？

あんなに戦ってたのに仲良し？

俺は場を紛らわすために

「アレですか？水浴びしている千百合に遭遇して

刀持ってたから千百合が“敵か!?”とか言って動いたら

その胸が揺れて、兼続殿が“嫌がらせか!貴様こそ私の敵だ!”

みたいなことを？？な、なんて、あはははは！」

「「

」」

あれ？遠からずって感じ？

と渴いた笑いを漏らしているときに
ドウウ！！

と、急に「氣」が溢れ出した。

湯殿から

湯殿から

湯殿か まさかの？

すると、天城颯馬と真田幸村が帰ってきた。

幸村ちゃんと兼続殿が何故か視線を合わせて止まった
なにこの感情 まさか 愛か。

み たい な ？

兼続殿は「愛」の文字の兜？を被るほどだしな。

「師匠！なにか手を！」

「見ろ、お前のところでは有り得ない圧倒的な破壊力を！」

「こ、ここ、この方は？」

天城っちは畳でコテンと寝ている宇佐美さんを見て言う。
具体的にはお胸様を見ながら。

「宇佐美さんだ。」

「 颯馬？」

幸村ちゃんが睨みながら言う。

「な、ななな、なにを馬鹿な！」

そ、そそそんなものただの腫れ腫れ

うおおおおおー！！」

言えまい。

お前は俺と同類。

たとえ武人に凄まれようと否定など出来まい。

スパン！

襖が開く。

いらっしやった。

謙信様と信玄ちゃんだ。

本当に武田信玄vs上杉謙信が起きるなんて

宇佐美さん　よく寝られるね。

そして素晴らしい氣の応酬だ。

だがな

「ウチで好き勝手は出来ない。」

何故かって？真のドン（ボス）は居るんだよ。
圧倒的な力をもつ奴がな。

「いい加減にしなさいーい！！」

違う襖がスパンと開く。

俺と天城っちは一瞬で胡座から正座に移行
その早さブライスレス。

「誰ですか！？こんな所で子供達を怯えさせるのは！！」

小雪ちゃんは部屋をジロリと見て言う

因みに天城っちは目を瞑っている。

俺は無我の境地を開く。

小雪ちゃんは敵発見みたいなの？

「二人とも！そこに座りなさい！」

「は、はい！！」

「こ、小雪殿？こ、このかたは関東管」

「何か??」

たとえどれだけ偉かろうと関係ありません。

それとも？偉ければ何をしても許されるとでも？」

「いえ！申し訳ありませんでした！！」

これが、小雪無双。

後に謙信様がもらした

「北辰の言った通りだ」

の呟きで前に言った愚痴？がバレて俺は地面に正座することとなっ

た。

『はあ。今は仕事外ですからね。
何時ものように畏まってませんよ。』

兼続殿から説教された際の言い分だ。
まあ、物凄く怒られましたけども。

「と、色々和省いて昼餉の後なんだが。」

「師匠？何言ってるんですか？」

「わざわざ飯の時まで険悪にならなくて良いのに
飯が美味いけど気まずくて疲れた。」

俺はお茶を飲みながら答える。
もう少し仲良くして貰いたいものだけでも

「馬が合わないとはこの事だな。」

所で 信玄ちゃんは何か用だったのか？」

「俺が用があつたんです」

天城っちが言った瞬間、俺は露骨に顔をしかめる、

なんだ、ならお帰り頂いてもいいや。

「謙信様、今日は何の用事でいらしたんですっけ？」

「　　良いのか？」

天城つちを気にかけるとは謙信様は優しいなあ。

え？宇佐美さん??

普通に布団被って寝てますよ？

我が家で。

「天城つちは路傍の石のように思ってください。

そうだ天城つち、台所から茶菓子取ってこい。」

「いや、俺　　客人　　」

そうばやきながらも立ち上がる天城つち。

ここで暮らしてた事もあるから場所くらいはわかるだろう。

「じゃあ、とつてきます。」

「ああ、言つてこい。

さ、気にせず続きをどうぞ。」

因みにハチはそこら辺で爆睡している。

櫻ちゃん（山ノ神）は外出中。

小雪ちゃんは洗い物をしていて

ちーたんは麓の里に用事で出ている。

「北辰は武田との戦　手を抜いていたのか？」

謙信様が真剣な口調で真剣な眼差しで聞いてきた。
俺はその問いに真剣に答える。

「本気だったよ、ただ、全力だったかと聞かれたら否ですね。

真剣に手を抜かずに本気でやりました。」

「そうか。」

謙信様が心なしか安心したようだ。
本気でやらないわけにはいかないだろう。

「手段を選ばなければ幾らでもありましたが

正直にやりたくありませんし謙信様も嫌でしょう？」

「当然だ。」

謙信様が即答する。

正々堂々、正面から。

謙信様の得意な戦法だ。

「だからこそ、俺は貴女に仕えてるんですよ。

気にしなくても、その信念が崩れれば裏切るので大丈夫です。」

謙信様が此処に来てまで聞きたかったこと、多分だが

“ 幾らでも仕える所はあつたはずなのに何故私の所に？ ”
みたいな事だろう。
そんなもの簡単だ。

「言葉で言うなら愚直なほど真つ直ぐな生き方に見惚れたからですよ。」

「あ う、うむ。」

あれ？

謙信様、うつ向いてどうしたんだろう？

なんか、心なしか紅くなっているような

「師匠、持ってきました。」

と、そこで襖が開いた。

「おお、悪いな。荷袋に入ってた。」

俺は荷袋からお茶菓子を出す

「初めから気付いてくださいよ！！」

「実はお前に謝らないといけないことがある」

「まだ何かあるんですかっ!？」

「前に葛餅を子供に与えて怒られていたが 犯人は俺だ。」

「知ってますよ！小雪姐さんに怒られてたじゃないですか!!」

「そうだったな。」

さて、何の用事だったわけ？」

天城つちが普通の動作でお茶を淹れる。
普通にお茶を淹れるって

「お前、今は敵じゃなかったか？」

「つい癖で！！」

「コホッ 毒か！」

「師匠、せめて飲んでからやってください。」

俺はお茶を飲む。

お茶を飲んでから“毒か！”なんてやったら誤解される。

「 不味っ！！」

コレは不味い 小雪ちゃんの八倍不味い。
美味しくない 旨くない。

「 ただ、ひたすらに美味しくない。」

でも、もったいないから飲むことにしよう。
謙信様達には俺がお茶を淹れる。

「天城つち。話があるならまた今度にしないか？」

「師匠？」

「その問いには答えられない。」

軍師は人に非ず

天城つちが俺に軍師になりたいと言ったとき聞いた言葉だ。

「軍師は人に非ず。良く考える。」

「聞いて貰えますか？」

天城つちが真つ直ぐに俺を見て言ってきた。

「人払いだ。」

俺は天井から俺達を覗き見てた娘達に言つた。
すると、辺りの喧騒が止み静寂に包まれた。

「聞こう。天城颯馬。」

天城の言葉を俺は待つことにした。

軍師として兵士として（前書き）

おや 見直すほど駄文だ。

才能の少なさが露見（初めから）露見してしまってるぜ

軍師として兵士として

「 かはっ 毒 か」

崩れ落ちる男。

倒れた湯呑み、染みゆくお茶。

一筋の血液が二本、三本と増えていく。

「あま ぎっ 」

崩れ行く身体を腕で支え男は叫ぶ。

「天城イイイイイイ！！」

「北辰？何か違う物語が進んでいたような気がするのだが。」

謙信様が聞いてくる、俺は気のせいですと答えておいた。

「じゃあ、天城。
言ってみろ。」

天城が俺へと話し出した。

俺は目を瞑って言葉に出す。
たどたどしい天城の言葉を。

「只の言葉で己の友を身内を死地へ追いやり

自分の手で戦わない者が己の言葉のみで他人の子を殺すゆえにか

軍師で在るからただ、仲間を殺すしかないか。

そんなものが人であっていい筈がないが故に軍師は人に非ず。

そうか。そう考えたか。」

天城が何を言っているのか良くわからなかったが
コレが天城の考え。

「天城。」

天城は軍師だ。

でも、一度この家で過ごした家族だ。

「お前は優秀な軍師だ。」

「えっ!？」

「だから、お前は降りろ。」

無理には止めない。

だが、天城はこのままでは死ぬ。

「降りろ天城。この輪廻から。」

目を塞ぎ争いを忘れ幸せに暮らせ。」

俺は片方の膝を立てて座り言う。

他の奴等は天城に感心しているが

それは“そんな考え方も在るんだ？”と言う感心だ。
だから、軍師の心情に気づかない　気づけない。

「何を言うかと思えば　颯馬。幸村。帰りますよ。」

信玄ちゃんが立ち上がり言う。

天城も幸村ちゃんもオドオドと立ち上がる。

信玄ちゃんも何故か怒っているようだ。

「強要はしまい。」

だがな、自殺するなら勝手に死ぬ。」

背中と言う。

その瞬間、信玄がクルリと振り返りズカズカと歩いてきて俺の前に
立ち、

迷い無く鉄扇で俺のこめかみを殴った。

「まあ、座れよ。」

「「「　　つつー！！」」」

部屋の雰囲気ガラリと変わる。

「聞こえなかったか？天城。」

しかし、俺は天城にしか今は興味が無い。

「ソコで膝をついてる小娘も　邪魔だ。」

なんてな、さ。お話をしようか。」

雰囲気元に戻し俺は再び座らせる。

でも　宇佐美さんパネエ！

まだ寝てる！！

「お前はいずれ自殺する。」

そう言ってお茶を飲む。

天城っちが狼狽するけど

「なら、何で戦場に出た？

あの答えを言えながら何故、戦場に姿を見せた？」

「そ、ソレは直接指揮した方が　」

「軍師が俺達の領域を犯すなよ。」

天城っちの弁解を遮り立て膝をつきながら言う。

「お前は心の底では死にたかつたんじゃ無いのか？」

「違う！！俺はただっ」

「仲間を死地に送り込むのだからせめて指揮しなければ
か？」

軍師の死因は戦場での死亡が多い
だが、俺は自殺だと思っている。

何故か、それは“人でありたいと想う”が故に

己の罪悪感に潰され、執り憑かれる。

だつて、そうだろ？」

俺は肩を竦める。

そして天城っちを見て言う。

「兵には兵の矜恃がある。

その中に割り込み邪魔をしてまで殺されに来るんだ。

軍師の仕事は人を殺し殺されることじゃない。

故に、懂れ、悩み、そして自殺する。

己の所業に疑問を持ち。

己の生をなげうち。

己の死に惹かれる。」

自分の言葉で何千の人間の生死が動き

自分の力で戦わないのに功績が増えていく。

自分の行動に疑問を持ち。

せめて戦場で死のうと行動する。

自分の功績を呪い。

自分の人生を呪い。

死の道だけが救いに見えていく。

「死ぬなら独りで死ね。

俺達を巻き込むな。」

「し、師匠も戦場に出ているじゃないですか!?!」

「何を言っている。

確固たる意志を持たぬ軍師風情が戦場に出るなど言っているのだ。

天城。お前は心の何処かで戦場で死ぬなら仕方無いと思っていただろう。」

「そ、そんなの誰でも思っているじゃないですか!」

天城。うちがついに叫ぶ。

だが、天城。うちは誰に対して言っているのだろうか?

自分に対してか?

「黙れよ、小僧。

俺は傭兵だから、強くは言わんがな。

お前が兵士を汚すな。

生きるために戦う奴等をテメエが汚すな。

本当の兵士お前みたいに中途半端な気持ちじゃねえんだよ。

国のために生まれ国のために生き家族の為に生き、独りで死んでいく。

兵士つてのはそんな存在だ。殺す事や殺される事に迷いもないし

誰かを巻き込もうなんざ、論外だ。」

俺は湯呑みを持ち上げ、傾ける。

「このままではいずれお前は自殺する。

何て事はない、戦場で普通に死ぬ（自殺する）。

意志が無いんだよ、お前は。」

しかし、お茶が無かった。

兵士には兵士の意志がある目的がある。

軍師も傭兵も同じだ。

「私情をあまり持ち込まないことだ。」

私情があるから、悔いてしまう。

確かに私情を無くせば人として間違いだろう。
だが

「俺は人間ではないのだ。」

人間でありながら人間ではない。
矛盾しているが

「そうでなければ、俺が俺でなくなるしな。

天城。違えるなよ、お前は兵士ではない。

兵士になれないんだ。」

「師匠　もしかして、俺を心配してくれてるんですか？」

俺は湯呑みを割る。

「　　かもしれん。」

「　　マジすか!？」

「でも、言い当てられてムカつく。」

俺は湯呑みの破片を投げ付けた
刺さってしまえ!

「ちよっ!子供みたいなことしないで下さいよ!」

「俺には俺の矜恃があるんだよ!

おまえ、言葉に出すなよ!」

「なら、初めから言ってくださいよ！」

でも 師匠、いや。北辰さん。」

「なんだ。」

「ありがとうございます。」

心の中にあつた棘が取れたような気がします。」

「そうか。それは何より。」

もし、戦場で死んだら俺は怒るぞ？

お前に残されたのは寿命を全うするしかないんだ。」

「え？あ、ありがとうございます。」

「しかし、さっきの会話、輪廻って言ったけど

言つた俺を褒めたいな、意味がたしか

“生ある者が迷妄に満ちた生死を絶え間なく繰り返すこと”

だったからな、天城っち。

囚われるなよ。」

そう言つてチラリと謙信様を見る。

謙信様も囚われがちな所があるからサポートしないと。

「師匠、俺は降りませんよ。
俺の意志です。」

「なら、早く孫を見せてくれ！」

天城っちがお茶を吐き出す。

「なっ、ななな！何を貴様は！」

「ほほう。幸村ちゃん、そう言うことが。」

うん。良いよ。実に良いじゃないか。」

「し、ししし、師匠！？何を勘違いして！？」

「なに？勘違されることをしていたと？」

よしわかった！小雪ちゃん！？小雪ちゃん！

今日は赤飯にしよう！実は天城っちと幸村ちゃんが
ぐはっ！！！」

幸村ちゃんの回し蹴りを戴いた。

そうして崩れたところに天城っちのタックルだった。

「師匠！？話をしましょう！話を！」

さっきまですっごい真面目だったじゃ無いですか！」

「近年希に見る真面目さだったよ。」

俺は天城っちを蹴り飛ばして座り直す。

「なんだったか、今は弟子の成長みて嬉しいから何か1つ話そうか。天城っち。何かある？べつに“子供の育て方”でも“オムツの変え方”」

でも何でも応えようじゃないか。」

「師匠は結婚しないんですか？」

「お前は結婚しないのか？」

天城っちの言葉に俺は返す。

「答えてないじゃないですか!!」

「応じると言っただけで回答するとは言っていない。」

「卑怯だ!」

「卑怯?気のせいだろう。」

じゃあ、昔。お前に聞かれた問いを返そう。」

「何か言いましたっけ?」

「人を殺す俺が幸せになっていいのか　　だったか？」

うん。良いと思うよ。幸せになれ。

兵士ってのはな、戦場じゃあ迷い無く戦うが

普通の生活じゃあそれはもう苦悩するものだ。

だが、殺めた人間の為にもせめて自分は幸せにならなければ

何のために生き、何のために殺めたかわからんだろう？

国のために戦った、なら殺した時。生き残った時。

全てにおいて国を思うか？否だ。

幸せにならなければ何のために殺したんだ？

国のために？国は幸せを感じるか？

幸せの無い人間だけの国じゃ　つまらんだろう？」「

「師匠　」

「だから孫を早く見せてくれ。」

「結局そつちですか！？」

「家族は良いものだ。うん。」

それに、戦わなかった俺達が幸せになっていいのか？

とか言う考え方もあるんだ。
それじゃ俺達が浮かばれない。
何のために兵士が戦うか。

俺達が戦うことでこんな思いをしなくてもいい奴が居る。

そう思わないとやっていけないだろ？

戦う奴が幸せになれば、戦わない奴も安心できる。

だから、好いた女が居たなら告白しろ

相手も好いてくれるなら一緒になって幸せになれ。

そして孫を
「

「やっぱり最後はソコですか！！！！
途中、涙ぐんじやいましたよ！！」

「この前、知り合いの爺さんに自慢されてな。

孫とはどんなものか知ってみたいんだよ。」

「ふん。何を馬鹿な事を。

例え颯馬の子で在ろうとも北辰の孫にはなりませんよ?」

信玄ちゃんが言ってくる。

「そんな血の繋がりで言ったら。

一生孫の顔なんか見えないじゃないか。」

俺が呟くと何故か辺りが暗くなった。

「まあ良いけど餓鬼の名前に“呪羅忌諱” ドラキー

とか“虚驚螺” コドラ とかいう名前にするなよ?」

「しませんよ!」

「しないのか 当て字も考えてたのに。」

「師匠はやっぱり結婚とかしないんですか?」

「結婚ねえ。」

アレだな、何をしてでも手に入れたい女がいたら告白する。

そんな目をするな、それほどまでに惹かれる女がいたらだよ。

もしくは 俺が完膚泣きまでに勝てないほど強い女に求婚でもするよ。」

俺はケラケラ笑いながら言った。

天城っちも冗談だと思ったのか笑う。

「師匠より強いってそんなの居るわけ無いじゃないですか。」

「居たんだよこれが。」

「え？？」

「まっ、神を片手間に倒せるくらいじゃないとな。」

「ハハッ、師弟の絆か　羨ましいものだ。」

しかし、北辰。神を倒せる者など居るのか？」

謙信様が言ってくる。

兼続殿も何か言いたそうだ　神様を冒涇したからか？
いや、もしかして俺が裏切ると思われてる？

「あれ？言ってますでしたっけ？

櫻ちゃんもアレですよ？神です。」

「まて　まて、北辰。」

お前はなんだ　頭を打った訳じゃ無くてか？」

兼続殿が言ってくる。

「言いたいことは良くわかります。」

神なんてあやふやなモノですからね。」

「ついに ついに」

櫻ちゃんが小さく漏らす。

貧相な胸の前で拳を握り締め身体を震わせる。

「ついに私の出番がやってきました！」

私が神様だって事を知らしめる時が来ました！」

場所は移り中庭。

都合良く現れた櫻ちゃんに謙信様が本当に神様が疑ってる
と言ったらノリノリで今の状況になった。

中庭で子供達と洗濯物を干していた小雪ちゃんが
その姿をみて心配そうに溜め息をついていた。

「北辰。どんな状況だ？」

「ちーたん、お帰り。」

「雇い主の前では私の事を名前で呼んでいただろう。」

「うん。飽きた。」

前まで謙信様達の前ではちゃん付けや愛称はやめていたが。
もう、飽きた。

普通に呼んだ方が楽しいな。

「で、また信仰の無駄遣いか？」

「本人楽しそうだし良いんじゃないか？」

「アニキ！！焚火出来ました！」

ハチも帰ってきていて小寒いから火を焚いていた。

「
信仰って？」

今は宇佐美さんが起きていて焚火で暖まりながら聞く。

「人が神様を信仰してその思いが神力になって神様になるんですよ。

信仰が無いと神力がたりなくて、今みたいに現界出来なくなります。

現界するだけでも神力を少しずつ使いますからね。

信仰が無くなると忘れ去られるは同じで神様の死を意味するんですよ。

まあ、毘沙門天とかはまた少し違うんですけどね。」

櫻ちゃんの準備が出来るまで雑談をする。

信仰の集め方とかそんなことだ。

「謙信様も神氣がありますから。

現人神になれるかもしれませんよ。」

「北辰もなれるのではないか？」

「いやいや、神様嫌いだから遠慮します。」

「そうか。櫻は別なのか？」

「神になってまで生きたくないって事ですよ。」

別に人間でも神力とかは使えますしね。」

「おや？北辰は何か出来るのか？」

「いえ。俺に来る信仰は櫻ちゃんに流れてますしこの腕輪が吸収してますから。」

俺は昔、幼女に貰った腕輪を見せる。

原理はわからないけど神力を吸収してくれる。
凄く価値が有る物らしい。

前にチャクラム！とか言って投げ飛ばして遊んでたら
どっかの神が降臨なされて説教して帰っていった。
どうやら、腕輪をくれた幼女は神だったらしい。

「見ていてください！行きます！！」

櫻ちゃんが叫ぶ

「マジで逝ったらどうするよ」

「縁起でも無いこと言っな！」

「アニキ。大丈夫なんですか？」

あまりの心配のされようにお客様陣も心配気味だ。
いや、確実に不安な感じた。

「兄様！大丈夫なんですか！？」

「想像以上に張り切っているようだ。」

小雪ちゃんの声に返すと同時に庭にある池の水が
文字通り水柱となって天に伸びた。
お客様陣から軽く感嘆の声が聞こえる。

「嫌な予感しかない。」

「奇遇だな、私もだ。」

「俺もアニキと同じです。」

「櫻さん！今すぐ水を戻してください！」

俺達の無責任な呟きに小雪ちゃんが言う。
すると、櫻ちゃんは得意気に俺達を振り向いた。
同時に気も抜けたのか綺麗に整っていた水柱が
崩れて滝のように落下し始めた。

「むう！洗濯物が」

ピキッ

ピキピキピキッ

奇妙な音がして、文字通り

氷の巨木が出来上がった。

「小雪ちゃん凄いな。」

「また腕をあげたのか。」

「小雪姐さんスゴいです！」

「何で私を褒めてくれないんですかああああ！！？？」

「はあ　　櫻さん。」

「お話しがあります。」

「ひゃっ、あ、ああ、あの、わた、私は」

「小雪ちゃんは雪女なんですよ。」

「ちーたんも山姫ですから妖怪です。」

「そ、そうか。」

「師匠、櫻さんの叫び声が聞こえるけど」

「気のせいだ。」

ソレよりも事態の收拾を考えろ。

洗濯物濡らしたら怒られるぞ！」

「俺達がやるんですか!？」

「やるしかないだろう。」

その後、小雪ちゃんと櫻ちゃんの手によって氷の柱は無事、池に還った。

もちろん、氷で彫刻を創ってた俺はもとい、氷をなんとかしようとしていたハチと天城っちも小雪ちゃんによって説教を賜った。

「うん？もう帰るのか？」

「当たり前だ！お前のような得体の知れない輩に御館様が構う暇など無い!!」

「そりゃそうだ。」

よし天城。少し来い。」

天城っちは首を傾げながら近付いてくる。

俺は天城っちの頭を掴むと胸板まで寄せてきて、「三事呟いた。」

「じゃ、天城っち。死ぬなよ。」

「あの、師匠。」

天城っちが何か照れ臭そうに拳を突き出してきた。
俺はその意味に気付いて笑みを浮かべる。

「再び逢おう。」

「約束の地は。」

「この北辰の元に。」

俺は天城っちに拳をぶつける。

昔、とある事があったときにやった遊びだったのだが

「まさか、お前とやるとは思わなかったよ。」

今では俺達の験担ぎになっている。

恥ずかしい気もするが効果が在るらしいから今も続いている。

「つまり、お前も俺の家族になっちまったって事だ。

まあ、初めからだけだな。」

「ありがとうございます。」

「だから、死ぬなよ。」

復讐の後味は不味いんだ。」

「わかってます。」

師匠今日はありがとうございました！」

「ああ、じゃあな。

次は戦場かどつかでだな。」

俺はそう言って客間に引き返していく。
謙信様が待っているからだ。

「では、北辰。明日の軍義遅れないようにな。」

「はあ わかりました。」

あの後だが、謙信様も程なくして帰ると言っただけだが
何でだろう、何故か謙信様がニコニコしてる。
八ちに理由を聞いても、秘密です！
としか言わないし、他の家族もそうだ。

「とりあえず」

「師匠！俺が送ります！」

師匠は休んでいて下さい！」

「いや、しかし」

「兄様。八ちの言う通りです。」

「そうか　じゃあ、そうするよ。」

謙信様と兼続殿も頷いた。

そうして謙信様は帰っていった。

「あれ!？」

宇佐美さん!？宇佐美さん忘れてる!？

起きてください宇佐美さん!!あれ？

朝まで起きない気がするのは俺だけ!？」

次の日

俺は宇佐美さんをつれて出勤することになった。

同盟へ至る道（前書き）

え？武田との戦闘？

頭の中で補完してください。

最近、戦極姫ができない どうしよう。
変な伏線置いちゃった。

こんな作品ですがよろしくお願いします。

同盟へ至る道

「寒いな。」

俺は春日山城の縁側で呟いた。

遅い報告となるが先日雪が降った。

俺がウキウキして雪を眺めていたら兼続殿に“気色悪い”
と言われて落ち込むハプニングもあったが俺は元気だ。

「北辰！また貴様か！城に雪ダルマなんか造るな！」

「兼続殿！？」

先程、自室に戻った筈では！？

「貴様の行動などお見通しだ！」

マジかよ

中庭で雪ダルマ造っただけなのに。

俺は仕方なしに雪ダルマを完成させた。

「させるな！！」

「ああ！雪ダルマが！！」

兼続殿の手刀によって俺の努力が壊された。

「よし、俺も仕事するかな。」

「武田家が休戦と同盟を申し出てきた。

今川家が攻め込んできたそうだ。」

兼続殿が俺の背中に言ってくる。

休戦と同盟？

同盟まではいかなくても休戦はして欲しいと言っことか。

「お前は、こうなることがわかっていたのか？」

「予想ですけどね。」

武田家がこちらに気を取られている今、

狙う輩は少なくないが家の規模から考えて

今川は戦は巧いし欲もある、この機会を逃しはしませんでしょう。」

俺は兼続殿を見る。

「怖いですか？俺が。」

俺は兼続殿の答えに驚く事になる。

「怖くないと言えば嘘になるのだろうな。」

嘘がない この返しは初めてだ。

「それで良いです。」

結果として無用な戦は避けられましたね。

今川家が首を出さなくても敵対する限り潰すだけです。」

「だが、不思議と信頼出来るのだ。」

「はい？」

「お前は裏切らないと確信している。」

「はあ？　ありがとうございます？」

「謙信様も私も宇佐美殿も　裏切らないからな。」

「期待しています。」

ハチ！居るか！？」

俺が呼ぶと

遠くで襖が開いた音がして

ドタタタタツ！と音がした。

ハチが向かってきている途中兼続殿は言った。

謙信様は同盟を結ぶつもりだと。

「ハチ。」

「はい！アニキ！！」

「寝ている所悪いな。」

信玄ちゃんと天城つちに言伝を。

“今川家当主は強欲で傲慢だ”と。」

「わかりました！」

「よし、じゃ行つてこい。」

俺がハチの頭をくしゃくしゃと撫でると
ハチは満面の笑みを浮かべて走り去った。

「兼続殿。」

兼続殿に伝えなければならぬ言葉があります。」

「な、なんだ？」

兼続殿になら言つても問題ないだろう。

「俺は日ノ本を1つにすることが役目です。」

「それは私達も一緒だ。」

「いえ。貴女方はこれから日ノ本を守るって行くのが仕事です。」

「それはお前も同じだろう。」

「俺は日ノ本を1つにするだけです。」

兼続殿の顔色が変わる。

「まて、まて、北辰。

その言い方はまるで」

「俺の命はもう僅かなものです。」

「死期が近いような　へっ？」

「だから、秘密にしておいてください。
これは、誰も知らない事ですから。」

俺はそう言って自室に帰っていった。

「威厳か。」

威厳ね。威厳　　威厳なあ。」

俺は考える。

威厳とはなんぞや？

つい先程、城下町で子供達と遊んでいたら
娘と出会して、威厳がなんとたと説教された。

「威厳　　ねえ。」

キクゴロー先生。どう思う？」

「威敵？美味しいの？」

「だよなあ。」

とりあえず煙管でもくわえるよ。」

俺は荷袋から羅宇煙管を取り出してくわえる。

「喫煙は身体に悪いんじゃないの？」

「確かに、喫煙はスイッチを切り替える時にしかないさ。」

「スイッチ？？あの切り替えみたいな意味の？」

「お、英語話せる？」

「北辰が教えてくれたんじゃない。」

「当然だな。」

これから必要になるから覚えておいて損は無い。」

「北辰。居るか？」

「はい？」

この声は謙信様？

「居ますよ。」

俺は襖を開いた。

「煙管？北辰は喫煙者だったのか？」

「いえ、威厳が出るかなと思ひまして。
武田との話ですか？」

「うむ。」

「此処で宜しいので？」

「構わぬ。」

「寒いですしお茶を入れましょう。」

俺は部屋に案内？した。

しかし、何時見ても凜々しいなあ。

「謙信いらっしゃい。」

「うむ。キクゴロー、邪魔をする。」

俺はお茶と茶菓子を出す。

寒いと嫌だろうし部屋を暖めるか。

俺は畳と畳の隙間から薄い金属の板を指で起こす。
そして、金属の板を指で強く擦った。

「なんだこれは 暖かくなった？」

「寒い方がよろしかったですか？」

「いや、助かる。」

何はともあれ私も寒いのは苦手だ。」

謙信様が微笑む。

やばい、何でこんなにも優雅なんだろう。

コレが威厳と言うものか。

うん。無理だ。

育ちが違うから威厳なんていらなと思う。

俺に威厳は必要なし。

「武田と同盟を結ぼうと思う。」

「そうですか。」

死人が増えるより良い。

欲だけの奴との同盟なら反対するが、信玄ちゃんなら大丈夫だろう。

駄目だったら殺すまでだし。

「北辰に仲介役をして貰いたい。」

「はい？」

いや、待ってください、待ってくださいよ。」

俺は額に指を当てて考える。

仲介ってアレだろ？

俺達の中で盃交わす時の中央に居る奴だろ？

あれってかなり重要な役割じゃなかったか？

「キクゴロー。」

「僕に対してじゃないよ。」

「何で猫が仲介役なんかするのさ？」

俺は頭を抱える。

俺なんかがやったら敵を増やすだけだろ
そうか！小雪ちゃんがやるんだな！？
するとキクゴローが“違うと思うよ？”
とツツコミを入れてくる。

俺の心すら読むようになったか。

致し方ない　もがみんなに習うか。
いや、待て

「何で俺なんですか？」

「適任だと感じたからだ。」

「」

頭が痛い。

最近物忘れが酷くて鬱な時にさらに面倒な仕事が入っ
てきた。

つか、仲介役とかあんの！？
手打ちか！？手打ちなのか！？
大名家って極道なんだね。

でも極道は俺の分野だから出来るけど

「北辰。任侠の方じゃないから。」

キクゴローが教えてくれる。

違うのか　　うん、考えればわかるね。

「では、頼んだぞ。」

「え？あれ！？」

謙信様が去っていった。

あれ？もしかして　承諾しちゃった？
俺が固まっているとハチが帰ってきた。

「あつたかい！！アニキ！あつたかいです！！」

「　　ああ、暖房つかつたからな。」

「毎回思つんですけど、どうして板こするとあつたかくなるんですか？？」

「　　ああ、薄いヒビロカネを敷いていて

熱伝導で部屋全体を暖めているんだ。」

「アニキ？もしかしてお疲れですか？」

「礼儀作法　　一番嫌いな分野か。」

「アニキにも弱点あるんですね。」

「隠すのが上手いだけで弱点は多いさ。」

「一番嫌いなんだ　作法。」

兼続殿に言ったら怒られそうだなあ。

何でそんなことすらしらねえんだオラァ！みたいな感じで。
宇佐美さんに頼るか。

いや、宇佐美さん教えるには向かなさそうだ。
やはり、もがみんなに頼るか。

「ハチ。お前もそろそろ礼儀作法を　」

「アゝー！アゝー！聞こえない聞こえない！」

「　だよなあ。」

「　考えても仕方がない動くか。」

俺は襖を開いた。

「ひゃうー！！」

「　兼続殿？」

なんか兼続殿が襖を開けたら目の前に居た。

「急に開けるなー！！」

「あ、すみません。」

俺はスススッ　と襖を閉めた。

ふむ。

コレは、どうすれば良いんだ？

「御用改めである！」

とりあえず、もう一度開いた。
そうしたら何故か殴られた。

「兼続殿、作法についてご教授願えませんか？」

「北辰が作法　だ　と？」

久々に悲しくなった。

俺の評価が気になった時でもある。
しかし、習っておいた方が良いと判断する。

「ハチ　お前もだ。」

「カハッ」

「　　アニキ！？

アニキいいいい！！！！？？」

「真面目に覚える！！」

流石は兼続殿。

あまり人に教えるのは向いてないと見える。

こう　小難しい。

でも何とか覚えなきゃ駄目か。

「お前にもわからないことはあるのだな。」

「そりゃあ、初めての事ですから。」

兼続殿が知っていて助かりました。」

俺はそう言つて頭を下げる。

兼続殿には世話になつてばかりだ。
書簡から何やら万能な人だ。

「所で謙信様が捜していましたよ。」

「なに！？何故それを先に言わない！！」

兼続殿がドタタタタ！と部屋を飛び出した。

兼続殿が居なかったから先に俺の方に来たとか
謙信様が言つてたから今頃捜していると思つて言つておいた。

「兼続つて謙信の事好きなの？」

キクゴローが聞いてくる。

「さあ？好きなんじゃないか？」

「ええ！？そうなんですか！！？」

ハチが驚いて聞いてくる。

まったく、ハチは子供だな。

「そつえば、景家つて知ってる？」

景家も謙信の事好きだよな。」

「マジで！？」

景家とは

柿崎景家と言う無精で

神秘的な服を着た細目の美人さんだ。

武功も凄いらしく

美人さんだ。

「だから、初対面の時、俺と謙信様の関係を聞いてきたのか。

キクゴロー、物知りだな。」

因みに武器は薙刀みたいな武器を使う。

なんか薙刀の刃が石突きにもついている。

かなりの美人なのだが

いかんせん、動きが分かりにくい。

まあ、わかったと言うことは。

「流石は戦国の世の中。百合が多いな。」

同盟（前書き）

更新遅れて申し訳ありません！

携帯からISO4に変えていてゴタゴタしてしまいました。
慣れるまで更新が遅くなります。

ごめんなさいm（――）m

こんな駄文ですが、よろしくお願い致します。

同盟

「確かに。」

「確かに確認しました。」

俺が言つて、向かいに座る少女も言う。

少女とは虎綱春日ちゃんだ。

つまり今は上杉と武田の歴史的(?)な同盟が結ばれる日だ。ちなみに俺的には目の前の春日ちゃん眺めるのが今の仕事だ。

俺は互いの誓約の確認的な役割についている。

なんか結構、近代的な感じなんだと感心する。

てつきり、不可侵でたまに力かして？

みたいな口約束だと思っていたら

意外にも事細かに誓約がなされていた。

まあ、戦国の世の中とかいって

同盟破る奴も沢山居るからあんまり信用は出来ない。

信用出来ない？

何だろう。

何故、俺は信用出来ないと思った。

俺は普段、信用はするようにしている筈だ。

「

」

その普段は何時からだった。

まて 俺は何時からこの生き方をしている。

何故、こんなことをしている。

何故、他人を信じてなどいる。

何故、俺は生き延びている。

何故、この国で生きているのだ。

「 北辰。どうした？」

「 え？ あ、はい。アレです。」

なれないものはするもんじゃありませんね。」

そうだ。

俺は覚えている。

まだ 覚えている。

「 師匠。」

同盟ありがとうございます。」

天城が酒を注いでくる。

今は同盟の後の親睦会と言う名の宴だ。

「謙信様に言え天城。」

ソレに　お前等が利用できないのなら見捨てていた。」

俺は酒を飲み言う。

「師匠　何か怒ってます？」

「　いや、たまには真剣にやろうかと思って思ったんだよ天城
天城っち。」

「はあ。　そうですか。」

天城っちは要領を得ないようだけど、なんか頷いていた。

「あれ？アニキ？何処行くんですか？」

俺の斜め後ろに座っていたハチが立ち上がった俺に聞く。
ハチも隣に座れば良いのにアニキの隣なんて人前じゃ恐れ多いです！
とか言って後ろに待機しているのだ。

「ああ、少し外に出る。」

「俺も行きます。」

俺（キクゴロー付き）とハチが外に出ていく。

「どっかいしょつと。」

俺は廊下の端に座る。

一区切りだ。

俺は息をつく。

あの二人が組めば敗けはしないだろう。

でも まだ足りない。

後は、外国に対抗しうる手段を考えなければ。

眠い。

とてつもなく眠い。

今日の同盟はきつと大切なことだ。

歴史が変わることに失っていく自分。

自分をとるか目的（願い）をとるか。

答えならもう 決まっている。

「ハチ。少し寝る。部屋に運んでおいてくれ。」

俺はそう言って意識を夢のなかへ落とした。

「 此処は？ いや、来たことがある。」

地面は血液のような液体で埋まっている。

左右を見ても何も無い。

時折聴こえる音に耳をすませる 鼓動？

いや、胎音に似ている。

「やあ、北辰。また来たのかい？」

「 快適そうだな。 」

「 ???どうしたんだい？ 昏いよ？ 」

「 記憶があやふやになっている。
どうにか出来ないか？ 」

「 日記でもつけたらどう？ 覚えている間にさ。 」

日記か。

暇なときにでもつけておく事しよう。

「 そうする。 」

俺はとりあえず前を歩く。

理由なんか無いけどとりあえずだ。

「 憎たらしいな。 」

「 えっ？ 」

「 お前さ 弟に似てるよ。 ガリガリだしな。 」

「 そっか。 」

「 でも、アイツは弱かった。 」

周りに教えて貰えることが全てだったんだ。

人って怖いよな　色々ときさ。」

俺はじゃぶじゃぶと紅い液体を掻き分けて歩く。

「俺が今やってる事は意味の無い事かもしれない。

いずれ俺の願った姿からはかけ離れるだろう。

ソレは俺にも防げないしお前にも防げない。

やると言ったことはやる、けどな人間に希望託しても無駄だ。

期待しただけ裏切られるだけさ。」

「な、なにを。」

「人間なんてそんなものさ。

夢を見るのも終わりにしよう　もう、疲れた。」

昔は懐かしく心地良かった鼓動のような音も今では雑音にしか聞こえない。

「神武。

お前の過ちはただ一つ。
疑ったことだ。」

「　お前に　なにが　わかるっ！！」

「俺に出来ることはただ、真っ直ぐに走るだけ。」

後の事は勝手にやらせるさ、後の事まで踏みいるのは傲慢ってものだよ。」

俺は睨み付ける神武に手をヒラヒラと振って意識を落とした。目的は着々と進んでいる。

「
所で何で赤くなってるの？」

「いやいやいや！なんでもないですアニキ！！」

「そうか？」

所で部屋まで運んでくれたんだな。ありがと。」

「いや！こつちも役得　ハッ！？」

いえ！当然です！またお願いします！」

ハチよ。

何かおかしくないか？

キクゴローは寝てるし。

ハチが拳動不審なのは何時もの事か。

「ハチ。宴は楽しんだか？」

「???いえ、あの後、アニキ連れて部屋に戻ったままです。」

「そつか。悪いな氣を使わせて。」

今日は非番だし町にでも出るか？」

「アニキとですか!？」

「嫌か？」

「行きます!すぐ行きましょう!！」

ハチは俺の手を引いて先導するかのように町へ向う。
俺はソレに従ってついていくことにした。

町へ

「結構、活気があるんだな。」

「まだまだアニキの町には及ばないです!」

「俺の町?違うよ、皆の町だ。」

俺達が寄り集まって協力し合ってそして出来た居場所だ。

彼処は町と言うよりも住処じゃないか？」

「はい!!」

まあ、金稼ぎが目的の部外者も多少居るけどね。
社会から世間から外れた奴等が集まって出来た場所が俺の住む山だ。
端から見れば来る者拒まず去る者追わず
と見られているかも知れないが俺達は違う。
来る者は疑い去る者には祝福する。

「人はね。」

一人で生き独りで死ぬんだけど、やっぱり

心の何処かで人を求めているんだと思うよ。」

俺は八チの髪をわっしやわっしやと撫でて自分の胸板に八チの頭を寄せた。

「アニキ？」

「まったく、撫でやすい所にお前の頭があるな。」

お前まで、私を裏切らぬよな？

「なら俺はこれ以上背が伸びちゃ駄目ですね。」

「まったくだ、これ以上背が伸びたら抱き締めなきゃだめだな。」

「それはそれで。はっ！？俺は一体!？」

「ハチも最近、自分に正直だよねー。」

キクゴローがトコトコと歩いてきた。
俺とハチは首を傾げる。

なんのこっちゃ？

俺はキクゴローを掴んで肩の上に乗せる。

「ハチは女の子が着るような着物は着てみないのか？」

「お、俺がですか！？」

俺、背が高いですから良いです。」

そう、ハチは背が高いし

服装も男物の着物を着ているのだ。

不思議なことに俺のお古を所持している。
何やら勿体無いとのことだ。

「背が高いって俺より低いだろ。」

「アニキが高いだけっすよ！」

「そうか。」

じゃあ、また暇な時に用意しておくよ。」

「聞いてない！？」

元気なハチと共に俺は城に戻った。

「宇佐美さん？どうしました？」

「寒いよ。北辰の部屋、あつたかいつて聞いた。」

「あ、はい。今、暖めますね。」

俺は部屋の暖房を入れた。

前にも説明したが、床に薄いヒヒロカネを

敷き詰めてヒヒロカネの熱伝導を利用して畳の下から暖める方式で現代では無くなったヒヒロカネならではの暖房だ。

ヒヒロカネ？

ググってくれ。

あれ？何言ってるんだおれ！？

とりあえず、宇佐美さんは、ほう。っとしているから大丈夫だろう。寒いのが苦手なんだな宇佐美さん。

しかし、何時みてもなんてお胸様ほわほわしてる。

「北辰。調子悪いの？」

「え？普通ですけど？」

「なんていうか、違和感？」

疑問文？

確証を得られないけど確定してるみたいなの？ 意味不明

「昨日、慣れないことしたからですよ。」

俺は宇佐美さんに甘酒を出す。

「甘酒？冬なのに？」

「身体を暖める効果がありますからね。」

「ありがとう。」

「いえ。」

怖い。

前々から本質を見抜いてくるなと思っていただけ

「話して？」

「話す事なんてありませんよ。」

「……………むう」

宇佐美さんはジトーツ、と俺を見ってくる。
俺はその視線に苦笑いで応える。

「……………どうしても？」

「ええ、どうしてもです。」

しかし、何を食べればこんなにも素晴らしいお胸様が育つのだろうか??

私、北辰はこの疑問を永遠の謎として取っておこうと思う所存であり

「うわぁ……宇佐美さん!

どうやってたらそんなに大きくなるんですか!?!」

さて、逃げるか。

八チの言葉に俺は内心賞賛の言葉をおくるのだった。

閑話 北辰の周り（前書き）

すみません

非常に遅くなりました。

ISO4……打ちにくい

暖かく見守ってくれと嬉しいです

閑話 北辰の周り

八チ

場所は越後の春日山城、男物の着物を着て

黒い髪をオールバックに纏めている人物が立っていた。

男物の着物を着ているが彼は、彼女は女性である。

彼女は普段、布を被せた長い槍を保持しているのだが今は刀を持っている。

「……………」

十秒ほど間を置いた後、彼女は一步踏み出した。

リイイイイン

奇妙な音がして……………刀が中程から折れた。

「……………流石だな八チ。」

彼女の背中に凜とした声がかかる。

「覗き見は趣味が悪いと思う。」

彼女はその場で振り返り声の主、上杉謙信を見る。

この春日山城の主であり彼女の尊敬しアニキと呼ぶ者、北辰の雇い主だ。

しかし、彼女は謙信に仕えている訳ではないので敬語も必要最低限しか使わない。

ただ、実際は北辰にかまってもらえる時間が
すくなくなってしまうたので不愉快だけである。

「…………ふふ。そう言ってくれるな。」

謙信もそれが分かっているだけに苦笑しながら近寄っていく。

一方、そんな態度に謙信の右腕とも言える直江兼続からは会う度に、言葉遣いを直せと言われていたのだが

謙信本人が“ハチは正直者だからな、そのままが良いぞ”

と言うような事を得て重要な時でもない限り敬語は遣わない。

「見事なモノだ。」

謙信は折れて落ちた刀身を拾い上げながら言う。

ハチはその言葉に溜め息をついてから答えた。

「真の撃は余計な事を生んだら撃とは呼べない。」

「？……………それは？」

「アンタは刀を振るうんだろ？」

それは暗に言う挑発だ。

お前はそんなこともわからないのか？と言う。

「……………。」

「まっ、俺もわからないけど。」

と、彼女はあっけらかんと言いつつ放った。

ソレに対して謙信は呆れたように聞いた。

「誰の言葉なのだ？」

「俺の爺さんとアニキ。」

アニキが言うには斬ると言う【撃】以外に別の何かが起きたらだめなんだってさ。」

「……………ハチの祖父は達人なのだな。」

「だろ！？皆、爺さんの事を馬鹿にするけどアニキだけは認めてくれただ！」

彼女は、急に喜びを顕わにする。

謙信はその様子を見て微笑みながら言う。

「北辰とはその時仲良くなったのか？」

謙信は彼女がアニキと呼ぶ北辰とハチの関係を知りたくなり聞く。しかし、彼女は顔を少しだけ苦々しく変化させた。

「……………アニキは俺のことなんか見てなかった。」

「北辰がか？」

「初めて会った時、俺はアニキが正直恐ろしかった、あの時アニキは——」

「まで。北辰の事だぞ？」

謙信は彼女が言った意味が理解出来なかった。

謙信は数日前に北辰と新しく治めた地へ視察に出た時のことを思い出す。

思い出す所か謙信の目蓋にはその地で子供達と雪合戦をしている北辰の姿が浮かんでいた。

「何かの間違いではないのか？」

ましてや彼女が日頃、北辰を慕っている姿から見て信じられない事だ。

「そっか！アンタはあの時のアニキを知らないんだ！」

「あの時？すまぬ、話が掴みきれぬのだが。」

「ふっふっふっ。それは秘密だ。
羨ましいか！？」

彼女はしてやったりとでも言うように笑い出した。
それを見た謙信は少し考える仕草をして。

「そう言えば前に北辰が八子の事を褒めていたな。」

「え？」

彼女はピクツと反応した。

謙信はその姿に一瞬、犬を見た。

「稽古の途中だったな……邪魔をした。」

「ま、待て！いや待って下さい謙信さん！」

「何故、北辰が恐ろしかったのだ？」

「むう……………うう…うぐぐぐ」

。八ちは何かに頭を抱えながら身をよじった

「謙信は今まで生きてきた中で怖いのは何だった？」

彼女はとりあえずと言うように聞いた。

「考えた事もなかったな……………必要無いと言われる事だ。」

「俺は独りになることだった。」

俺は爺さんに剣を習ってて、それを親がよく思っでなくていつか見放されるかと思うと怖かった。」

「すると、今は違うのか？」

「……………アニキは揺らないから。」

向かってくるモノを総て独りで受けてもまるで関係が無いみたいに当然のように望む結果に結び付けていくから

……………ソレが恐かった……………俺達は無意味なんじゃないかって。

アニキの見てる世界の中で俺達の存在なんて映っていなかった。

その時に思ったんだ。」

――無価値とすら思われないことがこんなにも恐いものなんだって。

いてもいなくても関係無い。

本来ならそんなことは有り得ない。

例えば歩いている人の世目の前に人が立てば通行の邪魔になるから関係無いなんて事はない。

役に立つとか必要無いとか自分を見てもらえる以前に存在すら視えていない。

まるで、生きていることを否定されたようで。

「いるはずのないモノがいたって、いないも同然だろう。」

「――っ!?!」

「アニキに言った時に教えてもらった言葉だけど、アンタには言わなくてべきだと思う。」

「何を、だ。」

「…………アニキは今も独りなんだよ。」

彼女は寂しそうに言った。

普段からは考えもつかないような顔でつぶやいた。
。

「そ、そんなことは」

「無いなんて言えるか？」

本当に昔のアニキは絶対的だったんだよ。

どれだけ俺達を惹きつけたら気が済むんだって位、まるで麻薬だ。

所でアニキは何て言ってたんだ！？」

彼女は表情を急変させて顔を輝かせた

。

「あ、ああ。北辰は」

「いや！やっぱいい！言わなくていい！！」

「そ、そうか。」

所で北辰はどこに居るのだ？」

ピシリ

何故か空気が凍った気がした。

「……………アニキは……………知り合いとお出掛けっす」

謙信は彼女の顔が能面の如く無表情になり語尾が変化したことを見逃さなかった。

「どうしたのだ？まさか、北辰に何か」

謙信が言う言葉を遮って彼女の絶叫が木霊する。

「アニキのバカアアアア！！」

「つまり、北辰の家の警護に雇った達人の条件を満たすために北辰が動いているから構って貰えないと？」

「アニキのバカア」

「そうか、北辰がか。」

その時、謙信には胸に何ともいえないモヤモヤが芽生えていた。

北辰衆、旗を作る……前半は（前書き）

すみません、またおそくなつてしまいました。
駄文が嫌いな方はお戻り下さい。

温かい感想とか在りましたらよろしくお願いします。

北辰衆、旗を作る……前半は

「旗か……どうするかな。」

旗とは良く誰がどこに居るか分かりやすくするためのアレだ。
謙信様を作ったらどうだ？と言ってきたのだ。
旗を作れと言われても困るな。

「集合だ！」

「へい！！お前ら！！今すぐ土下座だ！」

「普通で良いから。」

「お前等！遊ぶ暇があるなら早く地べたに額を擦り付けろゴラァ！
！」

「それはデメエだ。お前の耳は節穴か。」

俺は北辰衆（上杉家からの呼び名）のまとめ役の頭を掴んで地面に叩き付けた。

北辰衆とは俺の住んでる家（山）の麓の村に住む奴らの事だ。

気づくと全員が二組に並び列を成していた。

いったい、誰が…来ると…言うの………か。

俺は動きを止める。

俺の仲間達の真ん中を悠々と歩く存在を見る。

その人が通る少し前に左右に並んだ野郎共が中腰になり頭を下げる。
どこぞの極道世界の組長がいらしたかのようだ。

俺は緩やかに腰の重心を落として頭を下げた。

「お疲れさまです！兼続の姉御！！」

悪ふざけが過ぎて殴られたでござる。

「貴様等は何をふざけているか！！」

「いや、姐 あね さん、けしてふざけていた訳では……」

勇気ある仲間が突貫した、しかし睨まれて萎んだ。
仲間の中の女の子が兼続殿に説明をする。

「旗の模様？」

しまった！

貴様にはまだ早いとか言われるのでは無かろうか？

「確かにあつた方がいいだろうな。

お前の家にある家紋などはどうだ？」

「家紋？北辰の家に家紋は無いんだが……そうだな。
兼続殿助言ありがとございます。」

「べ、別にこの程度で礼などいらん！」

そう俺に怒鳴ると身を翻して城内へ引き返して行く。

当然、北辰衆は花道を作り頭を下げた。

なんだ？いつから兼続殿はウチの奴等と仲良くなったんだ？？

「彼岸花に『業』の文字で作ろうか。」

布地は赤に金字の彼岸花の刺繍に黒い業の文字、縁は銀で作るか。

「よし、材料買ってこい。」

「北辰のダンナが造るんっすか？」

「とうぜんだろう。」

寧ろ誰が造るんだ。

他人に任せて『業』が『拷』とかになったらどうするんだ？

そんな風に思われてるのかと思って泣くぞ。

「アニキ！何で俺に頼ってくれなかったんですか！」

「おおぅ？すまん、見当たらなかったからさ。」

「呼ばれたら全部放棄して駆け付けます！」

「ダメだろそれは。」

「良いんです！」

何を根拠に言っているんだこのバカは。

買い出しぐらい誰でもいいだろ。

両手を握り締めて力説する八ちに俺は温かい視線を送りつつ旗を作り始めた。

「アニキ！お茶です！」

「北辰衆防壁！」

バチャアアア

「あぎゃあああ！！！」

「八チ、（余計な）気を使わなくていいから大人しくしてろ。」

「うう」

「何かあったのか？少し変だぞ？」

「ははーん」

お茶を頭からかぶった男が顎に手を当てて言う。

「つまり、ダンナが他の女に　　たわばっ」

「つまり、なんなんだ？」

ハチは男の脇腹を殴った。
すると男は“なんでもねえ”と答えた。
煮え切らない奴だ。

「ハチ。」

「はい！」

俺はハチの頭を乱暴に撫でた。

「お前はお前だよ。」

「はわわわわああああ！！！」

ハチはどこかに走り去っていった。
鍛錬か走り込みとは熱心だな。
俺は再び旗を作り始めた。

「俺はいつたい何をしているんだ……………」

旗を造ったと思ったら、服も造っていたんだぜ。
しかも女物だぜ？
幾ら布が余ったからって何してんだろ…………

「俺……飢えてんのかな。」

ハチは着れない大きさだな。

小雪ちゃんは……服のイメージに合わない。

ちーたんは……小さすぎるか（服が）

櫻ちゃんは……うん、まだ早い。

「そこの若いの。」

「若い？俺が？」

そうだ！俺まだ若い！

前は老けてるって言われたけど俺まだ若い！！

話し掛けてきた、渋い声に勇気づけられる。

「ありがとう。俺まだ若い。」

「何をいつとるんじゃ又シは。」

「んゝ。ところで何かご用ですか？」

一応、城の敷地内だから不用意な行動はお断りと言っことで。」

この仮にも戦国大名である上杉家の本拠地、春日山城

警備が行き届いている城内の庭で俺は振り向く。

この俺が普通に話してる白髪のおじいさん。

はい……人外の匂いがします。

「その着物を譲ってはくれぬか？」

金と言われた分だけ払おうぞ。」

「誰かに贈り物を？」

俺は聞く……………まさか、着るつもりか！？
サイズの無理だと思うが

「……………孫に。」

「よし！もってけ！」

俺は着物を投げ渡した。
おじいさんの眉が軽くなり上がる。

「幾らじゃ？」

「俺をなめてくれるなよ？
金を積んで手に入れた贈り物に想いは宿らんだろう。」

「つか、気に入らん相手だったら金を幾ら積まれても何も譲らない
ね。」

「……………そうか。」

では、貰っておこう。」

俺は背伸びをして一息つく。
孫かあ……………いいなあ。

「と、言ってもお孫さんが気に入るかは知らんぜ？」
するとおじいさんは腕を組んで鼻を鳴らした。

「儂を誰だと思っておる。

間違いなど無いわ！」

「はっはっはっ。

初対面だろうが。」

俺は手をひらひらと振って別れの挨拶として場を後にした。
まったく、誰だったんだあの爺さんは。
儂を誰だと思っておるって誰だよいたい。

「北辰ではないか、そのような所で油を売っておると兼続に怒られるぞ？」

さつきとは違う庭で空を眺めていたら綺麗な声がした。

「謙信様？その想像するに容易い例えは冷や汗が止まりません。」

「ほう、ならばその想像を現実のものとしてやろう。」

あれ？

何故か後方で声が聞こえたんだけど？

俺が振り向くと同時に俺の耳が引っ張られる。

「げっ！？兼続殿！？」

「はっはっはっ、こんな所で油を売るとは油断ならない奴だ。

よし、その“げっ！？”の真意も含めてたっぷり仕事の大切さを語り尽くそうではないか。」

兼続殿……………何時の間に!?

俺は耳を引つ張られ連行されながらも兼続殿に弁明を試みようとしたとき、耳に心地よい声が聞こえてきた。声の主はクスリと笑った後に言う。

「ふふつ、何時の間に兼続と北辰は仲良くなったのだ?」

「謙信様!! からかうのはやめて下さい!」

そう言つて兼続殿は手を、俺の耳を掴んだ指を強く引つ張った。

「耳があああ!!!」

「北辰! 騒ぐな!」

「理不尽!!!」

俺は耳を押さえて転がり回った。
凄く……………痛いです…

「兼続……………めっだよ?」

くっはー! 宇佐美さんだ!

この下から見える圧倒的な火力は兼続殿には無理だろうな。だって、最初からポテンシャルが違いすぎる!!

「宇佐美殿! 甘やかしてはいけません!」

「(胸が薄いと怒りやすくなるのかな)」

ギンッ!!

うぐっ……………今、とてつもない殺気と言つか威圧が……

「北辰、それは？」

宇佐美さんが俺の持つている旗を見た。
俺は旗を摘んで広げる。

「ほう、見事なモノだな。」

謙信様が言ってくる。

俺は再度、作り上げた旗を見る。

あれ？

一つじゃ意味無くないか？

いや、旗は俺の場所を示す目印だから……………ん？
旗とかかっこいいと思ってたけど、

恥ずかしくないか？

っ！か、目立ってどうする？

別に功績が立たい訳じゃないし。

「功績はいらないから旗は必要無いか……………」

「……………北辰。話がある、来い。」

急に兼続殿が声色を変えた。

真面目な声色だ、俺も真面目に対応する。

謙信様も何かを察したのか場を離れ、俺は兼続殿の部屋に案内された。

正面には兼続殿と一緒にいつてきた宇佐美さん。

俺はまっすぐに兼続殿を見据える。

いつたい、何が始まるのか。

「お前は今、どんな立場かわかっているのか？」

兼続殿に説教される立場っすか？

いかん、変な威圧に負けちまったぜ。

俺の立場？

最近では表立った動きもしてないから他の取り込んだ家臣（元は越後の将じゃない）

から穀潰しのように思われてるのかも。

実際、手柄を立ててないしなめられがちだな最近。

最近、陰口を聞いたことがあるな。

「たしか、無能とかそんな感じてしたか？」

すると兼続殿がうんうんと頷いて立ち上がった。

そしてニコニコと笑みを浮かべると俺の真横まで歩いてきて

「き・さ・ま、は！知っていながら何故行動しない！

男だろ！恥ずかしく無いのか！！！」

咄嗟に座っていた座布団で蹴りを防御。

女の子とはこうも暴力的でいいのだろうか？

年頃の女の子がすぐに怒鳴るなどいいのだろうか？

ここは嫌われても良いから俺が言っしか在るまい。
しかし、どう言ったものか、俺は考える。

「北辰、私はお前に言うことがある。」

「奇遇ですね。俺もです。」

おしとやかさと言うものを教えて差し上げよう。
俺は何故か変な使命感に駆り立てられていた。

北辰は話し合いを試みた（前書き）

更新します。

北辰は話し合いを試みた

「兼続殿。女の子とはむやみやたらと叫んだり暴力を振るわないものです。」

「北辰？今は私の話なんだが？」

額に怒りマーク（怒）をつけた兼続殿が言ってくる。
顔は笑っているのに笑っていない。

しかし、俺は負けるわけには行かない！

「いくら容姿端麗な兼続殿でも暴力は駄目です。」

兼続殿の叔父も心配していましたよ？このままでは婚姻しても

縁切寺に駆け込まれるのではないかと。（三日で）

しかし、縁切寺ってそもそも女の子用だし

あれ？時代的に存在して良いのか？

そう思いながら兼続殿を見る。

「わ、わわわ、私がよよ容姿たたた端麗だと！？」

き、貴様！ふざけるのも大概に
父上と？貴様！
いや、待て！何故北辰が叔

物凄い顔が紅い……風邪か？

因みに兼続殿の叔父上とはこの前、町中で偶然とか
言いながら絡まれ最終的に兼続殿の将来について語られた。

俺も小雪ちゃんの将来を相談したけどね！

二人して“（小雪ちゃん）兼続は（誰にも）やらんぞ！！”
の叫びと共に閉幕した、未だに疑問なのは
叫んだ際、何故に叔父上は俺を見ながら言ったのか。

「ま、まあいい！今はそれどころではない！」

「なんと。既に結婚相手を見つけていたのか。」

しかし、次の瞬間には殴られていた。

「このままではお前の立場が悪くなるだぞ？」

「俺の立場が良かった事など一度もありませんよ。」

「……北辰は民から何て言われてるか知ってる？」

「宇佐美さん？いえ、知りませんけど。」

宇佐美さんがなんか怒ってる？

これは由々しき事態だな……宇佐美さんが怒るなんて。

それ以前に何故に殴られた？

民から何て思われてるかって？

知らん、知らん。

これで悪口言われてたら目から汗が流れ出てしまつかもしれない。
いや、出す。

「見当もつきませんね。」

「……農神。」

農神？

いきなり何を言っただこの人は？

農神って田の神の事だろ？

田の神は、日本　の農耕民の間で、稲作　の豊凶を見守り、あるいは、

稲作の豊穰をもたらすと信じられてきた　神　である。農神、百姓神　と呼ばれることもある。

ん？

どこから引つ張ってきたような説明だったな。

「はあ？つまり、どういう事ですか？」

「北辰は農神って慕われてるの。」

空を見れば天を読み、土を見れば地を知る。

戦を治めるは越後の龍、国を耕すは　　」

「ちよっ！待って下さい……誰のことですか？」

「？」

宇佐美さんは俺をジーッと見つめている。

兼続殿を見たが溜め息をついてきた。

「悔しいがお前が来て国が、いや、越後が飛躍的に豊かになったのだ。」

豊かに？

そんな大きな事はしてないはずだけど。

作物の収穫量も地を耕しただけだから増えてないはずだし。

「ちゃんと民は見ているのだ。」

道を整備し、水路を町の各所に通す。

山には水を貯めておく溜め池を作っていたそうだな。

我々が思う豊かな国と民が生きる豊かな国は違うのだ。」

私も初めて気づかされたがな。

と、兼続殿は付け加えた。

「それに……北辰は武田との戦いの功績、受け取らなかったんですよ？」

「そうだ！何故、謙信様の御厚意を無碍にしたのだ貴様は！」

兼続殿が俺の胸ぐらを掴んで高速で揺さぶる。

確かに武田の軍を破ったと噂が流れ投降する豪族が増えたのも確かだ。

あの時は謙信様からの貰える禄（手当て）を断ったんだっただ。

「俺は誰一人の首級も挙げていませんから。」

「北辰はね、謙信様の次に……ううん……もしかしたら

場所によっては謙信様より好かれてるの。」

宇佐美さんがやはりゆったりした口調で言ってくる。
それが首級と何の関係が在るのだろう。

「それに北辰は賊の退治とか町の警邏ばかりして功績に残らないようにしてるでしょ？」

「つか、俺が謙信様より好かれてる？」

「そんなバカな……あの謙信様だぞ？」

「凛々しいし美人だしな。」

「それにあの微笑は卑怯だと思う。」

「誰もを惹き付ける魅力と云うかついて行きたくなる力があるんだよな。」

「それに柔いのに芯はしっかりとしている。」

「どうしたの？」

「いえ、ぼーっとしてました。」

「……どうして功績をあげないの？」

「北辰なら武功も挙げられる……でしょ？」

「それは兼続殿が前に調子に乗るなど言ってきたからですよ。」

「あれ？」

「変な行動をするなだったかな？」

「とりあえず越後に来て間もない頃に忠告されたからだ。」

「わ、私のせいなのか！？」

「いえ、純粹に面倒だったからです。」

でも、実際はまだその時じゃ無かったから。

まだ戦力が整わないうちに名を挙げても無駄だからだ。

しかし、何故兼続殿はがつくりと肩を落としているのだろうか？

妙に疲れたような顔をしている気がするんだが。

風邪が？それはいかな。

兼続殿が抜けては大変な事になる。

「兼続殿？

身体の調子が思わしくないならお休みになる方が

」

「お・ま・え・のせいだああ！！」

「アバスッ！」

俺は兼続殿に蹴り飛ばされて部屋を追い出された。

むう、あの暴力の速さ……達人級だな。

兼続殿の叔父よ……俺では役不足のようだ。

すると続いて宇佐美さんも兼続殿の部屋から出てきた。

「……北辰、兼続は……心配してるん、だよ？」

「宇佐美さん……何故に疑問系なんでしょうか？」

「……………ずるい。」

「はい？」

宇佐美さんのつぶやきに俺は首を傾げる。

宇佐美さんは女性の中では背が高い方だ。

しかし、俺よりは背が低いため必然的に俺の顔を覗き込むと上目遣いになり、俺は兼続殿程では無いが少し首を下げる。すると、視界に納まってしまふんだよ……お胸様が！！

宇佐美さんの爆乳が。

宇佐美さんの

宇佐美さん

眼福で御座った！

しかし、何故宇佐美さんは俺をジトーツと睨んでいるのだろうか。

「……ずるい。」

「宇佐美さん？何がですか！？」

「……………知らない。」

「はぁ？なら仕方無　いゝゝ！！！」

宇佐美さんが俺の足の爪先を踏みつけた。

コレは痛い！

箆笥の角に小指をぶつけるくらい痛い！

否！それ以上に痛い！

コレがドメスティックバイオレンスと言う奴か。

宇佐美さんは何故かそっぽを向いて怒っているし。

ウサミミのせいで怖くないけど。

あれ？ウサミミが普通になってる……………

俺は宇佐美さんをジーツと見る。

整った容姿に桜色の長い髪に同じ色のウサミミ。

ウサミミ

ウサミミ

ウサミミ

違和感がない。

人の頭にウサミミがあると言っのに違和感が無い。

違和感仕事しろ

「……………何？」

「可愛いなと。」

しまった。

つい答えてしまった。

宇佐美さんなんて今、耳がピンと天に向かって伸びた。
すげえ、あのウサミミすげえ。

ついでに言うがウサミミがピンと伸びると同時に
宇佐美さんも背筋を伸ばしたせいでお胸様が揺れた。
眼福で御座った クワツ 心の目

「……………本当？」

「同然でしょう。」

「なら……………いいよ。」

???何が良いのだろうか？

「…許してあげる。」

「ありがとうございます。でも、何で怒ってたんですか？」

「……………兼続ばかり褒めるから。」

「はい？」

「……………浮気は、だめ…だよ。」

「そうですね。」

駄目だと思いますよ。」

「北辰の馬鹿。」

宇佐美さんは小さく言うとなスタスタと何処かへ行ってしまった。
まさか、また怒らせたか？

おいおい、何をミスったんだ俺は。

「所でキクゴロー、久し振りだな。」

俺は廊下をトコトコと歩いてきた猫に話しかける。

俺は頭がおかしくなった訳ではない、この猫は知猫と言って

「昨日まで颯馬の所に居たんだよ、忘れたの？」

御覧の通り人語を話す。

「こっちには兼続殿の部屋しか無いぞ。」

「僕は兼続に呼ばれてるの。」

なん……だと…？

キクゴローよ…晩飯が猫肉では無いことを祈っているぞ。
俺はキクゴローに哀れな目を向けた。

「僕はそんな考えしか浮かばない北辰を哀れに思っよ。」

馬鹿な、心を読まれただど！？

キクゴローがそんな俺を無視して兼続殿の部屋の襖を前足で器用に開けると入っていった。

器用な奴だ。

俺はそう思って自室に引き返して行った。

謙信様大好き同盟員（前書き）

来月になると社会人になるので更新が遅くなることを断っておきます。

感想や要望ありましたらよろしくお願いします

謙信様大好き同盟員

「何してるんですか景家さん。」

俺は目の前で打ちひしがれている人物を見る。

名前は柿崎景家

薄紫色の長い髪は所々で癖を持って跳ねていて尚綺麗で、

その髪には金色をあしらった前立てのような髪飾りを保持している。

そして白と黒で装飾されたその服は、どこか巫女服にも似ていて神秘的だ。

目は元来から細いのだろう。

閉じられていて上手く表情が読み取れない。

巫女服と言えば中陸奥の伊達家に鎮座する片倉景綱

彼女は強かった……巫女服を常備し長い紫掛かった長髪をポニーテールにして

良い声をしていて美人だったのだが、百合。

伊達家当主の伊達正宗に対して百合。

美人×美人だったからよいと思う。

まあ、なんか生意気だったから尻撫でたら殺されかけた。

しかし尻を撫でて楽しむ痴漢が居ると聞いたが楽しいのか？

尻を撫でて楽しむ 問題はその後ではないのか？

尻を撫でて楽しむなら俺は女の子のふとももを見る

そしてスカートの下の脚線美を堪能する！

論点がずれたな。

戦国時代は百合が多い件についてだったか。

「紙が紙が足りないのです！

ああ！あの麗しの謙信様のお姿を描く紙が！」

そう、景家さんは謙信様に陶醉している。

前に部屋で俺は景家さんが部屋で謙信様の似顔絵を描いている所に遭遇した。

ついでに言えば滅茶苦茶上手かった。

もう絵師として働けるよと思えるほど上手かった。

アニメーションから御真影まで何でもござれ。

それを褒めたら

うん、いろいろあった。

組み伏せられて明け方まで絵を鑑賞させられた。

まあ背中に胸の感触が伝わりヘヴンだったけどね。

俺は景家さんの人見知りが出ないし話しやすい子だそうですよ。

「謙信様大好き同盟員の仲間じゃないですか！」

気づいたら俺は謙信様大好き同盟員になっていた。

二人目の。

俺はお茶を飲み、荷袋に手を入れる。

そして手紙用の紙を取り出す。

このご世代、紙はかなり貴重だ。

不純物の少ない綺麗な紙なら尚更。

美人だからあげちゃうけどね。

「流石は北辰です！忘れてしまっ前に書かねば！」

そう言う俺と景家さんの間に置いていた卓袱台をひっくり返した。

お茶が宙を舞うが景家さんは畳に紙を置き

何故か俺の部屋にある景家さん専用の筆で絵を描き始めた。

俺は湯飲みの中に飛び散るお茶を空中で戻して飲む。

この人も周りから問者の疑いをかけられてるんだよな。

景家さんは人見知りで知らない相手には基本無関心だ。

行動も部屋に籠もって絵を描いたり（部屋で何か呟く）

買ってきた高級和紙（怪しい包み）を抱えていたりと疑われやすい。何故に俺の部屋で絵を描き始める？

前に俺は疑われてるから近付いたら迷惑かかるって言ったのに。景家さんも美人なんだから人見知りとか勿体無い。

でも、ちよくちよく俺に質問してくるのは何でだろう。

質問の内容に脈絡が無いから読めないし。

「景家さん。」

「何ですか？今は絵を描くのに忙し

」

「謙信様に褒められたいと思いませんか？」

ぐちゃ！

筆がべちゃつとなった。

「いかなさいますか？」

答えは初めから分かりきっている。

ふふふふ、なんか俺って今、軍師っぽい。

つか、俺の悪口は良いけど北辰の悪口は許せん。

兼続殿には気にしてないように装ってはいたがそろそろ限界だ。

北辰衆も……自分で北辰衆言うのも嫌だが北辰衆も怒りが既に溜まりきっている。

そんな奴等に俺が手は出すなと言った手前、俺も手が出せない。

ハチに關しては我慢をし過ぎたのか、うふふふ、とか笑い出して薄気味悪かった。

普段の俺なら既に暴れてるがもう我慢の限界を越えてる。

俺が殺らなくても誰かが殺る。

もともと、“北辰”を馬鹿にされて黙っていられるほど大人じゃな

い。

「手を出す相手を間違えたな、山内家。」

謀叛を企てているのは山内家。

北条家に追われ上杉家を頼ってきた家柄で当主は家柄に自信をもった男だった。

故に、誇るべき家を失い守るべき地を無くした者は

「北辰、続きを話さない！」

「うおっ！」

気づいたら目と鼻の先に景家さんが存在していた。
しんみりし過ぎてたか、山内家当主はもういない。
表向きでは生きてはいるがもう、いない。

「普段慌てない貴方が慌てるとは……まさかソレほどの策を！？」

近い！すごく近い！

雰囲気が雰囲気だから怖い！

こつ、不思議な人だから。

気配も薄いし……猫みたいな人だ。

俺は景家さんに本と紙を渡す。

「これは前に借りてた本です。詳細は“紙”に書いておきました。」

「なるほど！では私はコレで失礼しますよ！」

謙信様に褒められた際の妄想 予行をしなくては！」

そう言つて景家さんは部屋を出て行つた。
もちろん、渡した本と手紙、そして譲つた紙を持つて。

補足

上杉家 越後・越中・北信濃・飛騨・南出羽（一部）・上野（一部）
、平定

武田家 甲斐・南信濃・駿河（一部）・遠江（一部）、平定

北条家 相模・上野（一部）・武蔵・伊豆、平定

景家さんが帰つた後

俺は天井を見た。

人の気配はしない。

俺は座布団を二つに折つて枕にすると寝つ転がる。

「アニキ？起きて下さいアニキ。」

「……………」

俺は俺の身体を揺する影を目を開いて見た。

ハチだ。

髪をオールバックにして男物の着物を着ている。

でも普通にこうしてみれば男前な女の子なんだよなあ。

町の奴等（主に女子）からの人気は絶大らしいし。

俺が目を開けたのに気付いたのかハチは嬉しそうに顔を綻ばせた。

犬だ。

何でだろう？犬に見える。

「ひゃわ！はひひ？」

腕を持ち上げて八チの頬を引っ張ってみた。

「寝てたみたいだ。」

「堪能させて げふん、げふん。

珍しいですね、アニキが熟睡するなんて。」

「俺も老いたな。」

そろそろ引退も視野に入れねばならんか。

「そんなんだから老けてるって言われるんですよ？」

「もう老けてていいや。諦めた。」

俺は寝返りを打った。

引退したらどうしようかな。

一日中、空でも眺めて過ごすか。

小雪ちゃんに蹴られるけど。

『兄様！縁側で寝転ばないで下さい！掃除の邪魔です！』

おや、幻聴が聞こえた。

俺もそろそろ歳のような。

「アニキ、今、小雪さんの声が聞こえた気が。」

「気のせい気のせい。」

「アニキ？身体が震えてますよ？」

「気のせい気のせい、洗濯物入れ忘れたのもな！」

「……………素直に謝りましょうね。」

「ああ。」

また寝返りを打ち視線を天井に移す。

以前、洗濯物を入れ忘れた時はどうだったかな。

おや、思い出せない。

なんだろう、寒気がしてきた。

まあ、洗濯物入れ忘れた位なら大丈夫だろう。

「さて、何かあったか？」

俺は八ちに起こした理由を聞いた。

「いえ、起きなかったから心配になって。」

「ああ、そうだな。歳だよ俺も。」

俺も歳かなあ。

引退もやっぱり考えるか。

山内憲政、悪い奴では無かった。
いや、良い奴だった。
生まれる家を間違わなければ。

「弔いくらいはあげてやろう。」

「アニキ？なんか言いましたか？」

「やりきれないなあ、ってな。
今日の夕餉は何だろ」

そう呟くとハチは“見てきます”と言って部屋を出て行った。
俺は座り直して背筋を伸ばす。

「北辰！！」

「ぬおっ！？兼続殿！？」

気配がまったく掴めなかった！

それよりも兼続殿の襖を開ける速度が半端ではない。

良かった！身体を起こしていて良かった！

もし寝っ転がっていたら兼続殿からの説教タイム突入だった！
よく起こしてくれたハチ！！

「して、用向きは？」

「お前……………寝起きだろう？」

「ははは、ご冗談を。」

「お前が用向きなんて言葉を使うときは大抵寝起きだ。」

兼続殿の俺に対する評価を知りたい。

俺は軽く頭を押さえて唸る。

「では、本日はどのような趣で参られつかさまった。」

「意味がわからん。」

俺も自分で何を言っているかわからない。

俺は兼続殿にお茶を淹れた。

「今日はどうしました？」

「そんなことより！キクゴローに聞いたぞ！！」

そんなこと？どんなことだ！？

俺が首を傾げている間に兼続殿は俺の胸ぐらを掴んだ。

「お前が何を隠し企んでいるかキクゴローに聞いた。」

兼続殿は俺を睨み付けながら呟く。

馬鹿な……俺が中庭の一部で人參を作り

宇佐美さんを釣ると言う崇高な作戦がバレたと言うのか？

ならば今、俺の人參畑はどうなっているんだ？

俺は冷や汗を流しながら中庭の方向を見続けるのだった。

来たる上泉信綱、戻る北辰（前書き）

なんかシリアスになっちゃいました
すみません

来たる上泉信綱、戻る北辰

「例えば戦と聞いたときなにを連想する？」

俺は呟く。

そして続けて言う。

「殺し合い、略奪、当たり前のように犠牲が生まれる。

新しい土地を切り開くとき、当たり前のように犠牲者が産まれる。
俺はわからない。

戦の時、開拓する時、犠牲があるのはわかる。

だが、何故。

何故。

初めから犠牲が含まれているんだ
？」

「北辰？何を言って

」

「何故、計画の中に犠牲が内包されるんだ。

何故、犠牲が含まれる。

何故、犠牲が当たり前になる。

何故、始まる前から？

何故、当たり前のように受け止める？」

「北辰！」

だんっ！！

机が叩かれて茶が宙を舞う。

俺は机を叩いた兼続殿を見る。

「答えよう。あの日、俺は知っていたよ。

彼があの日、俺の元を離れたときに死ぬことは。」

正確には、兼続殿の後ろの通路を。

「教えてくれ、俺は人殺しだ。

友を見捨て己の利を優先した人殺しだ。

しかし、知らないという現実にはさらされた者は人殺しではないのか？

なあ、上泉信綱。」

そう、言うと同時に兼続殿を掴んでやや乱暴に引っ張る。

一閃

既に暗くなり始めた中、刃が煌めいた。

俺の部屋と通路を隔てる障子が無くなっていた。

正確には、斬り落とされていた。

その先に見える男は刀を抜いていた。

黒い羽織りに藍色の籠手。

髪は長く纏めて後ろに上げただけのようで数束前にも垂れている。

額には横風の傷が走り、深い皺が刻まれている。

上泉信綱

この戦国時代で剣聖と唄われている男だ。

圧倒的なまでの威圧感。

圧倒的なまでの技量。

俺は兼続殿を離して机を掴むとそのままぶん投げた。

「語り合おう。」

死ぬと分かっている止めなかった俺は人殺しだろう。

「お前も人殺しだろう！」

投げられた机に追い付いて机を更に殴る。

加速した机は上泉信綱に当たることなく飛んでいく。

上泉信綱、上泉は中庭に立っていた。

立っているだけだが、巨大に見える。

俺は気負った様子もなく中庭まで歩いていく。

「長野業正はどうした？」

山内家に仕えていた武将の名を上げる。

「寝ておる。」

「そうか。」

俺は距離を開けて立つ。

俺も今日は刀を腰に差している。

まあ、上泉には勝てる気がしないがな。
だからこそ

「何のまねだ？」

上泉はまったく表情を変化させずに言う。

俺としてはこの状況が嫌だと思う。

刀を投げ捨てながら状況を整理しよう。

俺 武功も功績も無いくせに謙信様の近くにいる 新しく入ってきた武将が俺を敵対視

山内家参入、家柄が家柄だっただけに待遇が悪くなり反発が大きい。 山内家当主、山内憲政は謀叛を拒否

山内憲政謀殺 不満のある武将と手を組み俺を殺そうと企む そうだ上杉家に乗っ取ろう（敵） よし、ついでに膿みを取り除こう（俺）

山内憲政が謀殺される晩、山内憲政は俺の前に現れていた。そして膿みを取り除きたいがために俺は庇わなかったのだ。そして上泉信綱が此処に来た。

山内憲政との絆もあったのだろう。

「憲政に情がわいたか？」

俺は懷から小刀を二本取りだす。

右手は普通に握り、左手は逆手に持ち真半身に立つ。

「己^{オレ}が来た理由はそのようなモノではない。」

「……………意味がわからんな。」

山内憲政の敵討ちで無いならば何が目的だ。

「ただ、お前。北辰を討つそれだけだ。」

何故、わざわざ上杉家の本拠地でもある春日山城で仕掛けてきた？
そう、まるで

謀叛を起こしたのはお前だと思わせるように。

「長野業正は、眠らせてきたのか」

上泉にしか聞こえないような声で話し掛ける。
しかし、上泉信綱は応えない。

「……引きずっているのは、お前だ。」

ククツと喉から笑い声が漏れてしまう。

そのとおりだ、的確すぎて笑えてしまう。

山内憲政と言う犠牲を出したのも

北辰の家が馬鹿にされたのも

必死に戦う謙信様や上杉家から謀叛を起こす輩を黙認したのも

すべて俺が悪い

「……あいにく、小さな男なんだよ。」

目で話し掛ける“何が狙いだ”と。

しかし、返ってきたのは闘気。

俺は警戒しながら裸足になる。

ジャッ！

中庭の砂利が音を立てる。

立ち位置が一瞬で入れ替わる。

そして先程まで上泉が居た場所、つまり俺が居る場所に血が数滴垂れた。

上泉信綱が此処に居ると言うことは俺達と上杉家の目を惹くために此処に居るのだろう。

だが、城下町や近辺には既に景家さん（柿崎景家）の兵が張っている。

上泉は知っている筈だが……腕痛いし。

北条が攻め込んできても間に合うまい。

逆にこのタイミングで動いては全てが狂う。全てが狂う？

「犠牲無き事に重さは宿るか？」

上泉信綱が静かに答える。

俺が部屋で呟いた言葉の答えだろう。

確かにその通りだ、総ての基本でもある。

苦勞して手に入れた物を大切にするように

下に付く者に給金を与え従えるように

命を賭け新たな生活を掴み取るように

犠牲（対価）無き事（結果）に重さ（心）は宿らない

犠牲が無い戦争を誰が止める？

犠牲無く手に入れた平和を誰が知る？

犠牲無く手に入れた生活の大切さを誰が知る？

本能的に人は不安なのだ……犠牲が無い世界が無償の行為が。

だって、怖いでしょ？
なんの苦勞も犠牲も知らずに生きるの。

とある女性の言葉だ。

当時はまったく理解できなかった。

だからって、自分から死地に飛び込むあの人（女性）が理解できなかった。

世の中の何人が気付く？

世の中の何人が自己犠牲に生きることが出来る？

世の中の何人が人間の歪みに気付くんだ？

誰かを、何かを、犠牲にしなければ安心出来ない種族。

「……………甘いのは、俺か。」

俺だって怖い、今より未来に産まれ

過去に戻され、歴史を変え、記憶を失っていく。

何で俺なのか、俺でなくては駄目なのか？

そんな事ばかり考える弱虫だ。

今更、気付かされた。

怖い、今まで犠牲にしてきたモノを忘れる事が。

歴史を変える為、動いた度に過去が失われていくことが。

大切な人達を忘れることが。

だから、逃げていた。

俺の幸せを追ってしまった。

家族を増やして理由を作った。
逃げて良い、そんな自己暗示をしていた。
前に天城に言った言葉がある。
幸せになれ。

あの言葉も俺は自分に言い聞かせていただけなのだから。
俺は戻るには深く入り込みすぎた。
昔に戻ろう。

恩人の願いを叶えるのに俺はいらない。
昔のように、ただ、結果だけを追い求めよう。
何故、俺は変わってしまったんだろう。

昔の俺なら迷わず動いて自分を犠牲にしても結果を求めた。
いつから、結果だけで満足出来なくなった？
けど、そんなことはもう関係無い。
無視すればいいだけだ。

「訂正する。」

犠牲は当たり前だ、犠牲が内包されない現実など有りはしない。

もう、矛盾を考えるのは止めにする。」

俺は、砂利を蹴り飛ばす。

同時に上泉の方へ俺は走り出す、上泉は砂利を

無視した

一閃

またも立ち位置が変わる。

また、血が流れた。

俺も斬られたが上泉にも、微かに届いた。

「北辰！退け！！」

兼続殿が言ってくる。

俺も本当は理解している。

何故、俺が変わってしまったのか。

変わってしまった原因はなんなのか。

俺は小刀を構え直し上泉と向き合う。

何故か兼続殿が驚いた表情をしている。

上泉は山内家もろとも消えるつもりだろう。

山内憲政は上泉信綱の謀叛により殺された形として。

剣聖と唄われている上泉信綱に殺されたならば仕方がない。

名も知らぬ者に殺されるより名誉は守られるだろう。

そして、山内憲政を守るため戦い忠誠心を見せた長野業正が家を再興させる。

上泉信綱の考えはこんな感じか。

俺の役目は上泉を討ち密かに進行してきている北条を討つ。

山内家は一人残らず討たねば山内憲政が謀殺されたと知られてしまう。

「すべては、息子（憲政）や娘（業正）の為か。」

上泉信綱は不器用だが山内憲政と長野業正を我が子のように思っていた。

剣に魅入られ剣に生きそして人を知った。

初めて知った人の温かさは麻薬のようだったのだろう。

「俺も同じだよ。」

同じ立場なら同じ事をした。」

我が子を守ってやれなかった己を悔いながら生きることは出来ない。
何か目的が無ければ生きることなど考えない。

俺だってやるべき事が無ければ生きてなどいない。

たとえ長野業正が生きていようと一人を立てる以上生きる理由にはならない。

人の生きる道に口を挟んではならないから。

近付かない癖に誰よりも大切に想う。

どれか一つが欠けでもって嫌だと思ふ理不尽。

せめてもの勝手な償いで山内憲政の名誉を守って逝くつもりだろう。

山内憲政が死ぬ原因となった北条を潰すための種を蒔き

長野業正が立ち上がるための道を作り上げ

自身は謀叛の主犯として山内憲政を殺した奴らを炙り出し

俺が全部、改修していく。

そして、上泉が俺に打ってこない理由。

完全に謀叛を起こしたという証明のため役者を待っているのだ。

この城の城主、上杉家の当主、上杉謙信を。

始まる演劇の前に（前書き）

すみません

会社の研修中が軟禁過ぎて暇が無く遅くなってしまいました。
社会人でありながら書き続ける皆さんは偉大です。

クオリティが低くてすみません。

感想ありがとうございます！

慣れるまで遅くなりますがよろしくお願い致します

始まる演劇の前に

兼続 side

私は目の前に座る猫の言葉を待った。

この言葉から見れば私は変人だろう。

しかし、目の前の猫は文字通り“話す”のだ。

名は“キクゴロー” 知猫と言う種族らしい。

そして最近、私はキクゴローを部屋に呼んでいた。

理由は目の前のキクゴローの飼い主でもあり

上杉家の、上杉謙信の臣下でもある”北辰”についてだ。

半年ほど前に謙信様と宇佐美殿と共に出会ったのが最初だ。

まだ越後が多数に別れ混乱していた時、謙信様が言ったのだ

“賢者と唄われる御仁に逢いに行くついて参れ。”

そうして出会ったのが北辰だ。

最初の印象は変人だ。

麓の村人の評価は揃って同じだった“北辰は北辰”

意味がわからなかったが姿を見せて妹と思われる少女に締め上げら

れていた。

よく見ればまだ若い感じがしたが雰囲気は達観した感じがした。

そこで少しあり北辰は謙信様の下に付くことになった。

八子と言う少女は何故か北辰に陶醉していたが

それはこの地全体で言えることだった。

北辰の娘達は誰も信じないような目をしながらも北辰だけは信頼し

ていた。

親から売られるという目を塞ぎたくなるような事があってもだ。

そこには何の建前もない、純粋な信頼関係だった。

初めて私はここまで濁りのない信頼関係を見た。

あの地には生気に充ちていたのだ。

話すと長くなるから今は省くが最近、気になることがあった。

“ 北辰が謀叛を企てている ”

そんな噂が城や町を駆け巡ったのだ。

私はその噂に疑問を感じた。

まず、北辰は既に上杉家の軍師として認められている。

軍師が謀叛等とは国として亀裂が生まれる。

例えばそれが噂であつてもだ、しかし何故、城や町中を

その噂が駆け巡るのかだ、北辰は普段はふざけているようだが

亀裂が生まれるような事を許す奴じゃない。

そして噂が何の障害もなく駆け巡った、誰かが手引きしたように。

私は北辰を問い詰めることにした。

最初、北辰を見つけたとき私は息をのんだ。

北辰は普段、笑っているような雰囲気を受ける。

実際、普段の生活の中で北辰が真剣な表情をするのは限り無く少ない。

しかし、唯一の例外が戦場だ。

初めて戦を共にしたとき私は戦慄した。

まだ付き合いが浅かったが北辰は普段、余裕を持ちある意味飄々としていた。

しかし、戦場に入り姿を見たとき別人のようだった。

いや、別人とさえ思うほどの無表情。

感情が見えず濁っているようで透き通っているような目。

口数は少なくなり、いつものようにやけた感じは微塵も無かった。

異質

武人のように武を誇るわけでもなく、戦に向かい己を鼓舞する訳でもない。

当たり前のように自分の役目を果たし予め定められていたかのように行動する。

そこには何の驕りも自信も無かった、まるでこの程度当たり前だと言うように。

武人とも戦人ともかけ離れた“何か”を私は目の当たりにした。北辰も無表情が怖いと娘や妹に言われたようで苦笑混じりに

“戦場だけは昔の癖なんです、まあ普段はあんな顔しませんよ。”
と言っていた。

その北辰が今、戦場で見せる表情と似ている無表情で立っていたからだ。

似ていると言ったのは間違いないと思う。

握った書状らしきものは赤く染まり、その瞳には私には判断のつかない表情が浮かんでいたからだ。

その場で問いたかったが北辰は無理にでも笑って取り繕うだろう。だから、私はキクゴローに聞くことにしたのだ。

キクゴローはもちろん断ったが私は鯉節で懐柔した。

キクゴローの話す独り言に私は偶然聞いてしまった形だ。

何日も話を聞く中で私は北辰の計画を読み取っていく。

そして山内家当主の死、剣聖・上泉信綱の内情を知った。

しかし、肝心の北辰については何も分かる事が出来なかったのだ

キクゴローの話を聞く内に私はひとつの疑問を覚えた。

“キクゴローは北辰の邪魔をしてほしいのか？”

私はそのようにしか思えなかったし聞こえなかった。

ただ、漠然とそんな気がしたのだ。

キクゴローは目を細め前足で耳をかきながら言う。

“兼続は北辰が謀叛するとか考えなかったんだね”

そしてキクゴローは言った。

“僕には北辰が自分から死にたがっているようにしか見えないんだ”
“北辰は自分の死期を早めているように感じる”

「多分、助けてほしいんだよ」

私は最後の言葉を聞いて北辰の所へ向かった。
北辰の部屋の前でハチとすれ違い、襖に手をかけた。

私は今の状況が信じられなかった。

目の前で北辰と上泉信綱が切り結ぶ光景が。
もっと信じられなかったのはその後だ、

私は北辰の腕から血が流れるのを見て焦った。
だから、一度退くように言ったのだ。

この春日山城なら味方は沢山いるのだ。
しかし

何故、私の事をそのような目で見るのだ？

何故、憎しみの籠もった目で私を見る？

そして、見たことも無いくらい昏く、無機質な目。
全てを視ているようで何も写さない眼差し。

夕暮れ時のこの光景に女中の叫びが木霊する。
私はその悲鳴にハッと意識を覚醒させる。

上泉信綱は誘っているのだ、私達の主を。
私は謙信様を遠ざけるために背を向けた、
その瞬間、身体中の全てが警告を鳴らした。

北辰 side

強い。

人間の中では間違い無く最強レベル。

圧倒的なまでの技量。

勝てない、今のままじゃ勝てない。

だからこそ、上がる、その立ち位置まで動く

上泉が動く

なぜ？兼続を殺すためだ。

止めなければならぬ。

彼女はこれから使える。

速さや力は俺が勝っている。

1対1の経験は間違い無く向こうが多い。

多対1が多い俺には相性が良くない。

加えて、闘いを鍛えた俺と剣を鍛えた上泉。

ひたすらに一つを追い求めたんだ、羨ましいな。

上泉の前に移動し一本の小刀を斜めに構え、もう一本を下から斬り上げた

上泉は刀を横風振るいながら身体を半回転させる。

俺の小刀の一本は上泉の刀に弾き飛ばされ

斬り上げた小刀は回避されてしまった。

上泉は刀を反転させ振り戻す、対して俺は

下段から上段に向かい蹴りを放ち刀の軌道を逸らし残った小刀を投擲する。

小刀は避けられ廊下の方に飛んでいき柱に刺さり、一呼吸置いて叫び声上がる。

夕餉を呼びに来た女中の者だろう。

この騒ぎを聞きつけて既に何人か来ていたが今の女中の叫びで更に騒がしくなる。

俺は再び中庭に戻るため上泉に掴みかかる。

脇腹に焼けるような痛みが走るがそのまま押しきる。

上泉は力が乗る前に自ら跳び退く。

上泉は不自然に曲がった指を元に戻した。

「少しは痛がれ。」

「お主こそ。」

少しでも対処が遅れたら兼続殿の首が跳んでいたな。

「兼続殿、邪魔なので動かないで下さい。」

とは言っても上泉の殺気に当てられて動けない。

状況は芳しくないな。

明らかに殺す気だしな、俺が死んでも俺の連れが跡を継ぐ。

上泉は手加減する義理も無いわけだ。

俺は懷から愛用のナイフを取り出す。

昔の、この時代にくる前から使っていたものだ。

時代に合わないから今まで使わなかったがもう関係無い。

時代に適合しない

時代に恭順しない

もう後には退かない。

合わせることも苦痛だった。

この手に握るナイフだけは変わらない。

今まで刻みつけてきた感覚も 臭いも。

切り替わる…

なんてことは出来ない。

完璧に切り替わるなんて今まで甘えていた俺には出来ない。

だから、今から戻していこう。

頂点と謳われたあの自分に。

紛い者でありながら歩き続ける自分に。

「……。」

進む、ナイフが届く前に刀が迫る。

前へ、ナイフを捻り刀を弾き返し刀に沿うようにナイフを滑らせる。

「ぐっ!!」

ナイフの動きに気をとられている間に蹴りを放つ。

あたりはしなかったが動揺は誘えた。

上泉の背景に見える廊下の奥を見る

「参加が遅れたな。

改めて自己紹介をしよう。

北辰、北辰 一文字。ドイツ帝国円卓が1人。」

地面を滑るように走り、撫でるように斬りながら囁く。

「嘗ては返し刃と言われていた、今は只の、紛い者の北辰だ。」

立ち位置を替える。

始まる、役者が揃った不恰好な演劇が。

軍神と剣聖と北辰（前書き）

すみません、迷走中です。

軍神と劍聖と北辰

走る。

上泉が無謀を起こしたと思わせるために
上杉家の象徴たる上杉謙信に向かつて。

俺は正面から迎え撃つ。

退くわけにも避けるわけにもいかない。

上泉の力量からして臨戦態勢じゃない謙信を一太刀の下に下すだろ
う。

一撃、ナイフで悠々と防ぐが刃を捻られ腕が上がる。

もの凄い技術だ。

筋肉の動きを見極め合わせるように力を乗せる。

抵抗するまもなく無防備を晒す。

だが、

「舐めるな。」

一閃。

何万、何百万、数得ることすら出来ないほど振るい、実戦で鍛えて
きた太刀筋が襲う。

しかし俺はそれを敢えて、受ける。

人間の力には限界があるが俺には無い。

俺達にはリミッターが無い故に筋肉の繊維一本一本まで鍛え上げた。

若く経験が足りないためソレを補うために鍛えた。

経験も技術も足りないなら地力で勝れば良い。

意志が足りないなら地力で勝れば良い。

技術が足りないなら経験で補えばいい。

しかし、技術も経験も闘いの本能すらも兼ね備えた奴だったら？

「読んでいたのか。」

俺が自らの肉で上泉の刃を止めることを。
事実、上泉の刀は俺の腹を抉った所で進行は止まった。
しかし、上泉は俺の襟を掴んでいた。

「お前ならそう思うた。」

「まともにぶつかれ。」

「お主の臂力に適う者などおらぬ。」

やはり見抜いていたか。

俺が一撃でも当てれば死に導かれる事を。
やっぱり、力を技術で押し固めた奴は嫌いだ。
俺はそのまま蹴り飛ばされる。

「がつ!!」

明らかに人間の限界を超えた力。

「お主ほど鍛えてはおらんがな」

想定していない力に肉が軋む。

呟くように言った言葉が耳に届く。
バカ言うな、蹴りで力を”透す“なんて荒業
よほど鍛えなければ出来るものか。
城の柱をへし折りながら飛ばされる。

「ハチ!!!!宇佐美さん!!!!」

謙信のそばに居るであろう八チと宇佐美を呼ぶ。

謙信を守れという意味を込めて。

少しでも足止め出来れば追いつく。

勢いが弱まった瞬間、床を蹴り力の方向を変換し、

身体が浮き天井に達すると手のひらで衝撃を和らげる。

「借りるぞ。」

部屋に置いてあつた槍を拝借する。

「おおお、お、お、ああああ、あ、あ、らっ！！！！」

槍を真つ直ぐに投げ、微塵もブレがない槍は真つ直ぐに飛び抜ける。

まるで初めからそこにあると勘違いするほど乱れは無い。

槍を追いかけるように俺も走る。

見えた、宇佐美は肩から血を流している、八チは、間に合ったか。

腹から血を流しているが死んではない。

上泉は丁度、槍を受け止め威力を殺した所だ。

「ただいま。」

山内家で上泉信綱が無謀を起こしました。」

「まさか！」

「どうしますか？」

普通、独りで敵軍を足止めしその間に味方で攻めることは不可能ですが、

奴なら独りで足止めしてきますよ。

間違い無く街に山内勢が攻め込んできます。

そして厄介な事に山内家は、いや“上泉信綱”は

北条家と繋がっています、そして北条家は兵を動かしています。」

「…… 迎え撃つ。」

「わかりました。

ならば此処は任せて下さい。」

「いや、北辰の事だ。

既に手は打つてあるのだろうか?。」

「……」

俺は着ていた羽織りを謙信に被せる。

「けして離さぬよう。」

そう言つて上泉の下へ走る。

謙信は此処から去らないだろう、ならば被害が及ぶ前に元凶を叩く。

「功を焦ったか」

「…… 違うな。」

上泉が立合いを放つ瞬間、俺は地面を蹴り

空中で逆立ちのような体勢になりそのままかかと落としを放つ。

上泉は左手で蹴りをいなし右手で脇差しを抜き放つ。
俺は地面に降りた足だけで地面を蹴り上泉へと向かう、
そしてナイフを突き立て、途中で横風に変える。
同時に上泉の蹴りが腹に当たり自ら飛び退く。
上泉はこめかみから流れる血を拭う。

「ソレが本来の戦い方か。命知らずな。」

敢えて死線の先へ踏み込んでくるとは。」

「お前の死線と俺の死線は違うだけだ。
越えられる死線など死線とは呼ばない。」

刀は不便だな。

近付けば威力が発揮出来ないのだから。
上泉なら技術で補うだろうがやはり威力は下がる上に
想定していない間合いに対処する技術は
化け物クラスではなく達人クラスだ。
わざわざ、相手の土俵に上がる必要も無い。

「暗闇は私の領分だよ。」

篝火が消える。

月明かりが人影を映す。

俺には明るすぎるくらいだ。

後ろから、切り裂く。

横から、切り裂く。

上泉も弾く、執拗な攻撃を弾く。

やがて雲が光を遮り月を覆う。

闇夜からの絶え間ない斬撃。

左から右から下から上から前から後ろから、何処からでも放つ。何よりも恐ろしい所は気配が無いこと。

獣が獲物を狙うように気配を絶ち

更には殺気や敵意すらも断つ。

敵意の無い攻撃に錯覚する、与えられる攻撃が

多方向からの攻撃に、まるで世界そのものが

敵になったかのよう

次の瞬間、上泉が動く。

俺はその隙に便乗する。

そして跳ぶ、上泉の身体の一部が。

指二本と腕の肉を切り離れた。

その時、雲が消えたのか月明かりが差す。

そして上泉は謙信の所へ踏み込んだ。

上泉の一閃を謙信は刀を斜に構え腕ごと弾かれた。

謙信は呆気にとられた表情のまま万歳の体勢をとらされる。

「なっ!!」

「甘いな、小娘。」

落胆したような上泉の言葉。

「神降ろしを使いその程度か。」

上泉は刀を一瞬で納め、一瞬で抜き放つ。

俺はその様を見て感心する。

完全な脱力。

そして一瞬だけ限界を突破する動き。

「見事だな。」

けど、お前さんじゃ、ちと役不足だ。」

神速を誇る一撃が加わろうと
神に傷を負わせる技術が加わろうと

「最強の矛と盾はあるんだ。
認めたくは無いけどな。」

俺達凡人が認めたくない天才がいるように
モノには絶望がある。
鍛冶屋が鉋物を鍛え最強の武器を防具を目指し作る
それをあざ笑うかのような物が存在する。

「俺は完璧も完全も認めてはいなかったが…
初めて完全を認めたよ。」

二閃

上泉の肘から先が跳んだ。

上泉の謙信に向けられたら一撃が羽織りによつて完全に
防がれたが故に起きた隙があつたからこそだ。

「ヒヒイロカネ」それが材質だ。」

「ふん。その程度で勝つたつもりか？」

「腕を切り落とされてなお、俺の片目を封じたんだ。
此処からが本番だ。」

右目が見えない。

上泉の腕を切り落とす瞬間、刀の柄で殴られたみたいだ。

「北辰、後は私がやる！下がれ！」

「それは余りにも酷と言うものです。」

せめて上泉は俺が葬るべきだ。

「片腕を無くしたとは言え剣聖の相手はキツイでしょう。」

いくら軍神と言われていても女の子、ましてや

群の中で強いのであり個の最強を誇る剣聖には適いませんよ。」

「い、今はそんな事を言っている場合では無かろう！」

「そうですね。」

展開した配下の状況も見なければなりません。」

「北辰、お前ならば奴に勝てるか？」

「いえ？無理です。」

確実に勝てませんよ？」

「何故、自信満々なのだ。」

「想いだけで意志だけで勝手に強くなれたのなら苦労はしませんよ。しかし、“北辰”の名にかけて貴女は守ります。」

謙信は“そうか”と呟き刀に手を添えて真っ直ぐに上泉を捉えながら走り出した。

「北辰、か。
今、思い出したぞ。」

上泉が刀を構え、呟く。

謙信の一撃を紙一重で避け、放つ一閃を俺がナイフの腹で止める。

「天皇家を守護する者の名だ。」

「はっはっはっ、久しいな日本を守護する一族さ、だが既に廃れた
いや。」

まだ、この時代には存在したな。

では、北辰の名に乗っ取らせて貰おう。」

俺は謙信を左腕で抱き、後ろへ跳ぶ。

「北辰が生涯仕える人は一人。
残念だが述べる言葉を知らぬのでな。」

俺は謙信の前に立ちふさがる。
行動で示すだけだ。

「謙信様。」

「な、なんだ!？」

何故に動揺しているんだ？

「お好きなように。」

謙信様が望む道を開いて差し上げましょう。

しかし、道を誤ったと感じたときは止めて差し上げます。」

「ふふつ、賢者と云われたお前が見て居てくれるのか。
心強い!!」

謙信の踏み込み。

守る戦い方は 馴れてる。

俺は謙信と上泉の戦いを見据える。

剣聖 対 軍神

か、使うが良い。

軍神よ、私はそのためにこの時に還ってきたのだから。

戦う者、沈み逝く者 壱（前書き）

申し訳ありませんでした！

更新遅れてすみません

クオリティ下がってます！

謙信様の活躍は次回です！

駄文、グダグダ嫌いな人はお下がりでください！

戦う者、沈み逝く者 壱

凄い。

一秒ごとに成長、いや、進化しているのがわかる。

謙信の動きがドンドン良くなってきた。

俺が成長する速さなんて微々たるモノだ。

楽しいな、人の成長を見るのは。

謙信は一瞬で懐に入り込む、俺は木製の投げナイフで牽制する。

上泉は投げナイフを刀で弾き謙信の接近を許す。

謙信の下から斜め上に振るった刀を上泉は身体を逸らすだけで回避、

しかし謙信は身体を使って当て身を試みる。

上泉は条件反射的に手刀を繰り出した。

「不用意に入り込むと死んでしまいますよ？」

奴ほどの使い手なら貫いて来るだろう。

と、言うか両腕が在れば死んでたな。

「ふふつ、守ってくれるのだろう？」

「？ ああ。その通りだ。」

そうだったな

そんな事を言っただけもある。

ダメだな、もう記憶の混乱が来ている。

それほどまでに上泉の存在は大きいのか。

「 北辰？」

「来ます。」

消えていく。

俺個人の情報に関する死者の思い出だけが、なぜだか消えていく。俺が何をしていたかは覚えている。

どこで戦い何人殺したかくらいしか覚えていない。

まるで何処かの報告書を閲覧しているようだ。

何かが抜け落ちていく、今の生き方は誰に学んだ？

この戦い方は誰から学んだんだ？

何故、俺は此処にいる？

何故、俺は家族という存在を手には掛けたのだったか？

何故、俺は祖国にいない？

何故、俺は日本にいる？あれほど裏切られたのに何で俺は

「約束だ。」

うん、誰かと誓った約束だ。

「北辰！」

「北辰か。」

何で俺はそう名乗ってるんだろう？」

何で死者に対して持った自分の想いも消えるんだろう。

死者と誓った自分の決意や意思まで奪わなくても良いのに。でも、本当に怖いのは、忘れたことが定着する瞬間。

喪う想いが尽きた後、生者との想いすら喪ったら

知識だけを詰め込んだ人形みたいだね。

「違う!!」

かつて、倒した誰かの声が聞こえた気がした。
それなのに”誰か”がわからない。

だから、ただの八つ当たりだ。

目の前の男に対する八つ当たり。

何の捻りもない前蹴りを放つ。

上泉は後ろに跳んで回避する。

俺は脚を地面に降ろして降ろした脚を軸に

回し蹴りを放つ、上泉は刀を添えるようにして

斬ろうとするが刀に触れる寸前

俺は蹴りを止めてその脚を降ろして

上泉の脚を踏みつけて軸足で蹴る

「くっ」

「謙信様、俺に構わないようにしてください。」

忘れてしまったことが定着する時がくる前に

あの“感覚”に襲われる前に

終わらせないと危険だ。

「北辰。下がれ。」

今日のお前は何処か変だ。」

元からですよ。

誰も見ようとしなかっただけで。

上泉は刀を構える、片手を無くして尚、この気迫か。

その気迫に謙信も即座に構えた。

しかし視えてしまう。

俺は視てしまっ、上泉の気迫に籠められた想いが。

独りで居れば、独りだったならば。

「上泉信綱。貴様は。まさか」

「行くぞ、小娘。」

「やらせんよ。」

お前にだけは、俺達にだけは

「やらせるものか！」

上泉の突きを俺は蹴りで弾く。

「謙信様！！恥を掻かせないで下さい！」

上泉に、俺に、俺達に

「はあああああ！！！！」

謙信の高速の踏み込み、そして踏み込みの力を乗せた一撃。
しかし後一步届かない。
その差は今は途方もなく遠い。
しかし、今は俺も居る。

「護れるものが在るのは羨ましいな。」

「阿呆がつ！」

長野業正の存在を大切に思いながら何故、守り続けない。
大切に思いながら何故、突き放す。

上泉の腕を手の甲で弾く、謙信はさらに踏み込んだ。
上段から下段に斬り、続けて斬り上げる。

「謙信様！踏み込んで」

俺は絶句した。

謙信が危険だからではない。

謙信の踏み込んだ位置に絶句した。

そしてそれは上泉も同じだった。

何で、もうそんな動きが出来る？

正直に言えば俺も上泉も謙信の力を見下していた。

成長する速さも所詮は培われていた能力が

経験を獲て地力になったぐらいだと思っていた。

しかし、そんな次元ではない。

まるで世界そのものが彼女を味方しているかのようだ。

「でも、まだ早いですよ。」

上泉にはまだ、届かない。

神降ろしの産物なのか？

でも、何にせよもう俺は必要ないみたいだよ。

だって、こんなにも強い人なんだから。

沈んでも、良いよな？

来たか。

ドクン

記憶が改変され定着する瞬間。

「は、ははっ」

俺は戦いの最中でありながら胸を押さえる。

この感覚に耐えるために。

“世界の全てが文字通り敵に回る感覚”

自分のいる場所が、触れている空気が

見えているモノが、隣にいるニンゲンが

存在してはならない人間が

居てはいけない時代にいるが故に、

セカイ全てが結託し俺を壊そうとする幻覚と幻聴

唯一、信頼できる筈の自身すら今や存在を許されない

今まで貫いてきた信念すらわからなくなる絶望。

当たり前が消え、わからなくなる苦痛。

信じ続けて来た記憶が有害でしかなくなる瞬間が。

喪われていく。

今まで屠つて来たニンゲンの記憶が

喪われていく。

今は無きヒトとの大切な思い出が。

喪われていく。

何の為に戦ったのか、その、理由が

存在しない筈のモノが存在するヒトを侵したが為に

存在しない筈のモノは徐々に壊されていく

本来のあるべき姿へ還す為に見えないセカイの力が働くのか

意地が悪いセカイ（日本）は何処までも俺のことが嫌いなようだ。だって、誰かの願いを叶えたい為に

オマエを助けているのにオマエは俺を追いつけたがる
これ以上、俺から何を奪うんだ？

「答えてくれよ。」

そんなに俺が嫌いかな？」

俺も嫌いだよ。

オマエもオマエに連なるモノ全て。

「でもな、それでも、それでも俺には離せない願いがあるんだ。

上泉！お前も此処で沈んで逝け！亡き者に惑わされる者は必要はない！」

俺も、もう少ししたら逝くから。

「！！！！」

脚を地面に強く踏み締めた

地面が揺れた訳でもない、しかし上泉は体勢を崩した。

「謙信様！」

謙信が隣を駆け抜けていく。

俺はその後ろ姿を見る。

美しいな、そして凛々しい。

何で、日本に産まれたんだろうな。

轟音

「なんだっ、それは」

「臆病者の臆病な武器さ。」

上泉の刀が弾かれた。

此处で殺したら確実に俺も壊れる。
だから、謙信に殺させよう。

「卑怯者だからさ、俺は。」

いくら、身体能力が高くても間に合わない。
終わり方なんてこんなもんだよ。

俺が葬るのが筋だろうけど、まだやりたいことがあるんだ。
謙信の渾身の一閃。

ゾクッ

嫌な感じがする。

完璧なタイミングで振った刃を上泉は避けられない。
でも、なんだこの感覚は？

あの男から伝わるこの感覚は
この尋常ならざる気配は

あの男は、本当に人間なのか？

「謙信！！！！」

走る、いや、地面を蹴り一瞬で到達する。
天才、か。

いや、それだけの力が備わって居たのだろう。
俺が上泉の一閃を受けたように
上泉が謙信の一閃を自らの皮膚で受けきった。
謙信の力量が悪いなんてことはない
ただ、上泉が圧倒的なだけ。

「謙信様、意志には想いには力が宿るものです。」

もしも、俺や上泉が強く見えるのならそれは間違いです。

僕はただ、強く在ろうとしてるだけ。」

「北、辰？」

この位置からじゃ謙信は俺の顔は見えない。
しかし、僕は謙信の顔が見える。

月明かりの関係からだろうか、酷く怯えたように見える。

「なんて顔、してるんですか。」

ちよつとすみません。

兼続殿！」

上泉と謙信の間に入った俺は謙信を兼続の方向へふんわりと投げる。
そして胸板から突き出ているモノを掴む。

見事に隙間を貫かれてる。

もしかしたら僕は

背中に衝撃が走り身体が飛ばされる。

空中で反転、俺を蹴った上泉を見ながら中庭の庭石に激突する。

ダンッ

懐かしい硝煙の香り。

そうだ、俺を殺しに来い。

ダンッ

ダンッ

「止める！！止めてくれ！」

「北辰！逃げろ！！早く！！」

謙信も兼続もそんなに慌ててらしくない。

見るよ、この距離で弾丸を避けてる。

撃ってから避けてんだよ？

音速を超える筈なのに。

「殺せたと思っただけだな。

最後に油断　　いや、俺も死にたかったみたいだ。」

本気で殺す気なら爆破で殺せた。

別に、選択肢は沢山あつて

その中で俺は死にやすい選択肢を取った。

やらなければならぬことはやったんだ。

後は死に場所を見つけるだけ。

「上泉。」

「なんだ？」

お前も何て顔をしているんだ。

「さっきな、お前が化け物みたいに見えた、けど謝る。お前も僕も、化け物のなり損ないだ。」

そして、さよなら。

上泉の後ろに見える物体
上空から布が舞落ち、謙信の方向を遮る。

「ありがとう。
けど僕は無様に死にたい。」

皆、と。
散っていった人と同じ様に
戦場で無意味に死にたい。

そして、爆発。

何故か喉に刺さる脇差しを見ながら俺は意識を墮とした。

戦う者、沈み逝く者 弐（前書き）

遅くなつてすみません！

文法滅茶苦茶構成も滅茶苦茶です

それでも大丈夫な方、よろしくお願いします！

戦う者、沈み逝く者 弐

謙信 side

「謙信様、意志には思いには力が宿るものです。もしも、俺や上泉が強く見えるのならそれは間違いです。僕はただ、強く在ろうとしてるだけ。」

「北、辰？」

戦いの最中だと言うのに何故、こんなにも穏やかに話す？何故、顔が見えぬことがこんなにも不安なのだ？その、胸板から生えているモノはなんなのだ？人は、そんなもの生えて居らぬだろう？

「なんて顔、してるんですか。」

ちよつとすみません。

兼続殿！」

まで！

離れるな！

私にはお前が、死にたがっているようにしか

身体が浮き上がる感覚。

離れたからこそ見える。

なんで、何でそんなにもお前は、満たされた表情をしているのだ？

北辰は腹から突き出ている刀を掴んだ。

そして、私には世界が遅く過ぎていく錯覚を覚える。

刀が抜けないと知った上泉は北辰を、蹴った。

北辰は蹴鞠のように跳びながらも何かを取り出して

火縄銃のような轟音

聞くのは二回目だ。

北辰は庭石に背を預けながら何かを掴み轟音を放っている。

「くっ」

「謙信様っ」

私は兼続に受け止められた。

そして気付く、私が羽織っていた北辰の羽織りが無いことに。私は嫌な気がして咄嗟に叫ぶ。

「止めろ！止めてくれ！」

私は誰に言っているのだろうか。

北辰にか？上泉にか？

しかし、わかってしまう。

北辰の表情を見てしまっただけ。

お前はいつたい、どこに居るのだ？

北辰の口の動きから言葉を読む。

馬鹿な、お前は自分から死を望むことは有り得ないと言っていたではないか。

お前が死んだら、妹は、小雪はどうするのだ？

お前を慕い集う者をどうするつもりだ？

私との、約束は

誓いは

側に、居てくれるのでは

無かったのか

そして北辰は嘲笑混じりに言った。

化け物のなりそこない

違う！お前は、化け物なのではない！

誰よりも人を見て、信じる者が化け物な訳がない！

化け物にあんなにも笑顔が向けられるものか！

私は無意識のうちに叫びそうになった次の瞬間、上から落ちてきた北辰の羽織りで北辰が見えなくなった。

何が、起きた

羽織りが私の視線を隠した間に何が？

敷き詰められた砂利が見当たらず

それどころかまるで、燃え尽きた戦場のようだ。

その惨状から現れた男と、その男が掴んでいるモノを見た。

私の中から何かが切れた。

「う、お、おおおおおおあああああ！！！！」

がむしゃらに私は突き進む。

何が上杉家当主だ、何が軍神だ

何も、何も護れぬでは無いか。

「
だめ！」

私は横から何かに抱きつかれた。

「宇佐美！？」

「だめ、だよ。」

謙信様。

怒りに呑み込まれちゃ、だめ。」

「宇佐美、お前、血が」

「んーん。」

宇佐美は辛そうに、齒痒そうに言った。

「北辰の、だよ」

宇佐美は私とは反対の腕で北辰を抱いていた。
うつすらと目を開けて屍と同じ表情。

突き刺さっている二本の刃。

「謙信様！何をしておられるのですか！？北辰の血止めを」
「っ」

兼続が息を呑むのが聞こえた。

「息、してない。」

そして北辰の姿が何かによって隠される。

私は何かが落ちてきた所を見る。

ソコには暗く表情は見えないが北辰を刺した奴がいた。
私は北辰を覆った羽織りを強く掴む。

「き、さま、、きさまがあああああ！！！！」

宇佐美の腕を振り払い私は刀を斬り上げる。

ヤツは刀が無く箆手のみだ、しかし避けられた。
捻った腰を戻しながら振り下ろし、踏み込んだ。

「アアアアアアア！！」

下段に浅く振り下ろし防がれた、すぐさま肩に斬りかかるが
反射的に身体を回転してヤツの手刀を回避と同時に刀を突き刺す。

キン

刀身が飛ぶ、上泉が刀を包むように触れ、へし折ったからだ。
武器なら目の前に飛んでいる、私は刀身を掴み振るった。

「軍神の戦じゃ無い。」

が、何かに腕を掴まれた。

私の腕を掴むのは艶やかな黒髪をした者。

会った事がある。

北辰の家族だ。

名は千百合と言ったはず。

「なっ」

まるで始めから其処に居たかのように現れた
まだ幼さを残す翠色の髪をした少女。

北辰が言うには山の神だったはずだ、名は櫻。

「お久しぶり、謙信。」

櫻は腕を突き出した。

「跳べ！！」

それだけで上泉の身体が浮き、飛ばされる。

「
兼続さん、後は任せ

てください。」

そして私の後ろで聞こえる声。

北辰がいつも自慢気に話す妹。

北辰が楽しそうに語る家族が何故、此处に。

「小雪。私は
」

「
兄様。」

小さな呟き。

その言葉が私を責める。

小雪にそんな意図はない、けれど

コッソ

私の額に小さな衝撃。

千百合が私の額を小突いたのだ。

「その戦い方は軍神の戦い方じゃ無い。」

と、アイツなら言うだろうな。

そう、千百合は続ける。

北辰は、私に何を伝えたかったのだ？

最後のあの言葉の意味すら解らぬと言うのに。

「教えてくれ、軍神とは なんなのだ？
強さとは なんなのだっ！！」

「 それに答えるのは私の役目じゃない。
櫻、北辰の治療を。」

「わかってます！」

そうだ、山の神の櫻ならば。

「 櫻。

北辰は？」

「 」

「櫻？」

「 大丈夫に 決まってるじゃないですか！私は山ノ神なんですよ？」

「そう、か。そうか。
良かった。」

「 残るはアイツだけか。」

千百合は柄が竹の刀を握り言う。

「何故、お前が敵になった。上泉？」

「千百合？」

まるで、上泉と知り合いかのような。

「仲が良かった筈だろう？」

どういう事なのだ？

北辰と上泉の仲が良かった？

ならば、何故あのように戦えるのだ？

「だからどうした？」

「お前まで、アイツを裏切るつもりか！！」

「。。」

「アイツが何故、簡単に人を信じるかわかっているだろ！！」

「。だからどうした？」

上泉の答えは変わらない。

北辰が人を信じる、意味？

「謙信、いや。謙信様。」

軍神の戦い方は個ではなく群。忘れるな。」

千百合がこちらを向き言う。

荒々しい口調も心地良く耳に響く。

心も落ち着いた。

一番心配な筈の者達を取り乱すまいと動いているのだ。

私を取り乱す訳にはいかぬ。

北辰は助かるのだ、意味は後で聞けばよい。

「宇佐美。兼続。千百合。力を貸してくれ。
小雪と櫻は北辰を頼む。」

「。北辰の気持ちがわかるな。」

上泉が何か呟いたが私の耳には届かない。
考える。

北辰ならきつとそう言う。

どのようにすれば、あの者を倒せるのだ？
今の現状をどう動かせば良いのだ？

「感覚の戦い方をしたことがあるか？」

千百合が言う。

私は千百合を見る、改めて見ると戦いに出る恰好ではない。
着物で戦えるのか？

「言っておくが戦うときは脱ぐぞ？」

「あ、ああ。」

「軍神の意味は私も知らない、けど“神降ろし”した軍神の戦い方
なら知っている。」

猿真似では不完全だが一度見せる。」

千百合はそう言って、宇佐美に何かつぶやきかけた。

宇佐美はあの獣耳を頷かせた。

「さて、“神降ろし”とはなんなのだ？
何故、そなたが軍神の戦い方を。」

「細かいことは後だ、宇佐美、殿！」

宇佐美は呼ばれ頷き、走り出した。

「預かっていてくれ。」

千百合は着ていた着物を宇佐美に続く。
さて、着物の下も着物ではないか
脚を露出している着物だ。

「さて、お前達では」

私が言いかけた時、千百合の右手首がブレた。
よく見れば刀が無くなっている。

投げた？

その間に宇佐美が槍を下から上泉に向けて捻り上げる。

上泉は投げられた刀を掴むが、千百合は上泉の無くなった腕側の脇
に潜り込み肘を叩き込む。

それが功を奏して上泉は反応が遅れ宇佐美の槍が上泉の服を掠める。

「
はあああ！！！」

宇佐美の気合いと同時に槍の矛先が捻り、地面に叩きつけるように

動く

体勢を反らしていた上泉は体勢を崩しながらも握っていた刀を振る
い上げる。

だが、それより先に宇佐美は槍を納めて下がる。

「その刀は、私のだッ！」

千百合が上泉の振り上げた腕を蹴り飛ばす。
だが、上泉の腕が急に動き千百合の脚を掴む

「ならぬ！」

「兼続、殿！」

私が動き出す前に兼続はその場所にいた。

私は千百合は宇佐美にのみ話し掛けた故に兼続の動きの把握をして
なかった。

それは、上泉も同じだったようだ。

「わかつている！」

兼続の一閃、上泉は体勢を崩し腕は伸びきっている。

しかし兼続の一閃は下からの衝撃に防がれる。

上泉が咄嗟に刀を蹴り上げたのだ。

しかし、刀は簡単に宙を舞う。

私には、兼続がわざと手放したように映る。

「コレが、群の戦い方だ。」

宙を舞った刀を千百合が掴み上泉の肩に突き刺すと同時に跳ねるよ

うにして腕を振り払った。

「しかし、北辰ならただ、息を合わせると言っただろうな。」

この戦い方が軍神の戦い方？

だか、この戦い方なら通じる。

いや、出来る。

「出来ないことはない、信じてきたのだろっ。

アイツが心配するぐらい。」

そっだ、私が信じ、進んできた生き方とは

「謙信様。」

「謙信様。」

兼続も宇佐美も私を頼ってくれている。

信じよ、私は、毘沙門天の生まれ変わりぞ。

「毘沙門天よ 我に來たれ！！！」

戦う者、沈み逝く者 参（前書き）

僕、やっと悟ったんだ。

無理に戦闘描写を書くのは無理だって。
だから、諦める。

駄文進行中

駄文嫌いな方はバックをお願いします

戦う者、沈み逝く者 参

北辰side

また、此処か。

見える空は赤く四方は赤く地面は赤い液体で埋め尽くされている。
ただ、何時もと違うのは
俺の弟に似た男は居らず変わりに違う奴等が居た。

「

だれだっけ？」

隣を見たら大量に居た

反対を見たら大量に居た

囲まれてる。

よし、冷静になれ。

俺は確か、死んだはずだ。

なら、偶に来ていた此処は地獄なのか？

「なんだよ？」

気付けば近くに存在する人間の形をした肉は握手を求めるかのように
手を伸ばしていた。

目は虚ろに俺を見据える。

「はて、何処かで知っている顔だな。」

「北辰。」

「ん？おお。神武か。人混みに紛れて気付かなかったよ。」

なんだ？祝福にでも来てくれたのか？」

俺はぐるりと一回転して周りを見る。

これが死ノ国なら俺もコイツ等みたいになれるのか？

「どうだい？神武。

見事なものだろう？種は蒔いた、後は時代が決める。」

俺は戯れに近くにいた肉の手を握ろうとする

「駄目だ！ソレに触れてはいけない！」

俺はふと、手首を見る。

昔、幼児に貰った腕輪だ。

そういえば、いつからこの腕輪をはめてるんだっけ？

よく考えるとこの腕輪をはめてから良い思い出がない。

櫻ちゃんが言うには悪い何かを浄めるとか意味のわからないことを

力説してたけど

神の悪い何かは俺にとってどうなのだろうか？

「ごめん、聞いてなかった。

なんて？」

「その異形の手を取ってはならない！」

「？？？そんな事より俺は約束を守れただろ？」

天下は統一に向かい一度は平定される。

後は時代と今を生きる人ががんばるだけだ。

「もう、俺は自由だよ。」

俺は腕輪を外して懐にしまう。
もう、身体を気にする必要はない。

「なんだよ、こんな俺でも必要としてくれるのか？」

差し出された手を見る。

「それとも、地獄に連れて行ってくれるのか？」

「つか、もう死んだ身ならどちらでもいい。」

「俺はお前を知っていたんだろう？」

手を握ろうと触れた瞬間。

肉が溶けた。

人の形をした肉がどろりと溶け、消えた。

違う、戻った。

死者の名前がではない、記憶ではない、想いでもない

重みが

「おかえり。」

“僕”という存在に還ってきた。

“北辰”と名を借り、どこか押し付けてきた

殺したという現実

「神武。やっぱり僕は日本が嫌いだ。」

一体、また一体と俺は握手していく。
その度に僕の中に落ちていく何か。
還ってきた重み。
犯されていく魂。

「駄目だな、俺まで僕って言ったらキャラが被る。
神武、俺は何で日本なんか助けようとしたか知ってる？」

言いながらも人間の形をした肉を戻していく。

「俺は忘れた。」

でも、大切な事だと思ったんだ。」

《俺達を踏みにじってまでか？？》

「え？」

触れようとしたモノから応えられた。

神武は、いない？

何処へ消えたんだ？

いや、初めから居たのか？

俺が生み出した幻覚だったのではないのか？

そんな事よりも、

「そうだ。」

私は祖国の為に、祖国の悲願のために戦った。
その為に君達を殺したのだ。
だが、踏みにじられた君達が悪い。

弱いのが、罪なのだ。」

そうおもうだろ？

と、俺は周りを見回す。

誰も答えない、何も答えない。

聞こえていた問いも本当にコイツ等が言ったのか？

俺が生み出した幻聴だったのではないのか？

この世界でいつたい、何を信じればいい？

いや、そもそも信じなければ良いのかもしれない。

そもそも信じる事が間違いだ。

「孤独は、弱者の象徴。」

謙信 s i d e

不思議な感覚だ。

今の私にはこの戦の全てがみえる。

仲間の動きが、自分の行うべき動きが。

私の望む結果への道筋が、広がる。

「千百合、感謝する。」

「やるべきことをやったただけだ。」

私は、私が軍神等と自惚れた訳ではない。

しかし、今は私が軍神になった感覚すら覚える。

「来るぞ、私に力を貸してくれ。」

上泉が槍を掴み構える。

あの槍は北辰が上泉に投げつけた槍だ。

慌ててはならない、よく見るのだ。

私の中で私が語りかける、私の目的は上泉を倒すこと。
槍を警戒する事ではないのだ。

上泉の槍の先が動く。

見える、動きの軌道が。

上泉の槍は私に到達する寸前、横風に矛先を変えた。

「無駄だっ！！」

しかし、あらかじめ下がっていた兼続にその槍は届かない。
チーン

独特の甲高い音が響く。

千百合の刀が放つ音だ。

上泉は箠手にて斬撃を防ぐが、僅かに動きが鈍る。

千百合は続いて攻勢に出る。

私は宇佐美に目配せをする。

宇佐美は頷いて動く。

私が思い描く軌跡と同じ道を進む。

「兼続。合わせてくれ。」

刀を抜き放ち兼続に言う。

「はい！！謙信様！」

待っている北辰。

すぐに終わらせてゆつくりと休ませるから。

上泉が千百合に振るい外した槍を兼続が刀で斬り上げる。
動きは変幻自在に絡み合い一つの流れに変わる。

「これでっ、最期だ！」

この瞬間なら確実に攻撃が通る。

私は確信を持ちながら刀を振る

なんなのだこの感覚は？

刀を振るう瞬間、何かが私を止めた。

本能にも近い動きで放とうとした動きが止まる。

何故、身体が動かぬ？

私は目の前の敵を 見た

「 つっ！」

死ぬ

間違い無く、死ぬ。

軌跡が

消えた。

上泉を倒す軌跡が捻れていく。

上泉は槍を棄て構えた。

腰には鞘さえ無いと言いつのに無手で立合いを放つかのように。

「謙信！！」

「ハチ！？」

ハチが何故か空から振ってきて何かを地面に突き降ろした、それと同時に上泉が無手で腕を振るう。

「あぐっ！？」

ハチが私の方に飛ばされる、私はハチを受け止めた。
宇佐美が私の元へ来ようとする兼続を止め下गरさせる。
千百合は既に距離を取っている。

「け、謙信！

俺の槍は？」

ハチが呻きながら聞いてくる。

私は近くに跳ばされていた布で捲かれた長細いモノを見る。
戦の時、何時もハチが持ち歩いていたが槍だったのか。
どろり

と、私の手に奇妙な感覚が走る。

「ハチ？」

嫌だ 怖い

いままで幾らでも浴びてきた。

幾らでも見てきた。

血を。

「謙信、この程度なら俺はまだ動け

アニキ？」

ハチが動きを止める。

「まで！北辰なら大丈夫だ！櫻がなんとかして」

「
嘘だ。」

その否定は私の言葉に対する否定だったのだろうか？

それとも、北辰の姿にだったのだろうか？

しかし、私は立ち止まらない。

私が退けば私の大切な者に危害が及ぶ。

姿の見えない死に畏れるな。

「何としても、堪える 超えるのだ。」

いまだ悠然と立つ上泉の前に私は立つ。

この男を超えなければ、我等に未来は無いのだ。

吞まれるな、毘沙門天は我と共にある。

「宇佐美。兼続。千百合。」

「なに？」

「どうしました？」

「なんだ？」

「逃げよ。」

私は踏み込む。

私は何をしているのだ。

これでは、北辰の繰り返しではないか。

しかし、冷静に今の自分を見ている私がいる。

仕方がない、差し違えてでも止めねば皆が死ぬかもしれないのだ。

「そうか、奴が歪んでなければお主に似ておるのだ。」

上泉が意味の解せぬ事を呟き、腕を振るう。

「かもしれない、2人とも許し難いが。」

「まったく、だよ。」

「同感です。」

私は宇佐美と兼続に止められる。

千百合は正面から上泉の見えぬ攻撃を、受けた。

「千百合！無事か！」

「気にする程じゃない。」

言葉を裏付けるように千百合は構える。

「謙信、様が死んだら北辰は上杉から去るつもりだ。だから、死ぬような真似はするな。」

千百合が言う。

私が死ねば北辰が去る？

「本来なら私達が此处に居ることも北辰は怒るのだから。」

千百合が溜め息を吐く。

「小雪、もう充分だ。
手伝え」

千百合が言う。

「ハチ、立てるなら手伝え　　櫻様、もう神力の無駄です。」

無駄？

「まて！どういう意味だ。」

「アニキはもう助からないって事だよ。」

ハチが弾かれたハチの槍を掴む。

「櫻様は帰ってくれ。」

アニキは神様に介入されることを嫌うから。
千百合姉さんと小雪は出来れば」

「残りますよ。」

兄様の仇はとります。」

「だけど、アニキは妖怪が介入することを」

「家族の仇を討つのに種族も何もない。
櫻様は駄目だぞ？神なのだからな。」

「まだです、まだ助けます。」

季節外れの雪が降り始める。
雪女である小雪の行いか？
それよりも何故、小雪が北辰の元を離れるのだ？

「さて、北辰は」

「くどい！！！」

ハチが叫ぶ。

「アニキはもう助からないんだよ！！！」

「嘘だ！」

反射的に私は叫んだ。
聞きたくない！
理解したくない！

「上泉さん、何か言い残すことは？」

降り始めた雪が上泉の腕に触れた瞬間。

上泉の腕から紅い氷の塊が突き出た。

だが、そんなことよりも私は見てしまった。

力無く倒れる北辰の姿ではない。

「そんな弱った身体で私（妖怪）に刃向かおうなどと思わない事です。」

「ふっ、兄の誇りを汚してまで奪う命とは思えんがな。」

「その兄を殺したのは」

俺だろう。自殺みたいなものだよ。

刺さった刀を抜き彼はただ立ち上がり空を眺めていた。
掌に落ちた雪を彼は片目を開き見ている。

「北辰！」

北辰はいつものように笑っていた。

やっ、久しぶり。

謙信様も死んでしまったので？

そう、言い放った。

戦う者、沈み逝く者 肆（前書き）

謙信「なあ、無理やり感が丸出しなのだが？」

北辰「許せ。」

駄文だし文脈も台本も滅茶苦茶だが脳内補完してくれ。」

戦う者、沈み逝く者 肆

謙信様も死んだ

と、思ったけど違うみたいだ。

だって、今いる景色がどこことなく見覚えがある。

返されたのか、この場所に。

俺は季節はずれの雪を眺めながら思う。

普通に妖怪が増えてるんだがこれいかに？

そして

何故、妖怪や神が人の戦いに関与しているのか？

制約違反

「
返す。」

喉に刀が刺さっていたせいか声が出しにくい
上泉に刀を二本返す。

「兄様！」

小雪ちゃんが駆け寄ってくる。

「。何故約束を違えた。」

小雪ちゃんはまだいい。

妖怪が人間を襲うのは許容される。

俺は呆然としているモノの前に立つ。

約束を違える神様か。

「北辰。

良かった。」

「気安く呼ぶな。」

何故、謙信様は啞然としているのだろうか。

次は謙信様の方へ行く。

雰囲気も変わった、まだ荒いけど神降ろしも出来てる。

「……手から血が出てる。」

「あ、ああ。コレは先程つ、なつ、何を」

「……御身は武人である前に。

いや、俺が言うべきではない。」

氣を流し込み、血を止める。

まだ神秘が遺るこの時代だから出来たことだろう。

傷までは流石に人間の領域ではあるまい。

「で、上泉。お前は どうする？」

上泉は怪訝そうに俺を見る。

腹に溜まった血を外に吐き出す。

「死にたいなら勝手に死ね。
けど」

俺は手榴弾で滅茶苦茶になった庭を足で戻し始める。

「……ハチ、手伝って。」

ひとりじゃ面倒だ。

手榴弾使わなければ良かったかな。

俺は上泉と話していたのを思い出して続きを言う。

「良いのか？」

建て前に縋って死んでさ。」

俺は上泉を見て答えを促す。

くだらない意地だけど男に生まれたからには本能に焼き付いてる筈だ。

「最強への執着いや妄執か？
周りから剣聖と謳われて惚けたか？」

周りからもてはやされて強者の仮面を被って諦めた。
何時からがむしゃらに努力するのが恥ずかしくなった？

「俺達生まれたとき、そんな大層な誇り、持ってたのか？」

ただ、強く。

ただ、強くなろうとした男の末路はその過程で踏み越えてきた者と

同じように

死ぬべきだ

「北辰。

この腕、治せないか。」

上泉もアホな事を言うなあ

俺は櫻に視線を移し、俺が次に切り落とした腕を掴み櫻に投げる。暗に、治せという意味を込めて。

死に様はとことん醜く潔く這いずって死ぬべきだと俺は思う。ん？自分で考えておきながら我ながら意味分からん。

「<理>を開いたのか。」

大人しく治療を始める櫻を見ていると上泉に言われた。

「ん。違う、向き合わなかったただけだ。」

俺は腹を見る。

綺麗に貫かれてる、これなら縫わなくても治せるかな。

「私の<理>は醜くてな。

到るまでの道を見ないようにしていた。」

<理>それは辿り着いた者のみが得ることができた一つのルール。

よく、コツが掴めたと言って行動の成果が良くなることもあるだろう。

あれは思い出したと私は見ている、必要な能力と必要な技量をが合

わさり

本来出来る動きを、忘れていた動きを思い出したと考える。

<理>とは全てを思い出すための能力と技量が合わさった時に開かれる。

自己暗示

「強すぎる我<想い>は現実を変える。」

何でも出来るという解釈。

何でも出来るという感覚。

<理>を開いている時は誰にも負ける気がしないだろう？

武器が無くともさも武器を使ったようになるだろう？

それはそうだ、自分自身が世界であり最強であると疑わないのだから。」

懐から小さな箱を取り出して中から小さな筒をくわえ

地面に散らかっている松明の欠片を掴み小さな筒、と言っかタバコに火をつける。

「鍛えていれば喉を貫かれても話すことが出来る。」

まあ、感覚を麻痺させてるだけだから

戦いが終わった後どうなるかわからないけど

「ん？千百合。なんだその丈の短い服は。」

なんだこの娘は？

パンツ、いや褌が見えそうで見えないあのラインは。

エロいけど今は深夜だぞ？

城の兵士だって遠巻きに見てるのに。

「痴女か！」

「違う！」

「おお。元気だな。」

バチィ！と千百合の拳を受け止める。

「そういえば、こうしてハッキリと向き合つのは初めてだな。」

「なっ」

「ん？顔が紅いな。」

それと、腹の傷は寿命を縮
不老だったな。
なんでもない。」

タバコが一本、燃え尽きた。

上泉に話し掛ける。

「場所は？」

「此处でよい。」

「あつそ。じゃ終いにしようか。」

俺は改めて上泉を見る。

だからと言って何も無いのだけれど。

「あ、小雪。」

血が流れるから帰って。

ハチはこの戦い方は見なくて

」

俺は後ろを見て首を傾げる。

何故、小雪ちゃんが泣くんだ？

「な、んで、何で兄様と上泉さんが戦わなく

」

小雪から思わず吹いてしまいそうになる質問がされた。

「単純明快、上泉が俺の名前を知っているからだ。
聞かれる前に答える。」

日本の者に名前を呼ばたくない、ならば誰も知らなければいい。
つまり口封じだよ。」

追及はするなと意思を込めて答えた。

なんか今日の俺は饒舌だな。

もう明日から話さなくてもいいんじゃない？

「やっぱり場所を移すか。」

中庭を体液で汚したくないし。

「いや、此処で良い。」

その声に上泉を見る。

死にかけじゃないか。

確かに移動するだけでも辛そうだ。

「そつ。」

じゃあ

誰も口を出すなよ。」

釘を刺す。

女の子はさえずるのが好きだから。

「ところで上泉。

自分の強さを誇示するために人を殺す気分はどうなんだ？

いや、興味本位なんだけどな？

自分のワガママで人を殺める気分はどうなんだ？」

俺は上泉を見る。

「いや、責めてる訳じゃないんだ。

ただ、その戦う理由も生き方も理解出来なくてさ。

わかるよ？最強とか強いとかの証明に殺すのは。

でも、誰かを殺すって事は誰かの子を殺す事なんだぞ？

なのにお前等は素行が悪い態度が悪いと言って殺すだろ？」

謙信様や宇佐美さん、兼続殿を見る。

「どうして？」

時代が時代だからというのはわかってるつもりなんだ。けどな俺はお前等を只の人殺しと見たくないんだ。」

しかし、上泉は即答する。

「理由は無い。

明確な理由など有るはずがない。

その行為が正しいと思った、それだけだ。」

自分はそれで良いと思った。
今更、言われても困る。

と、まあこんな意味だろう。
変に飾らないだけ正直で人間の答えだ。
最終的に今更言われても困るだけだ。

「そんなんだから老いてから虚しくなるんだよ。
ま、安心した。」

それでこそ人だ。」

「北辰。」

義の反対はなんだ？」

上泉が腰を落として、虚空の中で刀に手を添える。
俺は一度咳き込み血を吐き出す。

落ち着いたら声が出しにくくなってきた。

確か、中国かどこかに不射之射という技巧があったな。

あれと同じようなモノを強烈な自己暗示で創り出してるのか。
では斬ったという事象を相手にトレースしているのか。

いや、斬られたと思うから思い込みで怪我が起きるのか。

結論的に<理>の延長線にある業だな。

斬るという概念が刀を離れたに過ぎない。

『刀で斬る』から『斬る事象の為に刀を用いた』に過ぎない。

『斬る』と言う事象をおこす依代に虚空の刀を置いただけだ。

上泉の斬るという<理>を現実の事象にするために

上泉は虚空に刀があると思っ込んだ、自らの望む刀を。

あの構えは<理>に到るための自己暗示か。
開くのではなく到る。

一瞬の事象を起こすために一瞬だけ<理>に到る。
それもそうだ<理>なんてもの開き続けたら身体が保たない。

特殊な体質でも無い限り。

よし、結論は出たな。

俺は懷からタバコを出し、火をつける。

二本、数少ないタバコを消費した。

身体が重くなる。

けれどこのくらいがちょうど良い。

いままでの状態は車でいうギアと速度が噛み合っていない状態だった。

だから、このタバコ（毒）で調整する。

「 義の反対だったか？

義だよ。

義の反対は別の義。

それに、義ってなんだよ？

そんな事考えながら戦ってるのかお前は。

そりゃ 大層なご身分だな。」

俺はタバコを吸い終わる。

戦いの合図はない。

けれど、ひとりで二人は動く。

ひとりはただ強さの証明の為に

ひとりは誰かの願いを果たした後の惰性故に

強さには様々なモノがある。

力

技術

経験

上泉と北辰

技術と経験は明らかに上泉が上だった。

いくら北辰が誰よりも戦場に居ようと時代が違った。

個対個が主流のこの時代。

自己を鍛え抜くことを生き甲斐とした狂った時代で戦い抜いた上泉に技術や経験で勝てる通りは無かった。

しかし、北辰だけがもつ強さがある。

それは

「そうか。」

俺の足下から声が聞こえた。

「羨ましいな、結局だがその強さだけは手には入らなかった。」

俺は脚を上げる。

「お前も俺の強さが何かは教えてくれないんだな。」

多分、戦いの多様性

そんなところだと思う。

俺は足下の蹴鞠程のモノを見る。

「最期がお前で　良かった。」

そうか。

俺は無感動に義務的に脚を下ろした。

何度も経験した堅い感触と共に
身体からなにかがストンと零れ落ちたような気がした。

戦う者、沈み逝く者 肆（後書き）

許せ

その後1（前書き）

出張出張るーるーるー
迷走嫌いな人はすぐバック
遅くなりかたじけない。

その後1

兼続 side

北辰は変わった。

人と関わるのを避け始めた。

あの事件からだ。

我が上杉家の名が飛躍的に広まった北条家との戦いと攻略からだ。

北辰は喉を痛め滅多なことでは言葉を紡がなくなった。

そして行動も読めなくなった。

ふざけているのか真剣なのか

「北辰。とりあえずこつちに来て座るといい。

茶ぐらい出すぞ。」

私は、部屋の襖をすばーん！と開き

何故か鍬を担いでいる北辰へと呼びかけた。

北辰は一瞬、びくりとなると一瞬、思案した顔になりこちらにきた。

「それで？

次は何をする気だ？」

私は北辰を正面に座らせて見る。

北辰は懷から紙を出し広げる。

図面か？

前に北辰から興味本位で教えて貰ったことがある。

私は図面を見たあと北辰の姿を見る。

完全に農民の格好だ。

「さて、脱げ。」

その言葉に北辰は目を見開く。
そして、私の発言をかえりみる。

脱げ

「違う！待て！！勘違いするな！」

北辰がすすすつと間をおく。

「違うと言っているだろうが！」

私は茶菓子を投げつけた。

それを北辰は受け取って食べ、北辰の茶菓子を私の前に置く。

「交換がしたい訳じゃ無いからな！？
その納得の言った表情を止めるお前は！」

「最近。」

低く、耳に強く残る声が響く。

正確には、重い。

何故か真剣に聞き入ってしまう。

「最近、なんだ？」

私は僅かな緊張を宿し、聞き返す。

「小雪ちゃんが甘えてくる。」

「よし。私の緊張を返せ。」

この馬鹿は妹好きが過ぎるのではないか？

目の前の男は何を真剣な口調で言っているのか。
すると急に目の前の男、北辰が服を脱ぎ始める。

「なっ、なな。何をしておるのだ！」

私は思わず目を背けハッとして前を見る。

そこにはもう北辰の姿は無かった。

私は溜め息をついて図面を剥がす。

先日同じことをやられたのだ。

北辰の遊び心かそれとも何かの対策か。

そこには北辰からの報告が書かれているのだった。

北辰 side

兼続殿から見事逃げおおせた俺は南へ降りていた。
場所は朝倉家の領地。

「
久々の出番だぞキクゴロー。」

俺は猫に話し掛ける。

一見、気が狂った行動に思われるが

この猫は知猫と言って人語を話すことができる。

「ただ、ついてきてるだけだよ。」

さて、町へ入るか。

キクゴローの“あれ？僕のいる意味無い？”と言う呟きは聞こえなかった。

ああ。聞こえなかったとも。

俺は抜け道から城下町に出る

意外と城が近い。

俺は手を組んで腕を伸ばす。

「

行くか。」

と、呟いたら懷に入れたキクゴローが噛みついてきた。

駄目か 流石はお目付役。

全く、城に忍び込みとは言わなかったのに何故バレた。
俺は振り返り歩き出す。

服装は農民チックな服装だから問題無く紛れ込む。

が。

やけに女の子から視線を感じるのは何故だろう。

俺は、適当な脇道に隠れた。

「髪が白いからか？」

「北辰北辰。違うよ。」

顔が昔のだらけた顔じゃないから浮いてるの。」

確かに、最近は真面目な顔で生活しているけども。

何故にそれで女の子の視線が？

「北辰って鈍感だよな。」

うん。女の子の視線はまあ、気にしない。
そこで、女の子の叫び声。

とりあえず、俺は跳躍して屋根の上に登る。
町の娘とガラの悪い男がいる。

そして、割って入るようにした鎧姿の武将。
俺は、屋根から降りて近くで見ることにした。

（ほう、朝倉宗滴か）

顔を見るのは二回目だ。

もう少し幼い頃に一回と、戦場で一度見かけた。

（名将だな。

個人での実力、集団での統率力も朝倉家の中で群を抜いている。）

忍耐強く精強な朝倉の将兵たちからの絶対の信頼。
北陸の地最強と謳われる武将か。

町娘「も、もしかして 朝倉宗滴様ですか!？」

大男「ああ!？」

そして町娘は朝倉宗滴の背中にすがりつく。
キクゴローが懷から顔だけ出して呟く。

「あれじゃまともに動けないよね。」

俺は首をかしげる。

「普通は動けないの。」

俺は頷く。

確かに普通は無理だよな。

そう思いながら見つめる。

朝倉宗滴の退けという言葉に

大男は宗滴の忠告など聞くつもりは無いと言う様子で
にやにやと下卑た笑いを浮かべている。

「お前みたいな女顔したやつが朝倉宗滴とはねえ
る。」

笑わせ

女顔？女だろ。

哀れな男だな。

「噂なんてものは 以下略」

さて、その罵倒にどう返す？

「そなたの言うことはもつともかもしれない。

噂で流れるほど私は素晴らしい人物ではない。

現にそなたの愚かな行いに、怒りを感じている。」

「な、なんだとお！？いけしゃあしゃあと！」

「本当は血を流すようなことはしたくないのだが、そなたのような
下衆には

直接的な制裁が一番だと心得ている。」

宗滴が怒ったのは朝倉家を馬鹿にしたからだろつ。
しかし、後ろに娘をつけて動くのは危ないな。
現に大男の罵りを宗滴は冷静に見つめる。

俺はごく自然にできてくと後ろから大男に近づく。

「そなたは」

宗滴が俺に気付く。

俺は手を軽く上げて挨拶の意とする。
そのまま大男の肩に手を乗せる。

「ああ？」

「相手と時期が悪かったよね。」

キクゴローが俺の変わりに言う
俺は足を振り上げ顎を蹴り上げる。

「そのまま至極反省すると良い。」

哀れな男を見ながら宗滴は言った。
むう。

あれだな、宗滴の生き方は昔の俺に繋がる場所があるな。
何かキクゴローが、失礼なこと考えてない？
とか言ってくるけど聞こえないな。

「逃げるか。」

俺は娘を返す宗滴を背中に見ながら歩き出した

帰り道

「失礼。始祖 北辰殿とお見受けする。」

眼前にはお侍様が二人

懐には変な猫が一匹

そして変な名前の俺独り

そろそろ、余生を楽しみたいのだからなあ。

あの日からだ、表立って上泉を殺したあの日以来、よく狙われるようになった。

力をかざす者は力から逃れられない。

上泉は強者だ。

ならば俺も自惚れる訳じゃないが強者という扱いなのだろう。

強者は弱者に追われる

その

摂理に

輪廻に

組み込まれてしまった。

弱者が勝手に決めた弱者（強者）に。

「
」

俺は上泉の刀を抜く。

あの後、上泉の部屋から俺宛に置いてあったものだ。

これ以上、喪う記憶も

喪ってはならない何かも無い。

「行くぞ！」

切りかかってくる侍に峰で斬る。

一人

二人

骨はバキバキだが運が良ければ助かると思う。

暴力には暴力で

不殺もやめた

友達を殺めて見ず知らずの他人を殺めないのはおかしいから。
刀を鞘に戻す。

「何考えてるの？」

懐のキクゴローが聞いてくる。

「何故、俺は友達を殺したのか。」

そして、何故、その友達の顔も思い出せないのか。

「北辰。今日は八チの訓練に付き合っただけでしょ？」

「
。彼女に任せてきた。」

「あの北辰に似てる娘？」

「俺の、もう一つの可能性だよ。」

春日山城訓練場ハチside

「あら？もう終わり？」

目の前の女が気軽に言う。

真っ白な長い髪。

出るところは出て締まるところは引き締まっている体つき。

「いきなり出てきて、聞きたいことは山積みだけど、どうしても聞かなきゃ駄目な事がある。」

俺の拳を指二本で受け止めるオンナを睨む。

「聞くだけ聞いてあげる。」

「何故、そんなにもアニキに似ているんだ。」

その雰囲気グツ！言葉グツ！行動グツ！

無性に苛々する。

目の前のオンナの全てが。

そのオンナは見知った雰囲気の微笑みを浮かべ言う。

「彼に、北辰に習わなかった。」

俺はその場で蹴りを繰り出した。

急に現れたこのオンナが気に入らない。

「もういい、無理矢理聞き出す！」

しかし目の前のオンナを尚も笑い言った。

好きよ、そういうの。

その後2（前書き）

すみません

文法めっちゃめっちゃ

繋ぎめっちゃめっちゃ

構成めっちゃめっちゃ

です

脳内補正して下さい！

残業尽くしで時間が無いなり

その後2

これはちよつとしたホラーだなあ

訳あつてキクゴローを甲斐の天城颯馬に預けて春日山城に帰つてきた時、

兼続殿が俺の服を掴んで訓練場に連れてきたのだ。
そして、兼続殿は俺の背中を押す。

どうにかしろ、と言わんばかりに。

いや、体操座りを行使する家（北辰家）の飛脚をどうしろと？
見たところ喧嘩して負けた感じだな。

あれか？

こう、何故次は勝とうという努力をせん小娘？とか言う場面なのか？
しかし、うん。あれだな。

面倒くさくなつてきた。

「おい！北辰！？」

「
敗者にかける言葉など無い、まだ生きている。

」

生きているだけで充分だよ。

「まったく、自信をつけさせすぎなんじゃないの？」

後ろから声がかかり女がしなだれかかってくる。
髪は白い髪だ。

「梓か。
かもしれんな。」

一度負けたからといって落ち込むのはいただけない。

「あ、はじめまして“兼続殿”
北辰の梓です。北辰の姉してます」

何故だろう、梓の言葉にトゲを感じる。

「姉だと？」

「まあ。そう言う事です。」

「夢は北辰を嫁に貰うことです。」

「　　實力は保証します。うん。
他は妄言です気にしないで下さい

ハチ。今日からは梓に鍛えてもらえ。」

やばい、兼続殿の目が怖い。
こつ、後で裏来いやボウフラが、みたいな目だ。

「そんな！何故ですか！？」

ハチが急に元気になって反論してくる。

「自分が一番わかっているだろう？
俺は忙しい、飛脚の任も解いてやる、励めよ。」

「じゃ、この子貰ってくから。」

「待てよ！離せ！何でお前なんだよ！
アニキ！アニキ！？アーニーキー！」

俺はにこやかに手を振って見送る。
梓も気に入ったみたいだな。
すると後ろから優しい声色の声がかかる。

「北辰。」

宇佐美さんか。

「あの娘。
本当に北辰のお姉さん？」

俺は横目で兼続殿の顔を伺う。
うおう。見られてる。

「重要な事でしょうか？」

宇佐美さんがコクリと頷く。

「何故？」

俺は息をついて振り向く。

「 えっ? 」

「 何? 」

二度言わなくても言葉は伝わっている筈だ。
俺は宇佐美さんの目を覗き込む。
何故知りたいのかを教えて欲しい。
知ってどうするのか。

「 いじわる。 」

しかし、宇佐美さんの行動は俺の想定外だった。
普通に頬を膨らませてらっしゃる。
え? なにこれ可愛い。
長い付き合いだけどこれは想定外。
ここまで癒される方とは思わなかった。

「 おっしゃるとおりで。 」

「 なんで、いじわるするの? 」

いじわるしてる訳じゃ無いんだよ。
どう返したものが、俺は考える。

「 隠し事? 」

「 宇佐美さんも隠し事の二つや三つあるでしょ? 」

「 ない。 無いよ。 」

マジか。

まあ、知りたいこと無いから別に良いけど。
俺は黙って首を左右に振る。

「。」

「北辰は少し前から目を見て、話さなくなったよ？
上泉との戦いからじゃない、もっと後から。」

「宇佐美さんは卑怯です。」

「身体の傷もまだ治ってないのだろう？」

「謙信様も、心配してるよ？」

「心配するべきは逆でしょう。」

朝は訓練に参加し昼は町を廻り夜は政に向かい合う。

謙信様の方がよっぽど辛いと思うのですが？

毘沙門天の加護を得ているとはいえ、謙信様は人間であり女子でし
よう。

ましてやソレが当たり前となると、余りにも残酷でしょう。」

そこで咳き込む。

いきなり喋りすぎた。

「話がそれましたね。」

彼女の事は彼女に聞いてください。」

喉がイガイガする。

「宇佐美さんも傷が癒えていないでしょう。」

加えて兼続殿も先日、傷が癒えたばかりだ。

そうでしようと言っかのように兼続殿を見る。

俺は喉を触る、鈍い痛みが伝わる。

今はまだ話せないし話すべきでもない。

でも、追求を止めさせるにはどうするべきか。

「。」

「北辰？難しい顔をしてどうしたのだ？」

流石は軍神。

全部持つてくなあ。

「これは、その、えっと」

「け、謙信様！？これはそのですね。

そう！な！？北辰！」

俺はちらつと宇佐美さん（爆乳）と兼続殿（貧乳）を見る。

なに？（乳）の意味？無いよ。

（雑！何という雑な振り方！）

（ごめん、後お願い。）

（仕方ないだろう！）

（仕方ない上に何故に俺に振るんですか？）

（お前の口先八丁で誤魔化せ！！）

（正直に言えば良くないですか？

兼続殿と宇佐美さんが俺を虐めてくる的な事を。）

（意地悪なのは北辰だよ。）

（宇佐美さん？もしかして怒ってます？）

（怒ってない。）

（宇佐美さん感情が高まると早口になりますよね。）

以上がアイコンタクト。

謙信様の事となるとアイコンタクトも完璧だな。

「北辰？」

「ハチを姉に預けましてね。

その理由を聞かれました。」

すると謙信様は少し驚いた表情になって言う。

「よくハチが素直に従ったな。」

「、、、、それはこう。うん？」

俺は考える。

「　　まあ、俺の姉ですし？」

「そ、そうか。」

何故か説得力があるな。」

そうだよな。

俺の評価なんてこんなもんさ。

所で謙信様は何故に此処へ？

そんな疑問を察したのか謙信様はクスリと笑う。
こんな邪気の無い笑みをどうして出来るのか。

「北辰、私と戦わないか？」

うん。

謙信様がグレた。

「　　謙信様。悩み事や俺に至らない事があるなら言って下さい。」

今までの引導を渡してやる、と言うわけですね？わかります。
しかし、こんな突拍子のない言葉の意味を

「　　もしかして梓に会いましたか？」

「すごいな、何故わかるのだ？」

謙信様も驚いたように聞いてくる。

なるほど、八手を叩きのめしてその後、謙信様に会いに行ったのか。

「行軍訓練的な意味ですか？」

「そのつもりだが？」

びつくりした、サシの決闘かと思った。

「北辰の隊には凄腕の者がいると聞いたのだが」

「戦い以外には顔を出さないですからね、彼奴等は。」

そうか、よくよく考えたら謙信様はウチの隊を余り知らないんだな。ウチの隊とは小雪ちゃんに住む本家から来た兵達の事だ。

多分、謙信様の言う凄腕とは前にスカウトした同種の事だ。

あの時は確か八手が構って貰えないってふてくされていたなあ。

「話だけはしてみますが、何分自由な奴等なので全員揃うかはわかりません。」

「??? 梓は話はついたと言っていたのだが？」

謙信様の言葉を聞いて俺は頭を押さえる。

「そ、それに梓から北辰の傷はあと一月で治ると聞いたのだ。」

なるほど、調子を取り戻しがてらと言うわけですね。

すぐに行うかと思つてた。
でも、何故に模擬戦？

「北辰、私は北辰の事を何も知らない。」

「これはまた答えづらい。」

「北辰とて重要な事まで語る気は無いのだろうか？」

俺は無言の肯定で返す。

「だから、戦おう。」

私は武士として生きてきたからな、この方法しか無いのだ。
それに、言葉よりも得るものは多いと考えたのだ。」

漢らしい。

あれ？なにこの漢前？

普通にかっこいい。

「言葉は不完全で曖昧です。」

謙信様が何を知りたいのかは知りませんが、否定はしません。
俺にも語りたくない事があります。

戦うことで貴女が満足するならば、戦いましょう。」

謙信様は複雑な表情をする。

「語りたくない、か。」

北辰にとって語りたくない事を知ろうとする私は北辰には醜く見えるか？」

俺はその言葉を聞いて笑う。

謙信様が何か言おうとするが先に言葉を繋げる。

「どうぞ、お好きなように。」

そこで、1人の女の子が現れる。

「北辰。そろそろ帰るぞ。」

千百合ちゃんだ。

見た目は完全に人間だけど実は妖怪。

明日はもがみん 最上家に遊 手伝いに行く日だからな。

「北辰？どうした。」

「なんでもないよ。ちーたん。」

すると千百合ことちーたんは目を丸くさせる。

俺は一礼してちーたんの方へ向かう。

「行かないのか？」

「後で追いつく。」

「そうか。」

では謙信様、楽しみにしておきましょう。」

上杉家と遊びとはいえ戦える事を。

俺は女の子同士の会話を聞くのも悪いと思い場を後にした。

お・ま・け

「何かあったのか？あれほど楽しそうな北辰は久々に見た。」

「いや、北辰の傷が癒えた後の事を話したただけなのだが。」

「ん？結婚するのか？」

的な会話があったと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2826p/>

突発的に戦極姫（上杉ルート）

2011年9月28日15時51分発行